

---

# 彼は転生者ですか？いいえ、クローンです

結晶犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼は転生者ですか？いいえ、クローンです

### 【Nコード】

N6889T

### 【作者名】

結晶犬

### 【あらすじ】

昔、図書館島で発見されたミイラを魔帆良工学部の生物工学科がクローンとして生んだ男が今目を覚ます。この物語は、クローンとして生まれた男、アビスの（彼が住んでいる家の住人による暴力という名の）愛と（主人公がどんどん腹黒くなっていく）成長の物語である。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、結晶犬と申します。

今回のこれが初投稿となります。

感想などございましたら、なんでもどうぞ

## プロローグ

『こちら地上班、調査班応答してくれ』

図書館島。

増え続ける蔵書の数に合わせて、次々に地下へと増築を繰り返し、今ではその全てを把握している者などいないのではないか。と言われている。

そしてようやく、というかいい加減、地下をちゃんと調べて地図を作るうよ。という意見が大学部の方から出たため。

先日、調査隊が発足。

探検隊のメンバーは主に図書館探検隊のメンバー計20名で地下に向かっていった。

「こちら探索班。

中は、快適、最高なり。

つか、自動販売機のジュースが分け分かん。

何だよ？塩ミルクって？」

『気にしたら、負けだ。

それより、地図のほうはどうだい？

上手く書けてる？』

「ビミョー、道と判断していいのかわからんのが多すぎる。

只今、地下15階にいる。

次の定時連絡は一時間後だ。

後、地下だからマジ涼しい。最高です」

『ガンバ。』

了解した。

一時間後にまた連絡取ろうぜ。

嫌味だな？嫌味なんだろ？帰ってきたら、マジ殺す』

通信を切り、通信機をポケットにしまった調査隊のメンバーの一人はふと、周りの光景を見てみた。

水が流れているのに本が湿らない。自動販売機がある。

そして一番の疑問。地下なのに、明るい。

調査隊の一人の彼はずっと疑問に思っていた。

それはこの図書館島だけのことだけではない。

この麻帆良学園全てに対して疑問があった。

彼は高等部から麻帆良学園に通っているが、外とかなり違いがある。それは単なる違い程度ではない。

外の世界では、ただの学校にここまで大きな図書館を作るだろうか？

この図書館は、戦争を逃れるためにたくさんの本をこの図書館島に持ってきたというが、それは本当だろうか？

戦争というのは間違いなく太平洋戦争ということで間違いはないだろう。

だが、それにしても多すぎではないだろうか？

当時の日本は、今と違いかなり本は少ないはずだ。

いや、それでも当時としてはとても多いほうなのだろう。

しかしそれでも、この量はおかしいのではないだろうか？

この本の数は、仮に戦前の日本から全て持ってきたとしても絶対に数が合わないだろう。

だとしたら、どうやって　。

「オーイ！何やってんだ？そろそろ出発するぞー！」

「あいよー。」

今行くから待ってくれ」

あれ？何考えていたっけ？ま、いいや。

「急げよー置いてくぞー！」

やべ、急がないと。

仲間の元に向かおうとしていた彼に先ほどまであった疑問は完全に消えていた。

それは何故かは、彼は知らない。

いや、知ろうとしても、知る術も無くば、気づくことさえないのだから。

……

……

……

それから暫くした後。

そろそろ帰ろうかという考えが彼らの頭の中に出てきたとき、それは見つかった。

「オイ！こっちだ！」

「何だよ？何だよ？これから大富豪始めようかと思っていたのによ」

「んなこたあ、どうでもいいよ！ミイラだよミイラ！」

「はあ？ミイラ？お前、基地の外の人？」

「お前後で殺す。」

本当だつて！こっち来いよ！」

調査隊の一人が口にしたミイラという言葉。

その言葉を聞いて、他のメンバーがゾロゾロと集まってきた。

「こっちだよ！ホラ！」

「…本当だ」

「うわっ、マジかよ？」

「チョーリアルー」

それは間違いなくミイラだった。

テレビに出てくるようなエジプトのミイラな感じに包帯でグルグ

ル巻きにされているわけではないが、完全に干からびていたことからこれがミイラだと推測できる。

ミイラは椅子に座っており、ここで命が果てたのだろう。

「…ど、どじするっ。」

「いや、どじするって言ったって…」

「な、なあ、持って帰らねえ？」

「」「はあ!？」」「」

「お、おま!？馬鹿!？」

「いや、工学部の友達がさ。

なんか、クローンを作ったとか言ってたからさ。

……面白そうじゃね？」

「いや、面白そうって、お前…。」

まあ、面白そうだけども…。」

「じ、これさ…。」

結構丈夫そうじゃね？気をつけて持っていけば、大丈夫だって？」

彼らは皆、この図書館島を調べにきたのだ。

だからこそ、何かそれなりに自分たちは何かをやったんだぞという証拠がほしい。

「……べ、別に、…良いよな？」



「あ、…ああ。そうだよ。別に…良いよな?」

その言葉で決まった。

……  
……  
……

1989年8月2日未明、麻帆良学園図書館島地下の地図作成を目的とした調査隊は、地下にてミイラを発見。

同年同日午後8時、調査隊はミイラを持って地上班と合流。

事前に連絡を入れておいた工学部生物工学科の者らが、ミイラを保存。研究を始める。

8

翌三日午前6時、生物工学科は発見したミイラが着ていた服から免許証らしき物を発見。

しかし、損傷が激しく身元の確認は不可能。

我々は3時間の議論の末、ミイラを『アヌビス』と名づけた。

理由としては、ミイラであるため、エジプト神話の死の友の神アヌビスからとったものである。

ちなみに、最終候補としては、ポチ、タマ、M I I R Aさんというのがあった。

8月20日正午、生物工学科はかねてより考えられていたアヌビスクローン計画を実行することにする。

ただし、生物工学部は毎年予算が少ないために、来年から実行す

る物とする。

…ひもじいぜ…。

1990年4月1日、今年度の予算が下りた。

しかし、何故か予算が去年の三分の一しか下りず我々はデモを開始。

だが、大変遺憾なことながら、デモは開始五分後に鎮圧された。

……クソツタレ…。

1990年7月22日、夏休みが始まった。

工学部の連中に生物工学部一同全員で土下座をしてお金を借りる作戦、オペレーション・DO GE ZAを発動。

効果は抜群であり、工学部の連中から金を借りることに成功。

ウハウハである。

1990年8月2日、遂にアヌビスクローン計画始動。

やることは機密につき、ここには記すことはできない。

だが、何故か教師人がこつちのことを見てくる。

……失せる、蚊トンボ！

1991年4月1日、最悪の事態が発生した。

今年度の生物工学部の新入生とがおらず、学園は来年度で閉校するとかほざきやがった。

くたばれ、ぬらりひょん！！

1993年3月1日、まだアヌビスのクローン化には完全に成功していない。

しかし、時間さえあれば何とかなる。

翌2日、我々は工学部のほうに再びオペレーション・DO GE

Z Aを実行。

効果は再び抜群であり、アヌビスは工学部のとある一室に置かれることになった。

我々の計算では、アヌビスが死亡した時と同じ体になるのは2003年の夏ごろと思われる。

その時に、アヌビスが人として立派に生きていけることを、我々生物工学科最後の卒業生一同、心から切に祈っている。

## 第一話【培養液の中でも服着れたらいいのに】

夏。

麻帆良学園工学部の研究室の一室で一人の少女が唸っていた。

「うーん。やっぱり、おかしいネ？」

「何がおかしいんですか？」

モニターの画面を見ながら唸っている少女に眼鏡をかけた少女が問いかけた。

彼女の名前は超鈴音。チャオリンシエンこの麻帆良学園最高の頭脳を持つ何でもござれの無敵超人である。

そして話しかけた眼鏡の少女は葉加瀬聡美。超には及ばずとも学園トップクラスの頭脳を持つ者である。ちなみに、あだ名はハカセ。分かりやすいものである。

「ん？ハカセか…。  
いや、ちょっと暇つぶしに工学部の過去のデータを漁っていただけネ」

「それって、いけないことじゃ…？  
でも、それがどうかしたんですか？」

「うーん。どうも、電力の計算が合わないんだネ」

「は？何処がですか？」

そう言って、ハカセは超が見ていたモニターを覗いてみると、確

かに計算が合っていないようだった。

計算で出た工学部が使用している電力の数値は99.98%。

この0.02%が何処に使われているのが、超は気になっているのである。

「確かに、0.02%もどこかに使われているなんて、どうして気がつかなかったんでしょう?」

「さて、準備を始めるヨ」

「は?どこかに行くんですか?」

「決まってるネ!謎が私を呼んでるヨ!」

「何時から冒険家になったんですか!?」

という感じで、超の気まぐれから全ては始まる。

と言っても、彼女らが始めたのは電力の供給先を調べて、その部屋がどこにあるのかを割り出すだという単純な作業だ。

だがしかし、問題が発生した。

「……………どうなってるネ?」

「いや、どう、と言われましても…」

「何で!?!ただか部屋の一つを見つけないことも、出来ないのネ!」  
「?」

「そんなこと言われても、実際存在しない部屋なんだからしょうが

ないじゃないですか…」

そう。彼女らが探し始めて既に一時間ほどの時間が過ぎたのだが、一向に見つけることができないのだ。

いや、電力の行き先は分かったのだが、その部屋がこの麻帆良学園工学部に存在しない場所なのだ。

何を言っているのか分からないかもしれないが、事実、電力の供給先に二人は向かってみたのだが、そこにあつたのはただの壁しかなかったのである。

無論、壁の向こう側に何かがあるのでは？という考えもすぐさま浮かんだのだが、壁の向こう側にあるのは外であり、何も無いのだ。

「あゝ、止めネ！今日はもう休むネ！」

「えゝゝ？この後、茶々丸のメンテナンスですよ？また私一人でやるんですか？偶には手伝ってくださいよ？」

「働きたくないでござるヨ。というわけで、私は一階のカフェで休んでいるネ」

そう言って、超はノロノロと一人、研究室から出て行った。

……

……

……

「ハアゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ…」

工学部の一階のカフェに書いてから超は一人ため息をついていた。それはもう盛大な、とても盛大なため息であった。

「おや？どうかしたのかね？」

そんな彼女の様子を見かねたのか、工学部の年配の教授が一人話しかけてきた。

「ん？あ、教授。いえ、なんでもないネ」

「ハハハ、そうかね？」

「…ところで、相席してもいいかね？」

「どうぞネ」

「では、失礼するよ」

そう言って椅子に腰を下ろした教授は優しげな顔をして超を見つめている。

思えば、この年配の教授は超がこの麻帆良学園の工学部に所属してから何かと相談事に乗ってくれたりしている。

いくら超が学園最高の頭脳を持つといっても、彼女はまだ中学二年生の少女なのだ。

故に、年寄りの自分が彼女の悩みにつき合うのは当然のことだ。というのが、この教授の考えであり、超自身もそれを容認している。

「それで？今度はどうかしたのかね？」

……もしや、恋でも？」

「それは無いヨ。ただ、ちょっとだけ厄介ごとがあっただけネ」

「つまりは、壁にぶつかった…ということかね？」

「それでいいヨ。」

……だけど、半ば興味も薄れてきたネ」

超がそう言うと、教授は「ハハハ」と軽く笑っていた。

別段、超もそれに対して怒るといった感情は無い。この工学部に  
いる者は全てそういうことを経験しているからだ。

「……興味も薄れてきた…か…」

彼らが聞いたら、…きっと怒り出すだろうな…」

「彼ら？」

「ああ、……今から、…そう。ちょうど、十年位前だったかな？ミ  
イラが見つかったんだ」

「ミイラ？何処からそんなものが見つかったんだネ？」

「図書館島だよ。」

その頃に、今で言う図書館探検隊の前身の図書館島調査隊というのが  
発足してね。大学のみんなが図書館島の地下の地図を作ろうと  
したんだよ。

あの時は、私も驚いたよ。突然、『ミイラを見つけたんだ！早く来  
てくれ』という連絡があったね。

今はもう無いけど、生物工学科の生徒達が一斉に図書館島に向かっ



ていったんだよ」

「それで…そのミイラは…？」

超の方も気になっていたのか。先ほどまでとは違い、熱心な顔で聞いている。

それを見て教授は顔に笑みを浮かべて、続きを話した。

「勿論、直ぐに保存して運び込んだよ。そしたら、急に彼らはこう言ったんだよ。」

『こいつのクローンを作ろう！』とね。思わず呆気にとられたよ」

「……でも、もう生物工学科は…」

「まあ、クローンなんて作ろうとしたツケかね？」

生物工学科は次の年から新入生が入ることを学園町の指示で禁止されたよ。その末が、………君も知っての通りだ…」

新入生が入らなくなれば、自然と生物工学科はなくなる。当然の話だ。

その時、超の頭で何かが引つ掛かった。

「教授、その…クローンはどうなったネ？」

超がそう聞くと、教授は目を瞑って静かに

「……廃棄されたと、私は聞いた…」

そう呟いた。

その言葉は、明らかに辛そうな声であった。

彼からしてみれば、かなり辛いだろう。

彼は、工学部の生徒を始めてとして、大勢の人間に好かれている。その理由としては、彼の人間性。

どんな境遇の人間であろうと、大切な生徒として、一人一人語り合ったりするからだ。

そんな彼からすれば、卒業した生物工学科の生徒達に対してとても辛い思いなのだろう。

だが、超はそこに若干、ほんの少しだけ違和感を感じたのだ。

「…廃棄？誰からの指示だったのネ？」

「…近衛学園長からだよ」

その瞬間、超は違和感の原因が分かった。

目の前にいるこの教授はこの学園にある秘密を知らない。だが、この学園の裏に何かがあるということについては勘付いてはいる。

魔法。

一般人が聞けば、まず間違いなく鼻で笑うだろう魔法がこの学園の秘密である。

魔法は実在する。それはこの麻帆良学園だけの話ではない。

この世界。この地球上に魔法を使える者は大勢いる。存在だけを知っている者であれば、さらに多くいるだろう。

話がずれたが、この教授は恐らく、いや、間違いなく嘘をついている。

この教授は物事を考える能力が凄まじく高い。だったらなおさら、

気がついていないはずだ。いや、気づかないはずが無い。そのミイラが図書館島の地下から発見されたということは、間違いなくそのミイラはこの学園が隠したがるような物だと。

だからこそその廃棄処分。だからこそその生物工学科の消滅。

「（……面白そうだな）」

超は自分の中でそのミイラに対して興味が湧いてきた。学園の魔法使い達はその存在を消したがるほどの曰く付きのミイラ。

そして、先ほどまでの一件。存在しない部屋に対しても再び興味が湧いてきた。

この工学部の建物は前に一回改築されている。

その時の改築を提案したのは今自分の目の前にいるこの教授だ。

つまり、この教授は嘘をついてる。

ミイラは廃棄されていない。そして、恐らくクローンも廃棄などされていない。

寧ろ、完成が近いのだ。

だからこそ、人に秘密を教えたりしないこの教授は彼女にそれを教えたのだ。

そのクローンを超に託すために。

「……面白いお話をありがとうね。教授。

今度、何か研究に付き合おうよ」

「そうかね、それはありがたいよ。

では、私はこれで失礼させてもらおうよ」

「教授、一つだけ教えて欲しいヨ。そのミイラの名前は…何というネ？」

「……………アヌビス……………」

教授は超のほうを向かずにはいた。

その声は普通ではあれば聞こえないくらい小さい声だった。だが、超にはしっかりと彼女のその耳に届いていた。

「ありがとうネ」

「どうぞ致しまして」

今度はこちらに振り向いて顔にいつもの愛想のいい笑みを浮かべていた。

そのまま教授はその場を立ち去っていった。

残された超も暫く何かを考えているようだったが、すぐさま立ち上がり、その場を後にした。

……………

……………

……………

夜。

時計の針が十二時を過ぎた深夜の中、麻帆良学園工学部の建物の外では二人の少女が話をしていた。

一人は超。もう一人は金髪の少女。彼女の名前はエヴァンジェリン。

彼女は魔法使いである。しかし学園の魔法使い達と彼女は違う。仮に学園の魔法使い達が正義と称されるならば、エヴァンジェリンはその正反対の自他共に認める悪の魔法使いだ。

「んで？何でそのミイラを探すのに、何故私まで手伝わねばならないのだ？」

「ん？暇そうだったからヨ。それに、魔法については私よりもエヴァンジェリンのほうが詳しいから万が一の時は頼むネ」

「…ハア、まあいいだろう。」

暇潰しくらいにはなりそうだな。少しだけだぞ」

少し待つと、二人の元に二人の少女が近づいてきた。いや、厳密に言えば、一人と一体なのだが。

「すみません。お待たせしました」

「マスター、お待たせしました」

一人は右手に何かの書類を持ってきたハカセ。

もう一人は茶々丸。外見からして人ではないのは分かるはずだ。

「ハカセ、例のモノはどうだったネ？」

「バッチリですよ。」

改築後の設計図ですね？これです」

「フム、…やっぱりネ。  
教授も中々やるネ。確かに、何も知らない一般人が見ても、気付くことはまずないヨ」

「オイ、何もすることがないなら、私は帰るぞ?」

「あ、待つて欲しいネ。

………フム、エヴァンジェリン。こっちヨ。私について来て欲しいネ」

「チツ、しょうがないな……」

舌打ちをしながらもエヴァは超についていき、ハカセと茶々丸もそれに続く。

四人は工学部の建物には入らず、外側を歩いている。  
すると、あるところで超が立ち止まった。

「…ここネ」

「オイ、何も無いぞ?」

「ちょっと待つネ」

エヴァの言葉を見無視し、超は壁をペタペタと触るとある一点で手を止めた。

手を止めると、今度はその一点をペタペタ触っていると、10cm四方の部分がパカッと開いた。

中にあるのは、何かのパスワードを入力するような装置が入ってあった

「見つけたヨ。」

茶々丸、パスワードの解析よろしくネ」

「了解です。超」

そう言っつて茶々丸は壁の前に立ち、開いた壁のところに入れた。

しばらくの間再び静かになったが、少しすると、何か鍵が開いたような音が周囲に響いた。

すると、何も無かった壁が開かれ、その後ろからドアのようなものが現れた。

「いよいよご対面ネ」

「超さん。顔がとてつもない悪人顔になってますよ…自重してください」

「どうでもいいが、入らないのなら先に入るぞ」

「あ、待つネ！私が一番ヨ！」

「超、声が大きいですよ」

すぐさまドアを開けてみると、そこにあるのは部屋ではなく、地下へと続く階段であった。

超を先頭に四人は階段を降りていった。

「それにしても、……随分とまあ、良くやるものだな」

階段を降りると、そこには八畳ぐらいの部屋があった。その部屋は至るところにケーブルやらコードが繋がれており、壁にはモニターがあり薄暗い室内を不気味に照らしていた。

「ハカセ、モニターから調べられることを可能な限り調べて欲しいネ」

「了解です」

「それで、これが仏様ネ」

部屋のちょうど真ん中に位置する場所にそれは置かれていた。長い間、掃除されていなかったためか、やや埃を被っている。

そして、部屋の一番奥、入り口から見てすぐ見える位置に、外からは中が見えないようにされてあるアヌビスと書かれたカプセルがあった。

「超さん。ある程度データは吸出ししました。それと、クローンの方は既に完成したようです。どうします?」

「フム、だったらとりあえず、一度研究室に戻っ

戻って、と言おうとした時。

【警告、カプセルを開放します】

「……………誰がボタン押したネ?」

「私だ。何か文句あるのか?」



もうこの際、どうにでもなればいいネ…。  
そう思っていると、カプセルの中にあっただのである。培養液のよ  
うなモノが、カプセルの上に繋がれてあったチューブから抽出され  
ていく。

そしてカプセルから培養液が全て吸出しが終わる。

【デッデッデデン、デッデッデデン】

「BGMがター○ネーターとは、何かセンスありますね」

「私は2が好きだったぞ」

カプセルの扉が開かれると、何故か周りからドライアイスの煙が  
出る。BGMといい、恐らく仕様なのだろう。

「かなり凝ってるネ」

ドライアイスの煙が出ていると、カプセルがついに開き、中から  
全裸の男が

「汚いナニを見せるなー！ー！ー！」

「ジョー！ー！ー！」

鳩尾に入ったエヴァの拳によって沈められた。

第二話「もう止めてくれ！俺のライフはマイナスだ！」（前書き）

週に二回投稿が限界かな？

とりあえず頑張ります！

## 第二話「もう止めてくれ！俺のライフはマイナスだ！」

朝、時刻にして7時半を回ったあたり。  
今の季節は夏真っ盛りの8月である。

この麻帆良学園は寮制の学校であり、夏休みである今も、実家に帰省していない者たちはこの学園で暮らしている。

しかし、とある事情により、寮では暮らさず別の所に住んでいる者もまたいる。

麻帆良学園女子寮を離れた森の中に建てられたログハウス。  
そこに住む、エヴァンジェリンと茶々丸。そして、もう一人が朝食を食べていた。

「茶々丸、味噌汁おかわり」

「はい、どうぞ」

朝食　それは、1日の始まり。

朝食　それは、人の1日を決めるモノ

朝食　それは、人を元気にするための

「うざったいわー!!」

「ブレックファスト!?!」

鳩尾に入ったエヴァの拳によって、茶々丸から味噌汁のおかわり

を受け取る寸前、男の体は椅子から吹っ飛ばされた。

彼の名はアヌビス。

かなり短い黒髪と黒目の二十代前半のような男である。

本来であれば、彼はこの家に住んでいない。

だが、とある事情、……いや押し付けから、彼はこの家で一晩を過ごし、この家で朝食を食べていたのである。

「いい加減にせんか！―貴様、それで何回おかわりしている！？」

「……じ、十四回……」

「どう考えても食いすぎだ！―自重しろ！―」

「……だ、だって、……おいしいんだ……もん」

「恐縮です」

両手にアヌビスに渡すはずだった味噌汁が入ったお碗を持ちながら、アヌビスの言葉にお辞儀をする茶々丸。

食器が立ち並ぶテーブルの上に仁王立ちしながらアヌビスを睨み続けるエヴァ。

床に伏しながらも右手に持つ箸でたくあんを掴んで離さないアヌビス。

率直に言っ、直前の話を知らないこの状況を見れば必ずこう言うだろう。

「カオスネ」

「カオスですね」

そう言うだろう。

「む？超にハカセか…。

早いとここの馬鹿を引き取ってくれ。昨日からコイツの面倒を見て疲れているんだ…」

「悪いけど、それはかなり難しいネ」

「……………何？」

超の言葉にエヴァは眉をひそめた。

時間は少し前に戻るが、昨夜、アヌビスが目覚めた直後のことだ。エヴァがアヌビスの鳩尾に当てた一撃によって、完全にノックダウン状態になってしまった時に遡る。

……………  
……………  
……………

「ハアハア、……………何だその目は？」

「なんでもないヨ。茶々丸、この人、まだ生きてるか確かめるネ。後、その壁にあるツナギもついでに着させといて欲しいネ」

「了解です」

先ほどのアヌビスの姿を見て平気そうな顔をしているが、若干類が高潮しているのは、まあ当然と言えよう。

とりあえず、茶々丸は超に言われたとおり壁にかけられてあつたツナギをアヌビスに着せる。どうでもいいが、彼女はロボである。よって、あまりそういうモノを見て恥ずかしいと思う感情は、今のところ、持っていない。

「さて、用は済んだんだ。私は帰らせて貰うぞ。

……… 退屈しのぎにもならなかったしな……」

「あ、待つネ、エヴァンジェリン。この男、ちょっとだけ預かって欲しいネ」

「……… ハア？ 何で私がそんな男を預からなくちゃいけないんだ？ そっちで何とかできるだろう？」

「悪いけど、私とハカセはこのミイラを持ち帰るのに大変ヨ。だから、頼むネ。今度、なんか奢るヨ」

『奢る』というその言葉にエヴァは考える。

何を奢るといふかについては超は何も言っていない。つまり、自分が何を要求したとしても『奢る』と超が言ったので、自分は何を要求したとしても特に文句を言われる筋合いは無い。

「……… まあいいだろう。その代わり、今の言葉忘れるなよ」

「ありがとネ」

（さて、どうせ要求するとしたら何かしらの高級品のはずネ。

だったら、先にこつちが大量の血液パックでも渡せば、モーマント  
イネ）」

「なら、帰らせてもらうぞ。

茶々丸、その男を担げ、帰るぞ」

「はい、マスター。

失礼致します。ハカセ、超」

そう言っつて、先に地上に出た二人。

すぐさま彼女らが住んでいる女子寮から少し離れた家に帰ったの  
だが、帰った早々盛大な空腹の音と弱弱しい男の声が彼女らの耳に  
届いた。

「……………」

「ん？腹が減ったのか？」

「いえ、マスター。こちらのお方はそう言っつてはおりません」

「何？じゃあ、なんと言っつてるんだ？」

「……………ようじよ、…」「ワイ…………」

「よし、殺すか」

そう言っつて、茶々丸が背負っていたアヌビスの体をうつ伏せにな  
るように床に置き、彼の足をそのまま腰のところまで持ち上げた。  
プロレスでいう、さそり固めの形である。

「ぎゃあああああああ！！腰が、腰があ！！止めて！！止めてくださあい！！！！」

足が曲げられる限界を超えてしまったためアヌビスの全身に強烈な痛みが伝わったのだろう。

彼の意識は先ほどまでの状態とは正反対といつくらい完全に覚醒していた。

「ならば、今の言葉を取り消せ！！」

「取り消します！！取り消しますから、命だけはあ！！！！」

アヌビスの声を聞いて足を放すエヴァ、放してもらっても痛みはまだ残っているらしく、アヌビスはまだ床にうつぶせに倒れていた。

少しすると、ゆっくりとだが、アヌビスが何とか立ち上がってきた。ちなみに涙目である。

「大丈夫ですか？アヌビスさん」

「ん？アヌビス？誰のこと？」

「貴方のことです。アヌビスさん。  
生物工学科が生んだクローン。貴方はご自分の現在の状況をご存知ですか？」

「待て茶々丸。何でお前がこのクズの名前を知っているんだ？」

「クズ！？ひどっ！？」



「先ほど、マスターと合流する前に八カセから資料をお見せいた  
いた為です」

「そして、クズの部分に何のツツコミも無い!？」

「オイ、クズ」

「しかも、何か俺の名前それで固定されてるし!？」

「まあ、それは今は置いておきましょう」

「……酷いイジメを受けております。

誰か助けて下さい」

「オイ、ゴミクズ」

「……ふぁい?何ですか?」

アヌビスの今の心の状態を簡単に説明すると、「激流に身を任せ、  
同化する」という感じである。

だからこそ、逆らうという選択肢を彼は自分から捨てたのだ。そ  
の選択は決して間違いでないと、彼はひたすら信じている。

「お前は今夜一晩だけウチで預かることになった。

だが、少しでも妙なことをした場合、……ワカツテイルナ?」

その言葉を聞いた時、アヌビスは思った。

「(何か、俺の人権とかその他諸々、完全に無視されてるよね?)」

「分かったなら返事をしろ」

「了解でございます」

「ならいい。茶々丸、私は寝るぞ。

……………ウジ虫、お前は床で寝てる」

「ああ、もう人として扱ってくれないんですね？初めから分かっていたよ……」

体育座りして泣いていたとしても、エヴァは見向きもせずになささと階段を登って行ってしまい、アヌビスはただ泣き続けているしかなかった。

彼は思った。

「(……………生きるのって、…辛いなあ……)」

アヌビス。

この世に生を受けたのは大分前だが、目覚めてから未だ1時間程度しか時間は過ぎていない。

かなり、可哀想なものである。

だが、捨てる神いれば、捨てる神あり。

神は、未だ彼を見捨ててはいなかった。

「…大丈夫ですか？」

「……………君はええ娘や……」。

後、大丈夫かどうかと聞かれれば、答えは大丈夫じゃない」

「ハア、そうですね。」

それと、私の名前は茶々丸と申しますお見知りおきを。  
それと、お聞きしたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「いいけど、何？」

「…何を覚えていて、何を知っているんですか？」

「……は？」

一瞬茶々丸の言うことが全く理解できなかった。  
まあ、無理も無いだろう。

「……えっと、質問の意味が分からないんだけど……」

「申し訳ありません。」

しかし、超からこう聞くようにと言われておりますので

「えっと、覚えているって何も覚えていないよ？  
だって、ずっと培養液の中にいたじゃん」

「しかし、知識はある程度あるようですね」

「みただね。」

「ご都合主義乙って奴？」

「さあ？」

「……………」



「ちょ、まつ、…Noooooooooooooooo!!!」

現在の状態を説明すると、アヌビスは床にうつ伏せになる状態になっており、その上にエヴァが乗り、アヌビスの顎を自分のところまで持っていく。分かりやすく言うなら、カメラクラッチである。それをソファに座りながら若干頬を引き攣りながらそれを見ているハカセと超。

茶々丸は台所で朝食の片付けをしている。

補足だが、現在アヌビスの顔は顔面蒼白である。

「と！こ！ろ！で！こいつを！何で！私が！預から！ない！と！いけない！んだ！！」

「ちょ、まつ、そこは、らめええええええ！！」

「あゝ、実は、昨日の一件が学園長にバレてしまったのヨ」

「ギブギブギブ！！」

「は！？だから何だ！？」

「タイムタイム！！もう限界！！」

「いやゝゝ、ウチに何故か監視が来てしまって、だからそっちで預かって欲しいネ」

「ヘルプヘルプ！！ヘエエエエエルウウウウプウウウウミイイイイイイ！！！！」



「駄目ですよ、超さん。」

いくら本当のことでも、あえて言わないのが人というものですよ。」

「……聞こえているぞ、きさ……ま……らっ？」

ふと感じた違和感。

何かを感じる。力をほとんど封じられた今の自分でも忘れるわけがないこの感じ。

魔力。

それは一人の男から少しずつ、にじみ出るように溢れていた。

最初、この男からは魔力なんてものは、そこらへんにいる一般人と同じレベルと感じていた。

だが、それは間違いだった。

アヌビスから感じる魔力は、一般人が少しばかり鍛えた程度ではない。

だがそれは、今感じられるにじみ出る程度の魔力だ。

「オイ超、この男何者だ？」

「……ただのクローン、魔法もなに知らないただのクローンヨ」

「ふん、まあそういうことにおこつ」

超も心の中では気づいているのだろう。

だが、言わない。それはつまり、自分がいまだ魔法に対して完全に関係する者ではないという証明であろう。もっとも、エヴァと関わっている時点でかなり疑われている状況だが…。

「なるほど、あの爺が監視を付ける理由が良く分かった」

「なら、預かって欲しいネ」

「……ヴィンテージ、五本だ」

「四本で頼むヨ」

「……まあいいだろう」

「さて、それなら私たちは帰らせてもらおうヨ。  
ハカセ、行こう」

「ハア、ですが大丈夫でしょうか？」

「何が？」

「DV的な意味で」

「……さ、帰るヨ」

「（あ、見捨てた）」

そう言ってやはり後ろめたい思いがあったのか、超はそそくさと逃げるようにエヴァの家から出ていった。

「マスター、超とハカセはもうお帰りになりましたか？」

「ん？ああ、そうだ茶々丸、物置から『別荘』を持ってこい」



「はい、……ですが、何故急に？」

エヴァは茶々丸のその質問には答えずに、ただニヤニヤとした顔つきであり、茶々丸は「ああ、またアヌビスさんが酷い目になるんだな」と彼女のAIはそう判断した。

そんな茶々丸を目に入れず、目の前で倒れているアヌビスをエヴァはずっとニヤニヤした顔つきで見っていた。

アヌビス。

彼は今、三途の川を見ているだろう。だが、もう間もなく彼は目を覚ます。

そして、目を覚ました彼が味わうのは、確実に自分の体を感じる痛みだろう。

**第三話「残念！アヌビスの冒険はここで終わるようだ！」（前書き）**

前回、週2になるとか言っときながら、週1になりそうな予感がするこの頃…。

### 第三話「残念！アヌビスの冒険はここで終わるようだ！」

「ぎいやあああああああああ！！！！！！」

「逃げてばかりでは勝てんぞ！！」

暑そうな日差しの中、魔帆良学園とは明らかに気候が違う場所。魔帆良にあるはずがない南国の海に囲まれている建物の屋上に一人の男の悲鳴が響き渡る。

「無理無理無理無理無理！！勝てるわけない！！」

「だったら、私に殺される！！魔法の矢、氷の15矢！！」

「に”やあああああああああ！！！！！！」

大きく広がっている広場を一人の男が逃げていて、もう一人の少女が魔法で男を追っている。

言わずもがな、男のほうのアヌビスで、少女のほうのエヴァである。

そもそも、何故こんな状況になっているか、それは超とハカセがエヴァの家から出ていった後のことである。

.....  
.....  
.....

アヌビスが気がつくとは自分はうつ伏せで横たわっているというのが分かる。

彼は思った。

何故だろう？こつやつて横たわっている今が茶々丸が作ってくれたご飯を食べた時くらい幸せだ……。  
だけど、どうしてだろう？この幸せが後10秒も持たない気がする……。

アヌビスの思ったとおり、彼の幸せを破壊する者がやって来たのはちょうど10秒後だった。

「オイ、起キロ」

「無理です。」

ていうか、起きたくないです。  
起きたら殺されると思います。

だから、このままそつとしてください」

「ナラ、……死ネ」

ヒュツと、何かが空を切る音がアヌビスの耳に入った瞬間、彼は反射的に体を動かしていた。それが本能的なものであったかどうかは別としてだが。

反射的に体を動かした後、先ほどまで自分が寝そべっていた場所を見てみると、一本のナイフが突き立てられていた。

「ケケケ、ヨク避ケタジャネエカ」

「……………見間違いかな？人形が立ってるよ」

「見間違イジャネエヨ」

「……………じゃあこれ夢だ」

「リアルダ、ウジ虫」

「人形にまでウジ虫呼ばわりされた!？」

「ケケケ、才前エノコト八今ノ所ウジ虫ツテ呼ンデヤレッテ、御主人の命令ナンダヨ」

「何て野郎だ！テメエの御主人の面を見てみたいぜ！きつとやまんなばみみたいな面に違いない！」

「ほう？誰が、やまんばみみたいな面だつて？」

「そりゃ、この人形の言う御主人とやら……だ……よ……？」

一瞬の静寂。

そして

「死ね!!」

「拒否権発動!!」

「却下だ!!」

「ヘルプミー！茶々丸ー！！」

.....  
.....  
.....

という感じでアヌビスとエヴァはただいまワンサイドゲームの真  
っ最中である。無論、エヴァが優勢なのは言うまでもない。

ちなみに、茶々丸はエヴァの命令により助けていない。

「ホラホラ、どうした！？今度はさっきの倍だぞ！魔法の矢、氷の  
30矢！！」

「だから無理だつて！こつち丸腰なんだよ！勝てるわけ…ぬおおお  
おおおお！？」

エヴァの周りから発せられた氷の塊のようなものがアヌビスの近  
くの地面に当たり、その衝撃がアヌビスに及んできた。今までとは  
パワーが違うのを感じた。

自分は勝てる以前に、目の前にいる少女の姿をした化け物相手に  
生き延びることが出来るだろうか？そんな考えがアヌビスの頭に浮  
かんでくる程、彼は切羽詰まった状態なのだ。

「ご慈悲を！貴女に慈悲の心があるのなら、この哀れな子羊にご慈  
悲を！」

「だが断る！氷爆！！」

「ぎいやあああああああ！！！！」

エヴァの言葉と共に、アヌビスの近く凝縮された冷気が一気に放たれたような爆発が起こり、冷気がアヌビスを襲うも、ギリギリのところを避けることができたのは一般人という観点から見れば、奇跡のようなものだろう。

「（……奇跡？違う、奴は知っているのだ。そうでなければ説明がつかん。」

先ほどの魔法の矢、今の氷爆も知っていなければ、避けることもできないはずだ」

そもそも、エヴァがアヌビスをこうやっていたぶっているのにも一応、一応の理由がある。

エヴァが彼を引き取るきっかけはやはり、先ほどのアヌビスからにじみ出た魔法にある。

ただの一般人レベルの魔力ならば特に興味もないのだが、アヌビスの場合は違う。

超は気づいているかは分からないが、アヌビスの魔力の量はとてつもない量だというのは推測できる。

それこそ、魔法世界の英雄、ナギ・スプリングフィールドに及ばずとも遠からずといったところだ。

それこそが、エヴァがアヌビスに興味を持つ理由だ。  
ストレス発散という理由もあるのだが…。

「さて、もう後がないぞ？この後はどうするんだ？」

そして遂に、いや、よく粘ったほうだろう。

それでも、とうとう隅に追いやられてしまった。





自分から落ちていくにしても、あの落ちかた、某世紀末のキングのような飛びかたでは確実に正面から飛び込む形になる。

つまり、海面にぶつかった瞬間

「ぎいいいいいいやあああああああああ！！！！！」

「ほぐら、言わんこつちやない。

茶々丸、あのバカを拾って来い」

「分かりました」

茶々丸に降りていくのを視界の端で確認すると、エヴァはそのまま建物の中へと歩いていくと、先ほどアヌビスにナイフを突きたてようとした人形　　チャチャゼロが話しかけてきた。

「オイ、御主人。

アノ野郎殺シニ行カネエノカヨ？」

「……………疲れた。さすがに、久々に魔法を使いすぎたな」

「ケケケ、御主人ガアンダケ魔法ヲ使ツテモ、一発モ当たらナイナ  
ンテノモ面白シロカッタゼ。

ドンダケ手抜イテイタンダヨ」

「フン、全部当てる気でいたさ。

……………本気でな」

「ソレヲ全部避ケルトカ、何モンダヨアイツ」

「分からん。だが、面白そうな奴だということは事実だ。まあ、いたぶると、かなり楽しいというものもあるがな」

「不憫ナ奴ダナ」

そう言い終わると、不敵な笑みを浮かべたエヴァはそのまま建物の中に入っていった。

.....

.....

.....

危うく海の漂流者になるところだったアヌビスだったが、エヴァの命令を受けた茶々丸によって何とか助けられたが、完全に気を失っていた。

それから一時間、まだ眠り続けているアヌビスである。かなりの疲労が溜まっていたのだろう。

彼が目を覚ました瞬間鳩尾にエヴァの拳が入り、その後エヴァのさそり固め、再び鳩尾へのエヴァの拳、エヴァによるキャメロクラッチ、先のワンサイドゲーム。  
疲れないほうがおかしいものだ。

「どうだ茶々丸、まだ起きんのか？」

心配して来たのかどうか極めて怪しいが、一応ご本人曰く心配してやって来たエヴァがいまだ眠り続けているアヌビスの元へとやってきた。

「…ハッ!? マスター!? え、あ、はい、アヌビスさんはまだ寝て  
おります」

明らかな挙動不審。

チラチラとアヌビスのほうを見ている茶々丸を見てエヴァは確実にそこで寝ているアヌビスに何か言われたのだろうと簡単に推測した。というか、できないはずが無い。

「……そうかそうか、ではこのバカをここで殺しても、コイツは文句も言えない内に死ぬわけだな?」

「あ、あの、マスター」

「しかし、猶予を与えるというのも面白そうだ。三つ数えるうちに起きたらやめてあげなくもないぞ?」

「……ひ」

「はい起きました! だから、やめてくださいえあ!!??」

ひとつと、数える間も無く速やかに起きたアヌビスであったが、起き上がった瞬間エヴァの蹴りが顔面に直撃してしまい、そのまま勢いよく壁にぶつかっていった。

「…な、何で…?」

「私はやめてあげなくもないと言っただけだぞ?」

「……あ、悪魔……」

「悪魔？違う！私は悪の魔法使いだ！」

デデンと、後ろからいかにもそんな感じの効果音が聞こえる感じだが、何も知らない人が見れば、幼い少女が大人ぶっているようにしか見えないものである。

「さあ立て！今すぐさっきの続きをやるぞ！」

「ヘルプミー！茶々丸ー！」

「あの、マスター、アヌビスさんはお疲れのようですよ、もう少し却下だ！」…分かりました」

「裏切られた！？孤立無援であの地獄をまた見ると！？」

「さっさと、立て！なんならここで…ん？」

先ほどの続きをやるぞ！そうエヴァは言おうとしたが、そこであるものに彼女は気づいた。

「貴様、服を変えたのか？」

「いや、当たり前でしょ？さすがに、濡れたままは無いですよ？バカなの？死ぬの？」

「ほう？死にたいようだな？」

「嘘です！申し訳ありませんでした！」

即座に土下座。

最早、彼の心にプライドという物は存在していないのだろう。

「チツ、まあいい。」

なら、その両腕にある刺青はなんだ？」

「は？刺青？」

そう言われて正座したまま自分の両腕を見てみると、確かに刺青があった。

腕の真ん中に描かれてある一本の剣の柄に包み込むように三本の線があり、その三本の線が手首までうねるように模様を描いていた。

「ほんとだー。何時の間に？」

「初めからありましたよ」

「というか、何故気づかん？」

「だって、ずっとツナギ着てたじゃん」

「それもそうですね」

「……とりあえず、見せてみる」

「……え？」

エヴァに見せてみるといわれた瞬間、アヌビスの顔には世界が終わったような表情が広がってきた。

「あー、とって食うわけじゃない。早く見せてみる」

「嘘だ！絶対俺に何かする気だろ！？」

「オイ茶々丸、何でこのバカはこんなに疑り深いんだ？  
私がかしたか？」

あれだけのことをして自覚がないというのは、ある意味ですごいものである。

結局、この後としてはアヌビスがボソリと呟いた一言を聞いたエヴァがアヌビスを絞め落として、気絶したアヌビスを茶々丸がまた運んでいった。今度は地獄へだが。

.....

.....

.....

「さて、今度は飛び降りてもさらに追撃するぞ？」

「何か起きたら、またこのムリゲー始まったし！」

「では、…再開だ！」

先ほどと同じくワンサイドゲームが始まったのだが、今度は先ほどと違い、あつという間にまた隅に追いやられてしまった。

「（考える、カッコいいアヌビスくんが目の前の化け物少女に勝つ  
.....は無理でも、生き延びるための選択肢は？」

一、当たって砕ける。

二、もう一回、飛び降りる。

三、残念！現実是非情である！

……ロクな選択肢がねええええ！」

絶体絶命。まさにその言葉に尽きる。

そして、そう考えているうちに一歩、また一歩とエヴァはアヌビスに近づいていく。

「（正解は三でしたってか？ふざけんなよ）」

エヴァの周りに魔法の矢が浮かんできた。数はどんどん増えている。

「（……終わった……）」

短いものだったな。ああ、茶々丸のご飯もつと食べたかったな……」

「もう諦めるのか？なら

」

浮かんでいた魔法の矢が一点に向けて動き出す。

狙いは無論、アヌビスにだ。

「（……でも、ここで終わるとか、面白くないよな？

だったら）」

「終わりだ。

魔法の矢、氷の30矢！！」

「諦めるなんて、つまんねえだろ！」

爆発。

アヌビスに向けて放たれた魔法の矢が何かにぶつかり、当たる前に爆発した。

しかし、放たれたのは氷の矢。爆発など起こるはずもない。だが、爆発は起こった。

さらに悪いことに、エヴァにはそれ以上を考える時間はなかった。

「……！？チツ！」

爆発によって生じた水蒸気が壁になってエヴァからはアヌビスのほうを見ることが出来ず、向こうも同じと思って油断していたせいで、水蒸気の壁の向こうから飛んできた物に一瞬だけ反応が遅れてしまった。

飛んできたのは、剣。

だが、ただの剣ではない。銃剣、黒鍵、小太刀等の投擲を目的とした剣がエヴァに向かって飛んできた。

「チツ、小賢しいマネを！」

アヌビスもエヴァのほうが見えないためか、投げられた剣はほとんども明後日の方向に向かっており、エヴァに向かってきたのは、一本か二本程度だったので簡単に避けることができた。

だが、避けるという行動は失敗であった。

避けるという行為は彼女の神経をそれ全てに回してしまった。

油断があったのだろう。

だがしかし、もう少しだけ周りに注意を回していれば、気づいて



いたかもしれない。

一閃。

エヴァが感じられたのは、自分の体が何かに斬られ、体が二つになっただけ。

切り離された上半身から一瞬だけ見えたいつの間にか自分の後ろにいたアヌビスの姿。

そこにあつたのは、先ほどまでの『逃げ』の目ではない。あるのは『勝つ』という明確な意思を持った戦士の顔だ。

「……………合格だ」

エヴァの呟いた言葉はその言葉のとおり、彼女がアヌビスを認めた。

ただそれだけのことであり、それ以上でもなければそれ以下の意味はなかった。

……………

……………

……………

それから約三十分後。

「エヴァンジェリン、一つ聞いていいか？」

「エヴァで構わん。で、何だ？」

「じゃあエヴァ、この状況について説明してくれ」

アヌビスの頭上にはグツグツと熱そうな湯気をあげる熱湯が入った水瓶がある。

いや、それはおかしいか。

正確には、アヌビスの今の状況は両手を後ろで縛られ逆さまに吊るされており、その頭の頭上…いや、頭下？に水瓶に置かれてある。

「何でこんなことしやがる！？理由を説明しやが…してください。  
エヴァンジェリン様」

「……まあいいだろう。説明してやる。  
何故なら」

しやがれと、命令形で言おうとした瞬間、側にいたチャチャゼロがアヌビスを吊るしているロープを切ろうとしたため、一気に口調が下手に出てしまった。

その様子を見たエヴァはニヤニヤと顔にいやらしい笑みを浮かべ、口を開いた。

「私が面白いからだ!!」

「くたばれ!!クソガ…ガボボボボボ!!」

アヌビスが言葉を発した瞬間、チャチャゼロがロープを切った。すると当然、アヌビスは落ちる。グツグツと湯気をあげる熱湯の中に。

~~~~~」

熱湯の中にいるせいで言葉は聞こえないが、明らかに痛みを訴えているのは分かる。

そして、熱いのだろう。いや、笑い事ではなく、冗談抜きで本当に熱いのだろう。ずっと、足首を縛られてなお、バタバタと、いや、バツタンバツタンと足を動かしている。

「心拍数、急激に危険域に向かっております。  
マスター、さすがにそろそろ……」

「ん？そうだな、さすがに死なれたら困るな。チャチャゼロ、切ったロープを引っ張れ」

「アイサー、御主人」

そう言われてアヌビスは引き上げられたが、既に満身創痍の状態であり、虫の息であった。

「で？クソガ……なんだって？」

「……………死ぬ、幼女」

「落とせ」

~~~~~」

こうして、アヌビスはエヴァからの歓迎を受けた。

だが、果たしてこれが歓迎といえるのだろうか？それは、気にしてはいけないというものである。

第四話【はじめてのおつかいと寄り道】前編【】（前書き）

感想が一切ない。

誰か、感想を下さい。

#### 第四話【はじめてのおつかいと寄り道（前編）】

セミがうるさく鳴いている中、アヌビスは一人エヴァの家の周りを竹箒を使って掃除していた。

エヴァが言う『別荘』という場所で歓迎という名の釜茹で地獄を味わってから既に十日ほど過ぎており、アヌビスもある程度、この麻帆良学園での生活に少しずつ慣れてきたアヌビスであったが、一つだけささやかな願いがあった。

「……………学園ヲ見テミタイダ？ソナン、御主人ニ許可トラズトモ好キニスレバイイジヤネエカ。

……………ザ…惨殺」

「いや、そんなこと言われてもエヴァに釘を刺されてるんだよ。

『勝手に外に行くんじゃないぞ！』って。

……………つ、つ、ツンデレ」

頭の上にチャチャゼロを乗せて竹箒を掃きながらチャチャゼロと話をしているアヌビスを見たら、まず間違いなく変人と思われるだろう。

だが、ここらへんは人がほとんど来ない森の中だ。だから特に問題はない…はず。

「ケケケ、ソナンモノ無視シチマエヨ。

…レ、轢死」

「その末に俺の息の根が止まるんだな？

テメエ、分かりきってるようなことを言うんじゃないよ。

……………鹿」

「ダカラコソ言ッタンダヨ。  
大人シク御主人ニマタ殺サレテコイヨ。  
…感電死」

「おいおい、またつて何だ？またつて？  
…し、し、し…紳士」

「知ッテルゼ。  
昨日モ御主人ニ殺サレカケタソウジャネエカ  
…出血死」

「……………ハハハ、よく知ってるじゃねえか…。  
何処で聞いてたんだ？  
……………し、し、し、…し…参った」

「ケケケ、コレデ二十五連勝ダナ」

「強すぎだよ。しかも何で、殺とか、死とかで全部いけるんだよ？  
いくらなんでも、しとつだけで勝てないよ」

そう言つて、掃いている竹箒を持って家に戻っていった。元々、  
ゴミもあまり落ちていなかったため簡単な掃除だけだったのだ。  
竹箒を片付けて暑い外からエアコンの効いた部屋の中に入ると、  
真っ直ぐ冷蔵庫に向かう。

「ん〜と、み〜ず、み〜ず、と」

「オイ、コッチニモナンカ寄越セ」

「へいへい、わかりましたよつと」

とりあえず、自分の分の飲み物を取ってからチャチャゼロの分もとりあえず出すが、基本的にチャチャゼロは動けないので、アヌビスがコップに注いだりして、尚且つ彼が飲ませなければならぬ。なにも知らない人間が見たら、確実に引くだろう。

「おーい、エヴァ？何か飲むか？」

二階で寝ているエヴァにそう問いかけるが、返事はない。

エヴァは今、夏バテなのだ。

真祖の吸血鬼である彼女だが、今はとある事情により力が使えない。

その理由を聞いてみたところ、首を180度回転されかけたので詳しいことは分からなかった。

その後、チャチャゼロに聞いてみたところ、サウザントマスターと呼ばれる男にエヴァはぞっこんだったらしいが、フラれてしまっただらしい。

その時、サウザントマスターから貰った呪いのせいで、エヴァは十年以上もこの学園で暮らしているらしい。

その後、アヌビスがテレビを見ている時、エヴァはアヌビスに四字固めを一時間以上もやっていた。

理由はムシャクシャしたからだそうだ。アヌビスが反論すると、窓から落とされた。

まあ、なんだかんだでアヌビスも毎回毎回無傷に近いので特に問題もなかったが…。



「エヴァ〜？おーい、エヴァ〜？」

二回も呼び掛けるも返事はない。

「……………分かったぞ！」

エヴァは死んだ！そうと分かれば赤飯だ！

茶々丸ー！今夜は赤は……………ギヤアアアアアア！！！！」

騒いでいるアヌビスのところにエヴァが投げたのであろう魔法薬の入った試験管降ってきて、ちょうどアヌビスの目の前で爆発が起こり、爆風がアヌビスを吹き飛ばした。

「…うるさいわ！後、聞こえているから静かにしろ！」

「……………アイサー……………」

「ケケケ、ザマア」

ぶずぶずと黒い感じに焦げたアヌビスであったが、この程度でめげるような奴ではない。

やられたのならやり返せ。ついこの間覚えたこの言葉を元に、彼はエアコンのリモコンを持ってエヴァの部屋のエアコンの電源を切る作戦を開始した。

なんとも、嫌味な作戦である。

「フッフ、待って…ギヤアアアアアア！！！！」

もつとも、階段を上ろうとしたところでまた魔法薬の入った試験管が飛んできて、またもや爆発で吹っ飛んでしまったという結果に終わってしまった。

「……強ク生キロヨ」

「……あざーす……」

これで何回こんな言葉を貰ったんだろうかと、ぶすぶすと焦げながら思うアヌビスだった。

「ただいま戻りました」

「ああ茶々丸、お帰り」

「はい、……その状態ついては……?」

「ツッコまないで」

「……分かりました」

「あんがと」

焦げた状態のまま五分くらいして、茶々丸が買い物から帰ってきた。

「……茶々丸、昼飯何?」

「…冷やし中華にしようかと」

「ふーん」

言葉だけだとかかなり気のない返事だが、顔はメチャクチャ嬉しそ

うな顔をしており、僅かだが涎もでている。

「アヌビスの分は作らんでいいぞ」

「何言ってるんだ？この幼女は…ヒデババ！！？？」

二階から降りてきたエヴァの言葉に反論した途端に、喉仏にエヴァの手刀が入った。

「何か言ったか？」

「……………何も言ってますん」

「ならばよし」

最早、どちらが上かどうかなど、赤ん坊でも分かるような光景であった。

そんな光景を他所に、茶々丸はさつさとキッチンのほうに向かい、準備を始めようとしたのだが、戸棚を開けたところであることに気づいた。

「……………あ、これは……………」

「ん？どうした？」

「へ……………るぶ……………みい、ち、ちやちや……………ま、る」

エヴァの声に振り向いてみると、そこでは何故かエヴァがアヌビスの首を絞めており、アヌビスの顔は青白いを通り越して、既に白色しか残っていない。

「いえ、先ほど買い物に行くときには気づかなかったのですが、飲み物が何点か切れておりますので、後程買いに行こうかと」

「なるほど、分かった」

「おは、な……畑、き……れい、だ……」

その言葉を最後にアヌビスの意識は暗い暗い底に落ちていった。

……  
……  
……

「というわけでお前が行ってこい」

「その前に説明を希望します」

「よし、行ってこい！」

「普通に無視されちゃった!？」

時刻は昼過ぎ。

太陽が真上を通りすぎ、気温が最も暑くなる時間帯になった頃。

一人の男がまた家主の命令でこの炎天下の中、おつかいに出かけることになった。

その男とは、言わずもがな（自称）みんなのアイドルのアヌビス

であり、彼を送り出そうとしているのが、（アヌビス称）悪の帝王ことエヴァである。そしてそれを不安げな顔で見ているのが（アヌビス称）優しさの女神こと茶々丸である。

「えつと……買い物……？  
でいいんだよな？」

「ウム、買う物はこのメモに書かれてある。そして金も渡した。  
というわけで行ってこい！」

そう言われて、何か裏があるのではと思いメモを見てみるが書かれてある内容は特に問題はない。

単純に、ニリットルの清涼飲料水を二種類それぞれ二本ずつ、特に問題もないはずだ。

「……どうした？念願の学園を見て回れるのだぞ？  
もっと喜ぶべきじゃないのか？」

「……いや、…誰だお前？」

「は？」

「エヴァはお前みたいに優しくねえよ！」

エヴァっていうのはな！もっと残忍で冷酷で、人としてロクでもない奴なんだよ！

だからフラれ……イ”エ”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！！！！！！

バチバチバチ！とスタンガンで体中に電流が流れ、悲鳴をあげる。  
しかし、感じた電気はただのスタンガンとは比べ物にならないく

らいの痛みだった。

「……………それ何？」

「前に超に貰ったスタンガンだ。

……………改造したな」

「……………おk、…把握した」

既にボロボロの状態であるアヌビスを清々しそうな顔で送り出す  
辺り、エヴァのアヌビスに対する鬼畜度もかなり上がってきている  
のだろう。

そんなこんなでエヴァから財布と店の地図が書かれた紙を渡され、  
レシートも貰って来るようにと言われ、アヌビスは遂に麻帆良学園  
に進んでいった。

だが、せめてその時エヴァのほうを振り向けば良かったかも知れ  
ない。

そうすれば少なくとも、この後の地獄を見ることもなかったかも  
知れない。

もっとも、既に手遅れなことなのだが…。

……………

……………

……………

「あの、マスター。

よろしかったのですか？」

「ん？何かだ？」

アヌビスが出かけてから三十分後。

家でリッチな感じにくつろいでいるエヴァに茶々丸が問いかけた。

「いえ、先ほどのアヌビスさん送り出してよろしかったのですか？」

「あゝ、そのことか。

特に問題はないだろ」

「ですが」

「大丈夫さ」

そう言うエヴァの顔にあるのは信頼の表情。

「アイツはそんじょそこらのヤワな連中とは違つ。  
だから、大丈夫さ」

「マスター……」

やっぱり何だかんだでも、ちゃんとアヌビスのことを心配しているのだと思った茶々丸であったが……。

その思いはリビングでくつろいでいたチャチャゼロの言葉ですぐに消えることになった。

「オイ、御主人。今日ノ気温、40 近クナルソウダゼ。  
知ツテタノカ？」

「当たり前だろ」

その言葉を聞いた瞬間、茶々丸の中で一気に先ほどまでの感情は無駄だったのだと気づいた。

……  
……  
……

「……暑い、熱い、あつい、アツイ、A T U I……」

気温38。完全な猛暑日のこの日。

町に人影は一切無く、人々は皆建物の中に入るなりして涼んでいく。

そして陽炎しか見えない歩道をアヌビスは歩いていた。

「あのガキ、ぜってー分かって俺を外に出したな？」

ぜってーいつか、あの笑い顔を悔しさでいっぱい泣き顔に変えてやる。

「……………チクショー！暑すぎなんだよ、太陽！自重しろ！！」

誰もいない歩道をトボトボと一人、汗だくの姿で歩く。

今回、エヴァから渡されたメモに書かれてあった店の場所は徒歩四十分という確実に作為を感じるような場所であった。

もっとも、渡された時点で気づかなかったアヌビスにも非がある



が…。

何はともあれ、移動手段が徒歩しかないのだからただ黙々と歩くしか  
アヌビスに選択肢はないのである。

ちなみに、わざわざその店に行かずとも良いのでは？と思うかも  
しれないが、エヴァは先ほどアヌビスにレシートを貰って来るよう  
にと言われた。つまり、もし他の店に行った場合、確実に何かされ  
るとアヌビスは判断したのだ。

「ああ、時は見えないけど、オアシスなら見える。  
こりゃ完全に頭までイカれたな」

しかし、その頭も現在暑さで完全にオーバーヒートしてしまっ  
ている。

「……………ハッ！？そうだ！

暑いのなら冷ませばいいじゃない！というわけで、自動販売機！」

頭の中で豆電球がピカッ！と光る感じに閃いた思いつきに自  
分の命運を託して、アヌビスは走り出した。

だが、五秒後に彼は思いしる。

何百年も生きた、真祖の吸血幼女にそんな考えなど通用しないと

…。

……………  
……………  
……………

その頃、真祖の吸血幼女はというと…。

「今ごろアヌビスの奴はどうしてるかなあ〜？」

満面の笑みでアヌビスの状況を楽しみにしていた。

ちなみに、現在のエヴァアがいる部屋の室温はと言うと、エアコンによって二十三 という温度である。

ついでにいえば、アヌビスがいる外の気温は三十八。

まさに天国と地獄とはこのことである。

もし、アヌビスがこのことを知ったらこう言うだろう。

「世の中、間違ってるよ!」

恐らくそう言う。

第四話【はじめてのおつかいと寄り道（前編）】【（後書き）

何か長くなりそうなので、二つに分けました。

第五話「はじめてのおつかいと寄り道」(後編)【(前書き)】

今回は少し主人公の過去に触れる描写があります。

## 第五話【はじめてのおつかいと寄り道（後編）】

o r z

今の彼の心情を文字にするなら、この言葉以外ないだろう。

前回のあらすじ。

麻帆良学園を見て回りたくないなあ、と思うアヌビスに与えられたミッション。

ニリットルの清涼飲料水をそれぞれ二本ずつ買ってくるという内容のミッション。

始めは軽くウキウキとした気分だったアヌビスであったが、それはエヴァの様々な（一個しかないかもしれないが）思惑があった。

とまあ何はともあれ、前回の最後。

「暑いのなら、冷ませばいいじゃない！」

と叫んでアヌビスから見て左の方向にあった自動販売機に直行したまでは良かったのだが、流石は真祖の吸血鬼。

やはり年季というのが違った。

「o r z」

絶望。

彼の心に走った感情はそれだった。

別に財布の中身がなかったわけではない。寧ろ、お金のほうはピツタリあった。

問題は金額がピッタリ過ぎるという点である。

今回、飲料水を買うのに必要な金額は  
そして財布の中入ってあった金額も同じ値。

さらに追い討ちをかけたのが財布の中にあつた一枚の紙であつた。

『この財布に入っている金は、買い物に必要最低限の金だ。  
この言葉の意味が分かるな?』

まさに絶望だつた。

選択肢は二つに一つ。

ここで欲望のままに動き、帰つて地獄を見るか?  
灼熱地獄を味わいながら、前へと進み続けるか?

どちらを選んでも、地獄である。

「(クツ、飲み物なしでこの地獄の強行軍は無理だ。

……ん? いや待てよ? どっちも結局は同じじゃね?

ハッ! てことは、エヴァのほうが長続きしない可能性がある! さらに言えば、売り切れだつたとか言えば、地獄を見る可能性はかなり減るんじゃない?」

天才!? 天才じゃね、俺! ?)」

既に地獄を見ることを前提に考えている時点で既に駄目だと思うが、そこは彼のことを思つて触れないで欲しい。

「(そうと決まれば、早速買いたZ E! !)」

そう思い、すぐさま自販機に向かい百五十円を投入し、彼は天国へと

「ポチっとネ」

至る直前で、悪魔が現れた。

「……………ハア？」

ガコンと自販機から缶が落ちる音がして、いつの間にか隣に立っていた少女、超鈴音が自販機からジュースを取りだし、そのまま一気に飲み干した。それはもう素晴らしいくらい笑顔で。

「……………ん、プハア…いや、やっぱりファンタはオレンジネ。

この炭酸の具合が最高ヨ」

「サヨウデゴザイマスカ」

「ところで、どうして突然道路を眺めているネ？」

「クルマコナイカナ？ハヤクシニタイヨ」

「あ……………アハハ、悪かったネ。」

その言葉で大体を理解したのは流石は超と言うべきか、アヌビスに対し急に謝罪の態度を示してきた。

しかし、当のご本人ことアヌビスは先ほどから目は完全に死んでいた。

その時、ちょうどトラックがやって来た瞬間、アヌビスが道路の

真ん中へと歩き出した。

ゆっくり、ゆっくりとだが、このまま行けば確実にトラックに轢かれるだろう。

「いやいやいやいやいやいや！！駄目ヨ！！流石にそれは駄目ネ！！」

「生きる意欲を失いました。どうか、探さないで下さい」

「悪かったヨ！！本当に悪かったから待つネ！！」

「行かせてよ。」

頼むから……行かせてよ……」

「だから、やめるヨ！！あ、そうネ！！」

私がおか買ってあげるヨ！！だから、やめる……って、アレ？」

買ってあげると言った瞬間、いつの間にやらアヌビスの姿は超の視界から完全に消え去っていた。

そして、後ろにある自販機のほうを振り向けば、しっぽがあればフリフリと振っている感じで超を待っていた。

「現金ネ。えっと、財布、財布……家に忘れてきたネ」

「トラック、来ないかな？」

「分かったカラ、ヘタな真似はしないでほしいヨ。

だったら、ウチに来るといいネ。カキ氷とか出して……って、アレ？」



「さあ、超！早く行こうじゃないか！！」

本当にいつの間にも移動していたのだろうか？そう思う超を余所にアヌビスは一人さっさと、歩き出していた。

……

……

……

工学部の研究所の一室。

「それで、あんなにカキ氷を食べてるワケですか……」

「まあ、理由としてはそれで正解ネ」

「……それにしても…量がおかしくないですか？」

「ハカセ……それは聞いてはいけないことネ」

そう言ってテーブルを見ると、山のように重ねられた空になったカキ氷の皿。

全部で百は下らない筈の量を全て食したのは、無論アヌビス一人である。

「……うん、ご馳走さまでしたっつと」

「よくお腹壊れませんか？」

「麻帆良のクローンは化け物か？」

「本当の化け物もこの学校にいますけどね……」

「超、ハカセ、どっちなの？」

「何でもないヨ。ただちょっと思うところがあっただけネ」

「…左様でございますか」

「話は変わりますが、何で外にいたんですか？」

ハカセのその言葉を聞いた瞬間、アヌビスの顔色が一気に変わっていく。

「超！今すぐさっきの金返せ！！」

「あゝ、別に大丈夫ヨ。そんなに慌てなくても大丈夫ネ」

「何言つてやがる！？早くしないと」「こんなこともあるのかと！」

…ん？」

「こんなこともあるのかと！既に私が作ったロボットに買いに行かせてるネ！！」

「な、なんだってー！？」

「ノリいいですね。お二人とも」

超曰く、アヌビスがこの研究所に来た時点で既にロボットを向か

わせていたらしい。

「ご都合主義万歳である。」

「……………ていうか、今の今まで忘れていたんですか？」

「カキ氷の誘惑には抗えないのだよ」

「単純に忘れてたんでしよう？」

「そうとも言つ」

駄目だこの人…。

ハカセはそう思い、ため息をついた。

しかし、当のご本人はハカセのそんな様子も知る気もなく、超と話していた。

そんな時、超が口にした言葉がアヌビスの気を引いた。

「……………ミイラ？」

「そういうことネ。見ているかな？自分のミイラを？」

「……………まあ、普通だったら気持ち悪いと思うだろうけど、このアヌビスにそれは無い！見せてくれ」

「了解ヨ」

超とハカセに案内されてアヌビスは地下にある工学部の倉庫へと向かった。

研究室を出て、エレベーターに乗る一行。

エレベーターに乗ると、何故かアヌビスが少し落ち着いたような様子を見せ始めた。

「ん？どうしたネ？」

「え？いや、な〜んか、この頃視線を感じるってというか、誰かに見られてるってというか、監視されてる気がするってというか」

「それ全部言葉の意味は同じですよね？」

「……………あ、ホントだ……………」

「駄目だこの人……………」

ハカセのツツコミの意味を理解するのに約数秒の時間を必要としたが、納得した姿を見てハカセはため息を漏らした。

超はそれを聞くと、何故かじつとアヌビスのほうを見ていた。

その目は、何かを考えるような、そんな眼差しであった。

……………

……………

……………

「さ、ここネ」

案内された場所はアヌビスの想像とは違い、綺麗かつこじんまりしていた。

ちなみに、アヌビスの想像では、エヴァの家の物置と同じように、隅に蜘蛛の巣が必ずあり、置かれているものが必ず埃を被っているようなそんな場所だった。

「その顔からして……ひよっとして、もっと小汚いところと想像していたのかネ？」

「Yesだ」

「素直に答えるのもどうかと思いますが……」

そんな調子で部屋の真ん中に置かれてあるカプセルのところまで近づいてみた。

「うっわ~~~~~」。

こりゃ、軽く引くね。生々しすぎだろ……」

「ハハハ、それもそうネ。

ちなみに、死因は体の血液が大量に失われたことによる出血死と思われるヨ。

……ただ、一つ問題として……」

「致命的な外傷が無い……だな？」

アヌビスのその言葉に超とハカセは驚いた。

この男はどうしてそれを知っているのだと？

確かに、遺体を注意深く見ればそうかもしれない。

否、それでもやや風化はしているとはいえ、一目見るだけでそんなことが分かるのだろうか？

答えとしては、それは否。出来るとすれば、それは余程のプロ。  
その道に数年、いや、十年近くかわっていなければ、分  
からないだろう。

「……よく分かりましたね？」

「……確かに、何でだろう？」

「え？分かったからじゃないんですか？」

「いや、その、ただなんとなく？」

「いやいや、そんな理由通じませんよ」

「記憶の継承じゃ……ないかね？」

「「は？」」

超の言葉に二人はポカンと呆気にとられた。

「記憶の継承って……いくらなんでも、そんなことは……」

「忘れたのか、ハカセ？アヌビスはそこにあるミイラのクローンよ。  
なら、それくらい可能性としてはあるネ」

「確かに、可能性としてはあるかもしれませんが……」

「まあ、考えられる理由として上げておいただけヨ。

本当にそうかどうかなんて、今の私たちには分からないことネ」

「……うん。確かにそうですけど……。  
アヌビスさんは、何か覚えていますか？」

「え？俺？

うん……全く思いつかん」

「まあ、そういうことですよ。超さんの考えすぎでは「いや、待てよ……」「え？」

考えすぎ。そうハカセが結論づけようとした時、ふとアヌビスの頭の中で何かがフツと思い出すように思い出した。

「……そうだ。

あん時、エヴァの別荘でエヴァに殺されそうになった瞬間に、誰かの顔……ていうか、姿が映ったんだっとな……」

「「顔？」」

「ああ、なんていうか、無表情で人っていうより人形って感じの白髪……ガキ……だった……な。うん」

「白髪の……うん。それだけじゃ誰か判別するのは無理ですね。超さんは何か気づきましたか？超さん？」

ハカセが超のほうを振り向いてみると、超は何故かブツブツと何かを呟いているようだった。

何を言っているかはほとんど聞き取れないほど小さな声だった。

聞き取れた声としては、「……白髪の……さか……と、学園長……アヌ……てる？」ぐらいで、言葉の意味はほとんど理解でき

なかった。

「あ、あの〜超さん？」

「ん？おお、悪いネ。

むっ！？そろそろ、おつかいに出したロボットが帰ってくる時間ネ！上に戻るヨ！」

「えっ！？上に戻って、あ、ハイ、分かりました」

「（……………何でだろう？帰ったら、地獄を見る気が……………いや、いつものことか……………」

超に言われたままにハカセとアヌビスは超とともにエレベーターに乗り、そして、上へと戻っていった。

……………

……………

……………

アヌビスはそのまま超の研究室に戻らず、一階のエントランスホールでエレベーターを降りた。だが、超は何かすることがあるらしく、そのまま研究室に戻っていったので、見送りはハカセだけがあった。

すると、明らかに工学部の人間とは思えない感じの身長二メートル以上はある大男がアヌビスの元に近づいて来た。

「アヌビスサンデスカ？」



「違います。人違いです」

「はじめ君に嘘は通用しないですよ」

「……はじめ君？このデカブツのこと？」

「私ハデカブツトイウ名前デハアリマセン。私ノ名前八田中一デス。後、アヌビスサンに才届ケモノデス」

そう言うってはじめ君は手に持っていたビニール袋をアヌビスに手渡した。

中身を確認すると、確かにエヴァに頼まれていた飲み物だった。ちなみにレシートもちやんとあった。

「…………ハカセ、もっといい名前つけてあげな。例えば…………シユワルツネツガーとか」

「版權的に駄目ですよ」

「デハ、失礼シマス」

「おう、ご苦労様」

ズンズンと一歩一歩音を立てながら歩くはじめ君を見てハカセはボソツと、「まだまだ改良の余地がありますね」と呟いた気がアヌビスはした気がしなくもなかった。

ふと時計を見てみると、時計の針が三時半を過ぎていたのでアヌビスはハカセに礼を言い、超にも伝えてほしいと言って工学部を後にした。

.....  
.....  
.....  
アヌビスがエヴァアの家に帰ったのは時刻が四時近くなったときである。

だが、アヌビスはそのまま家に入らず、ドアの前で立っていた。

「（……何故だ？今、家に入ることが死に直結する気がする……。だが、このままでは何も変わらん！俺は家に帰る！！）」

そう決意し、アヌビスは家のドアを開けた。

グシャ 鼻の骨が砕かれる音。

ゴキッ 両足が曲がってはいけない方向に曲がる音。

ベキッ 両手が曲がってはいけない方向に曲がる音。

グキッ 首が曲がってはいけない方向に曲がる音。

ドカッ 倒れたアヌビスの背中に飛び込むように座り込む音。

「随分と遅い帰宅だな？なあ？アヌビス？」

「……………左様でございますな。後、降りて下さい」

「だが断る。それで？買う物はちゃんと買って来たのか？」

「……………どうぞ……………」

「……………レシートまでちゃんと入っている…。チツ……………」

「それと、そろそろ退いて頂けないでしょうか？」

「……………そうだな、いいだろう」

ボグツ 後頭部を勢いよく踏みつけられる音。

「……………フツ、死んだか……………」

エヴァが呟いた言葉はアヌビスには聞こえていなかった。  
何故なら彼は既にこれから十二時間というとても長い時間を、岸  
辺に彼岸花の咲く、バカデカイ川で遊ぶことになるからである。

第六話【街中で感じる視線は殺気の混じるものが多い】（前書き）

今回の書き溜めていたものは全て無くなりました。

まあ、そこまで遅くはないとも思いますが…。

ハア、感想が欲しいなあ。

第六話【街中で感じる視線は殺気の混じるものが多い】

夢。

今自分が見ているのは、夢だとアヌビスは理解できる。

何故なら、アヌビスは同じ夢を何回も見ているからである。

「ぎいやあああああああ……!……!」

内容としては、上の言葉だけで理解できる方がいるかもしれない。

「お助け……!……!……!」

どのような夢なのかはご想像にお任せするが、アヌビスがどうい  
う目にあっているかは皆さんお分かりだろう。

しかし、どうしてこんな夢を何回も見ているかという点、それに  
ついて理由がある。

.....

.....

.....

朝、茶々丸が朝食の支度をするために起きてリビングに来ると、  
いつものようにアヌビスがソファの上で毛布を被って寝ている。

だが、ソファの近くにあるテーブルの上に何かお香のような物  
が置かれており、その香りを嗅ぎながら寝ているアヌビスは何かに

うなされている状態だった。

「……そ、空が堕ちてくる……」

かなりうなされているようだ。

確実に自分の主が仕掛けたものだろうと判断した茶々丸はそつとお香をアヌビスから離れた場所に移す。

すると、少し落ち着いたのか、茶々丸がもう一度覗いてみると、今度は健やかな顔をして寝ていた。

それを見た茶々丸は少し嬉しそうに頬を緩ませる。

昼間はエヴァとの（一方的な）喧嘩をしているとはいえ、アヌビスも彼女にとってはエヴァと同じくらい大切な家族である。

「……ん…んん？茶々丸？」

「おはようございます。アヌビスさん」

「……ん…おはよう」

朝食を作る音に反応して、ゆっくりと眠たそうな瞼を擦りながらアヌビスが起き出してきた。

「後三十分程で朝食ができますので、今の内に洗顔などどうぞ」

「……おいーす……」

おぼつかない足取りでフラフラと歩いていくアヌビスを見て茶々丸の顔に笑みが浮かんだ。

時刻は朝の七時。

夜行性の真祖の吸血鬼であるエヴァはまず確実に起きてこない時刻である。

ちなみに、夏休みのエヴァの起床時刻は九時から十時、生活習慣リズムはまず確実に狂っているのは間違いない。

「顔洗ってきたどー」

「少々お待ちを、もうすぐ出来上がりますので」

「あー、急がんでもいいから。」

起きたばっかであんまり腹減ってないから」

「かしこまりました。」

それでしたら、マスターが起きてからでも「やめてくれ、俺の一日が吹っ飛ぶ」……分かりました」

かなり必死に懇願されたので、茶々丸もそれに従う。

実際、アヌビスとエヴァが朝食を共にすると、必ずと言っていいほど（一方的な）喧嘩が起こるからだ。

アヌビスはこの頃は手加減している気がしなくもないが、エヴァのほうは120%本気で来ている。

最も、力は所詮十歳の少女と同じくらいなので、大して痛くないだろう………と想像していた時期がアヌビスにはあった。

確かに、エヴァの力は確かに十歳の少女の力だが、彼女は何故か人間の急所を的確に殴ったり蹴ったりしてくる為に、アヌビスも途中から本気でヤルようになるのだ。

まあ、結果はいつもアヌビスの敗北で終わるが…。

「ところで、今日はどこかに行く予定でもありますか？」

ソファに腰掛け、朝のニュースを見ていると、ふと思い出したように茶々丸がそう問いかけてきた。

「ん？特にないけど」

「それでしたら、今日は「私に付き合え」…マスター」

振り向いてはいけない。振り向けば必ずロクなことにならない。そう思うアヌビスだが、現実には彼に対して非情なようだ。

ガシッと、両手で後頭部を掴まれる感触をアヌビスは感じた。

「あの「私に付き合うよな？」……えっと…」

後頭部を掴んでいる手の力が増す。

十歳の少女の力のはずなのに、アヌビスが感じるのは十歳のそれとはぜんぜん違う。

「私に付き合うんだらう？返事はどうした？」

「……………ことわ「ん？」分かりました！付き合いますから！！お待ちを！！お待ちを！！

アアアアアアア！！後頭部が！！！！陥ぼ、陥没するううううううう！！！！！！」

メキメキという音がしたようだが、実際にはしていない。

だが、確実にアヌビスが味わっているのは、間違いなくメキメキ



という音がして自分の後頭部が陥没する感触だろう。

「そーか、そーか、では私は二度寝する。  
詳しいことは茶々丸から聞け。以上だ」

「……………いえっさー……………」

そう言っとても嬉しそうに二階に上っていくエヴァだったが、  
アヌビスは既に真っ白な感じで燃え尽きる感じであった。

……………  
……………  
……………

正午。

天候は曇りという感じで、午前中までの晴れていた天気はスツカリ雲に覆われていた。

駅前の喫茶店の前にアヌビスは普段のYシャツにジーパンという格好で超が十個は付くほどイラついていた。

それはもうかなりであり、既に怒りを通り越して清々しいくらいの笑顔であった。

ただし、後ろのほうから怒りのオーラが駄々漏れで人が一切近づけないが……………。

「……………遅すぎる。この遅さは、何なんだ？」

エヴァは確かに十一時と言ったよな？

で？今は十二時です。殺すぞ？あの幼女。

大体、付き合えと言ってきたのは向こうだよな？  
だったら、遅れないのが礼儀つてもんだよな？

あの幼女には礼儀つてモンがないのか？クローンの俺にはあるんだぞ？

どうした真祖？五百年以上生きてんだらう？

それなのに、遅刻？

ぜってー、いつかぶち殺してやる！！」

ギリギリと齒軋りの音が彼の周りに響く。

そうすることで、さらに彼の周りからただでさえいなかった人の数がどんどん減っていく。

「よし、十数える間に来なかったら俺帰る。

アイツが後でなんと言おうとも、俺の知ったことではない！！」

1、2、3、4、5、6、7、8、9、

「待たせたな。下僕」

「（……何で…来るんだよ？タイミング計ってたのか？そうなのか？絶対そうだろ？てか、俺下僕じゃねーし！！）」

10と数える瞬間、どう考えてもタイミングを計って来たとしたかと思えないくらいのタイミングで、エヴァはやってきた。

声は後ろの方向からしたので、後ろを向いてみると

「どうした？もしま、私の美貌に見とれたか？」

「いや、それはな…目があああああ！！！？？」



「フム、これも中々……」

「（あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！待ち合わせ時間に時間も遅れたエヴァに怒っていたと思ったら、いつの間にか普通に買い物していた！な、何が起こったのか俺にも分からねえが、幼女だとか真祖の吸血鬼とかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ！もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ！）」

洋服店でエヴァが服を選んで壁に背を預けながらアヌビスはソレを見ていた。

あの時、エヴァがアヌビスに対して、少年誌やテレビでは放送できないような暴力行為をしてから、二人（一名、半死状態）は普通に買い物をしていた。

「オイ、アヌビス。ちょっとこっちに来い」

「ハイハイ、なんのご用でございしょ？」

エヴァに来るように言われて、エヴァの元に行くと、エヴァは持っていた男物の紺色のスーツをアヌビスに合わせるように見た。

「……フム、イマイチだな……」

「なんの話だよ？」

「こちらの話だ。」

ところで、色はどんな色が好きだ？」

「黒。」

こちらの話って、なんだそりゃ？」

「今のお前には関係のない話だ。」

後、しばらく店の外にいる。お前の役割は買う物が買い終わった後だ」

アヌビスがそう問いかけるが、返ってきたのは煙に撒かれたような返答だった。

もつとも、この後アヌビスがやるのが荷物持ちということが分かった時点でまだマシと思うべきだと彼は思ったが…。

店の外に出てみると、空は先ほどの曇天よりは晴れてきていた。

「（ビミヨーな天気だな…）」

晴れでも曇りでもない天気を見て、アヌビスはそう思った。

あの日、工学部の地下でオリジナルのミイラを見てからアヌビスは色々と考えはじめた。

今の自分は、かなり流されてきている。

最初にエヴァや超に起こされてから、半ば半奴隷生活？を送っているが、妙な違和感というものが常に彼の心に纏わりついていた。

別に、今の生活に不満があるというわけではない。ある一点を除けばだが…。

ただ、彼は何処か、何処かに違和感がある。

まだ目覚めてから一月も経っていないが、彼は、そう、欲求不満といったものなのだ。

だが、一回だけ、一回だけその違和感が拭えた時があった。

あの時、エヴァの別荘でエヴァの体を二つに切り裂いた瞬間だった。

あの時、彼の心を埋め尽くしていたのは、歓喜の感情だった。

「（……アホらし、何処の殺人快樂者だよ？）」

ため息をついて、もう一度空を見してみる。

晴れと曇天の天気何も変わって

「……！」

視線。

店からではない。

強烈な、明らかに敵意を孕んだ射抜くような視線を感じた。

「……ハアハア……」

自然、汗が滝のように出てくる。呼吸が荒くなる。

だが、心は何故か落ち着いていた。



「……エ…って、うお!？」

「荷物持ちだろ?なら、さっさと持て」

ポイツと投げられた紙袋をキャッチし、エヴァのほうを見てみると、そこに彼女の姿はなく歩き出していた。

ふと、さっきまで感じていた視線がいつの間になくなっていくことに気づく。

だが、そんなことより、今は目の前にいる家主に追いつこうと、走り出した。

そして、その姿を見ている二人の少女の姿があった。

一人はサイドポニーで自身の傍らに袋に入った何かがあった。

もう一人は、サイドポニーの少女とは同年代とは到底思えないほどの身長の高色の女。傍らにバイオリンケースのようなものがある。

「行ったか……どう思う?刹那」

「さあな?魔力や気というものはあまり感じられなかったが……あの腕が…」

「ああ、私にも見えたよ。

あの腕、見たこともない術式を組み込んでいるな。

まっ、仕事だからな、どちらにせよ、やることに変わりはないがな……」

その言葉で二人はアヌビスの走っていった方向とは逆の方向に歩き始めた。



「何だこれ？男物のスーツ？」

「ああ、私からお前へのプレゼントだと思ってくれて構わんぞ」

午後三時、天気は少しずつ晴れてきて、アヌビスとエヴァはカフェでケーキを食べていた。

そんな折、エヴァが紙袋の中身を見てみると、その言葉に従って見てみると、中に入っていたのは黒の男物のスーツだった。

「……………何考えてるんだよ？」

「単純な贈り物だ。」

素直に貰っておいた方がいいぞ」

「いや、別に貰わないってわけじゃないんだけどさ。急になんだよ？」

「まあ、お前にもそろそろ働いてもらおうと思ったただけだ。」

『働かざる者、食うべからず』分かるな？」

「分かるけどさ、急に渡されても「安心しろ」「あん？」

「仕事はこちらで用意する。お前はそれはキッチンとこなすだけでい

い

「(ひょっとして、ワルな人たちとの戦争とか？  
いやいや、さすがにそれは……無いと言い切れない俺がいる……)」

エヴァの言う仕事にかなりの不安を感じざるを得ないアヌビスだが、エヴァはそれを見てニヤニヤと笑みを顔に浮かべる。

「安心しろ。何も戦争して来いというわけではない。  
危険な仕事ではないぞ………多分な……」

「(もう何もツツコまん。絶対に危険な仕事だ。そうに違いない!)」

「………ところで、話は変わるが、さっきはどうした？」

「ん？ああ、いや、ただ少し考え事……」

「フン、お前が考え事とはな……。全然似合わんな」

「ほっとけ」

そう言ってケーキに乗っかっていたイチゴを食べると、エヴァが席を立った。

「ん？もう行くのか？」

「いや、お前はここにいる。私は先に帰る」

「は？じゃあ、荷物は俺が「私が持っていく」………何故に？」

「今日のお前では汚しかねん。会計は私がしておく、適当に歩いて帰って来い」

「……………エヴァ」

「……………何だ？」

何時にもまして真剣な眼差しなアヌビスの言葉を背中で感じながらエヴァは返事をした。

「……………変なもん食ったか？」

「…お前、今日の夕飯抜きだ」

「そんな殺生な!!」

「では、私は帰らせてもらっぞ」

「ああ、待つ……………行っちゃった…」

まるで恋人にフラレタ男に見える。

悲壮感を漂わせながらイスに座った。

すると、まだカップに紅茶が入っているのに気づき、右手でカップを掴もうとした瞬間

パリーン!

カップが、はじけた。



第七話「追い詰められた主人公は必ず無双状態になる」(前書き)

なんか、今回は長くなっちゃいました。

というか、タグに『オリ主最強ではない』って書いてあるのに、今回は無双状態になっちゃったよ。どうしよう？

## 第七話【追い詰められた主人公は必ず無双状態になる】

「ハアハア！ハアハア！」

彼はよく思っていた。

自分は神様か何かに喧嘩でも売ったか、もしくは恨まれているのではないのか、と。

「畜生がッ！」

走る。

そうしなければ、自分は間違いなく殺されてしまっただろうからだ。

正体不明。

そんな奴からずっと逃げ続けていた。

何処にいるのかも分からない。

だが、感じる。

あの視線。彼に向けられているのは彼自身が先ほど感じた敵意ある視線。

ここは路地裏。回りにあるのは、全て建物の壁のみ。

にもかかわらず、視線は今なお感じられ、狙撃は続く。

チュン！チュチュン！

壁に弾が当たる音がする。

だが、振り向けない。振り向けば、確実に自分は殺されると分かっているからだ。

「ゲッ！行き止ま……うおっ！？」

ギリギリだった。

後少しでも体を動かしていたら、確実に彼の首に銃弾は当たっていただろう。

「……………クソツ！死ぬるかよ！！」

再び走り出す。

今度は人がいる通りに向かって。

狙撃は続く。

姿なきスナイパーは今なお彼に銃口を向けて、この一方的な狩りをさぞ楽しんでいるだろうとアヌビスは思った。

「あー、もう！ホント、ざげんな！！」

ひたすら走り続ける。

そして、数分後。彼にとっては何時間にも感じられた時間の末。彼の目に通りが見えた。

「よし！これ…なら……」

通りには出られた。それ自体はいい。アヌビスにとって好都合だからだ。

確かにスナイパーはこちらをあまり狙ってこないだろう。

だが、それは通りに人がいたららの話だ。  
通りには人っ子一人もいない。

そしてさらに、人がいて都合なのは、スナイパーだけが敵の場  
合だ。

もし、敵が一人ではなかったら？もし、今までの自分の行動が全  
て誘導されたものだとしたら？

今回は、敵が二人以上だったら？ということなのだろう。

通りに出られたアヌビスが感じたのは二つの視線。

一つは、先ほどからずっと感じる敵意ある視線。

そしてもう一つは

「アヌビスさんで間違い不是吗？」

彼のすぐ目の前に立っているこの少女からの視線だ。

その少女は髪を横に纏めている。サイドポニーという奴だ。

そして、何より特筆すべきモノは左手で握られている細長い木の  
棒。

間違いなく、アレが彼女の得物なのだろう。

「違います。人違いです」

だからこそ、選ぶ道は逃走の道。

「そうですね、ではアヌビスさん……。お命、頂戴致します」

「（何でバレたんだ！？チクシヨウ！）」



「参ります」

抜刀。

見えたわけではない。ただアヌビスの頭がそう判断しただけだ。そして同時に彼の体はバックステップをしていた。

「避けましたか」

いつの間にか目の前の少女の右手には、太刀が握られていた。そして感じる殺気。明らかにこの少女はアヌビスを殺す気でいた。

「では、次は「マテマテマテマテマテマテマテマテマテマテ！」……何か？」

「う落ち着こう！まずは落ち着きたまえ！

そして、俺の質問に嘘偽りなく答えてくれ！」

「……………いいでしょう。黙秘権は使わせてもらいますが、それで何ですか？」

「サンキュー。サンキュー。質問は三つだ。

一つ、俺は何故、君たちに狙われているのか？

二つ、もし誰かに頼まれたのなら、頼んだ奴を教えて？

三つ、俺を全力で見逃して」

「……………一つ目は単純に頼まれたからです。

二つ目は黙秘権を使います。

三つ目は論外です」

「えっ！？駄目つか！？そこをなんと」

パリーン！

ガラスの割れる音。

それと同時にアヌビスの元に一気に踏み込む太刀を持つ少女。  
彼女が踏み込みと同時にアヌビスの体は既に建物の屋根の上にあ  
った。

「……つぶね~~~~！マジ今の死ぬかと思った！」

「今のを避けられるとは、驚きましたよ」

後ろからの殺気。

それをアヌビスが感じた瞬間　彼の周りに剣戟が鳴った。

「…ホント危ないな。頼まれたにしちゃあ、性質悪くない？」

「……仕事ですので」

そういう少女の顔には驚きの表情があった。

そして、彼女の視線はアヌビスの右手にある銃剣バイヨネットに向けられてい  
た。

「あっそう。これって、正当防衛で何とかなるかな？」

「過剰防衛になると……思いますかね！」

「……」

言葉を言い放つと共に彼女は体を屋根に伏せる。

アヌビスに見えたのは跳弾。いや、常人が銃弾を目視できるわけが無い。

だが、彼はできた。そして、見えたからには次の彼の行動も決まっている。

「ッシ！」

彼が投げたのは小太刀。

投げたそれは、真っ直ぐ彼に向かう弾丸に当たった。

「なっ!？」

体を伏せた少女が驚愕の声をあげる。

今ので確実にアヌビスを仕留めるつもりだったのだろう。

そして、その隙を逃す程、アヌビスはぬるい男ではない。

「じゃおらー!ー!ー!」

低姿勢からの銃剣パイコネットの突き。

「ッ!クッ!」

先ほどのアヌビスの動きによほど驚いたのか、少女の反応はかなり遅れてしまった。だが、それでも彼女が突きを避けれたのは、単純に彼女の技能が高かったからだろう。

「逃がすかよッ!!!」

そして、一度避けれたとしても、アヌビスは攻撃を止めない。

アヌビスの戦闘スタイルは基本、両腕に組み込んである術式の効果で手にする銃剣や黒鍵、小太刀を投擲、もしくはそれを使つての近接格闘戦である。

本来、何の修行も指導も受けていない者がそんなことをしても、熟練者にとっては赤子の手を捻るかの如く簡単なことのはずだ。

だが、アヌビスは違った。

「ヒヤハハハハハハ!!!」

「(この男……攻めが激しすぎるッ!)」

完全に受けに回った少女　　桜崎刹那は初めこの仕事を受けた時、簡単な仕事だと思っていた。

相手がいくら、闇の福音と呼ばれているエヴァと共に住んでいると聞かされていたとしても、アヌビスを最初に見た時の印象は弱いと思った。

もつとも、アヌビスの普段の姿と言えば、だらだらしているかエヴァに暴力をふるわれている姿くらいしかないから仕方ないと思うのだが…。

「ホラホラ、ホラホラホラホラホラホラホラホラ!どうした!?どうした!?!」

俺の命が欲しいんだらう!?!」

近寄れば、即座にアヌビスが両手に持つ銃剣の刃の攻撃範囲に入り、更に近づきアヌビスの懐に入れば、今度は小太刀の攻撃範囲に

入る。

逆に距離を取ろうとすれば、僅かに生まれる後退の隙が生まれてしまい、更なる攻撃が来る。仮に距離が取れたとしても、今度は黒鍵が飛んできて、避けるなり防御する間に再び距離を詰められる。

既に、刹那はジリ貧の状況に追い込まれていた。

「（このままでは……ッ！）」

ジリ貧に追い込まれ、このままでは確実に自分が負けると思った刹那の目の前で突然アヌビスは後退した。すると

ドガン！

目の前の屋根が突然爆ぜた。

「（真名か!?!）」

そう思い、アヌビスが視線を向けた先を見てみると、見えた。時計塔の上を狙撃場所にし、今も狙撃し続けている。

「二対一って、卑怯、じゃ、ね、っと、うおっ!?!危なッ!?!あ、コラ、逃げんな!?!」

刹那の相棒の少女　　龍宮真名は基本刹那の後衛を務めている。使っている武器は色々とあるが、基本銃火器だ。

「聞こえるか?刹那」

遠距離からの狙撃を何とか避け続けているアヌビスからある程度

距離をとると、真名から念話が来た。

『真名か。援護感謝する』

『いや、遅れてすまなかつたな。中々撃つタイミングが難しかったんだ。許せ』

『構わない。それより、かなり手強かった……』

『……そうか、なら、例の場所に追い込む。そろそろ、人払いの符の効力が切れるぞ』

『了解した』

頭の中で会話を打ち切ると刹那はすぐさま移動を開始した。目指す先は人気が無い麻帆良学園の端にある廃墟である。

……  
……  
……

「（現在進行形で俺は思う。誰の恨みを買ったんだよ！？俺！？）」

そう思い、地面に前のめりに倒れこむ彼はさめざめと泣いていた。今日は厄日だと。いや、年から年中だと思いが、それでも今日はかなりの厄日だろうと、アヌビスはそう思っていた。

「（俺は悪くないはずだ！なのに、どうして！？どうして、俺は今

日変な女の子に殺されそうな目にあつの!?

ハッ!?これはもはや、エヴァの罠!?だって、アイツ言っていたじゃん!

『今日のお前では汚しかねん』って……………あの幼女……………絶対にいつか復讐してやる!!

そうと決まれば、明日からアイツの寝ている部屋の窓を開けて虫が入ってくるようにしてやる!!」

ドゴン!!

そう決意して、立ち上がった瞬間　　アヌビスの直ぐ横の壁に穴が開いた。

「……………まあ、ここから生きて帰れたらの話だけど…」

ズルズルと芋虫の如く体をゆっくりと動かして移動する。

アヌビスが今いるのは麻帆良学園の端っこに何故かある廃墟の建物の中。

その建物のとある箇所にアヌビスは体を屈めて隠れていた。

まあ、今は移動中なのだが…。

ちなみに、今までの彼の行動は簡単である。

逃げた刹那を追撃しようとしたのだが、真名の狙撃によって逃げざるを得なくなってしまう、必死に逃げ出す結果になってしまった。その後も真名の追撃は続き、何とかこの建物に逃げ込んだのだが、何故か建物から離れることができなくなってしまったのである。いや、建物自体から出ることはできるのだが、建物から離れると何故

か弾かれてしまい、結局建物の中に隠れていることになってしまった。

「（ハア…ホント…何でこんな目にあわなきゃいけないんだろう？）」

そう思いながら、移動していると突然彼がいる下の階のほうから轟音が聞こえてきた。

「（ああ、嫌な予感がプンプンしてきた…）」

そして、下の階からの轟音が止むと

ドガンー！！

ちょうど、先ほどまでアヌビスがいた場所の壁が崩れ落ち、できた穴から

「……………はああー！！」

「ドチクシヨウが！！」

穴から飛び出してきた刹那の太刀を銃剣ハイヨネットで受け止める。

アヌビスが受け止めると、刹那はすぐさま体を後退させる。

その動きから彼女の意図を察したアヌビスはすぐさま彼女と同じく自分の体を後退させた。

すると

ドゴンー……ドゴンー……ドゴンー……ドゴンー……



三連射でアヌビスがいたところから後退した方向に真名から射撃が来る。

「あー！もう、これマジで無理ゲーだって！！」

「逃がさん！」

走る。ただ闇雲に走り続ける。

刹那とインファイトで闘えば真名から狙撃が来る。

逆に真名を探して回れば、必ずと言っていいほど刹那と遭遇し、戦闘を強いられる。

完全に、アヌビスは二人の策に嵌められていた。

「（考える！考える考える考える！！この状況を打破する方法！！何か、何かあるはずだ！！現実是非情とか言うんじゃね）」

じゃねえぞ！そう思うことはできなかった。

何故なら、その時アヌビスのわき腹に強烈な痛みが走り、彼の思考能力を完全に奪ったからである。

「ッ！？カ、ハ！！」

壁に叩きつけられる感触。そして、自分の体から力が抜け、崩れ落ちていく。

自分が遂に撃たれたのだと、アヌビスが実感するのに要した時間は一秒にも満たなかった。

「鬼ごっこは………終わりだよ」

破壊された壁から現れたのは褐色の女。

この女の姿にアヌビスは見覚えなどあるはずがない。

「テメ、グツ！俺に恨みでも…あんのかよ？」

「恨み？そんなものないよ。ただ、私は君を徹底的に痛めつけるように頼まれただけさ」

「……誰に…だよ？」

「悪いが、私は依頼人の名前を口にするような三流ではないんでね。答えないよ」

そう言って、右手に持つ拳銃をアヌビスの眉間に向けた。

「真名！」

誰かの名前を呼ぶような声がアヌビスの耳に入ると、刹那が二人の元にやってきた。

「ん？刹那か…。悪いな、こちらで仕留めさせてもらったよ」

「いや、それは構わんが…。呆気ない終わりだと思ってな」

その言葉を聞いたとき、アヌビスの心の中で小さな笑いが起きた。この二人の中では、自分は既に終わったということらしい。

「（……こいつは面白いよなあ……。」

俺はまだ……生きている。終わっちゃいないっていうのに、この二

人の中じゃ…俺は…終わっているらしい。

こいつは傑作だ…。

全く、三流ではない？お前なんか三流にも満たない…五流、いや十流…だよ」

「言い残す言葉はあるかい？それくらい聞いてあげてもいいよ」

「（ああ、武器さえありゃ、こんなガキども…すぐにぶっ潰せる  
っていうのに…」

何で銃剣手放しちまったんだろ？馬鹿だろ、俺って？

こんなんじゃ、奴を倒すなんて……奴って、誰だっけ？）

「何も無いようなら……さよならだ」

「（……奴……奴…。駄目だ。思い出せねえや。

でも、何でだろう？思い出そうとすればするほど、死にたくなくな  
ってきやがる…」

わけわかんねえよ…。でも、俺はこんなところで

アヌビスの頭に一人の少年の姿が映る。

その少年は、ずっと無表情だ。だけど、その無表情にどこか面白  
みを感じる。

そして、もう一人の赤髪の男の姿が見える。

先ほどの少年とは対照的な、アホみたいな笑い顔を浮かべながら  
こちらを見ている。

それを見てみると、何故か腹の中で怒りが沸々とわき、同時に何  
故か笑いが起きる。

「フツ、フツハツハツハツハ…」

「……何を笑っている？頭でもおかしくなったのか？」

「（俺は……こんな……ところで）」

「……まあいい。これで終わり「真名！」なん……グツ！？」

刹那の声に振り向くと、真名は自分の右手に痛みが走るのを感じた。

見てみると、自分の右手には 小太刀が深く刺さっていた。

「（馬鹿な！？いつの ツ！）」

刹那！後ろだ！」

「なっ…ガツ！？」

真名の言葉を理解する前に、刹那は自分の右肩と両足に激痛を感じた。

ふと見ると、どこから飛んできたのか、銃剣バイヨネットと黒鍵が深く突き刺さっていた。

「大丈夫か！？せつ…！」

刹那。

その言葉を口にするには、その瞬間できなくなった。

何故か？その答えは単純明快。その時、真名は名を呼ぶということすらできないような感覚に陥ったからである。

右手に今もなお走り続ける痛み。それと同じく右手首に感じる人

の手の感触。

そして、自分の頭を押さえつけるように置かれた手の感触。

誰が私にそんなことをする？その答えは決まっている。

今ここにいる者たちの誰かだと。

自分はここにいます。

刹那は今自分の目の前で何処からか飛んできた攻撃を受けた。

そして、残るは

「ガッ!？」

床に押さえつけられ、組み敷かれる。

左手は足で思い切り強い力で押さえつけられており、動かすことすらできない。

右手は刺さった小太刀をいじくり回されているせいで、出血が酷く、動かす以前に痛みが激しすぎる状態だ。

「よう、真名ちゃん？ご機嫌はいかがですか？」

楽しげな声。

その声の主は間違いなく、ついさっきまで彼女たちが追い詰めていたアヌビス本人だ。

「……誰かさんのせいで…最悪だよ」

「…あっそう。ちなみに俺は最高だよ」

「……子供をこんな風に押さえつけるなんて、君は強姦魔かい？」

「子供？何お前、まさかそっちのガキと同年代ってわけかよ？」

「……正解だよ」

「ないわー」

「……よく言われる」

一瞬の白けた空気。

その瞬間を突いて脱出しようかと真名は思ったが、自分にかける力は依然として変わらなかった。

チラツと刹那のほうを見てみると、いまだうずくまったまま動けずにいたままであった。

「あー、んじゃあさ、取引といこうぜ。俺を見逃してくれればお前の命は助ける……どう？悪くないと思うんだけど……」

「……確かに……今の状況から見れば、その申し出はとても嬉しいのだが……こちらは既に金を受け取っていてね。いまさら、依頼を断るわけにはいかないのだよ」

「……ふん。あつそ、じゃあ、頑張つて生き延びてね。俺疲れたから」

「……何？」

その言葉と共に、真名にかかっていた力が消え、体が自由になった。

「（何故急に…なっ！？）」

体が自由になった瞬間、真名は周りを見渡した。

そして驚愕した。彼女たちの周りの壁に大量のアヌビスが使っていた武器が刺さっていた。

「爆ぜよ」

アヌビスの声が聞こえたそしてその言葉と同時に、全ての武器が光だし

………

………

………

爆発が起きた

その爆発は、とても大きなもので、もしその爆心地に人がいれば、確実に死んでしまうくらいの爆発だった。

そして、それを見ていた二つの人影。

片方は老人。だが、明らかに後頭部が人間のものとは思えない形だった。

もう一人はエヴァであった。こちらは今は数時間前までの大人の姿ではなく、普段の少女の姿だった。

「ジジイ、あの二人は大丈夫なのか？」

「ホッ、エヴァンジェリンが人の心配をするとは……分かった分かった。だからその魔法薬をしまってください」

「フン、分かればいい」

そう言っただけでエヴァはそっとその場を離れた。

「ふぉ？もう良いのか？」

「ああ、もう用は済んだからな。それと、例の件も忘れるなよ」

「わかつとるわい。」

さて、ワシも帰るとするかの

そう言っただけで二人は別れたが、しばらくすると老人が持つ携帯から〇はつ〇いよのテーマ曲が鳴り始めた。

「ふぉふぉ、高畑君か」

『はい学園長。二人は無事に保護できましたよ。ですが、二人ともかなりの重症です』

「ウム、治療術師を呼んでおる。安心してくれ」

『ありがとうございます。ですが、これからはこういふことはあまり生徒にやらせないで下さい』

「わかつとる。今回はワシの判断ミスじゃった。これからは気をつけよう」



『……はい。よろしく願いします』

その言葉で電話は切れた。

電話を服にしまうと、老人は先ほどの爆発が起きた場所を見てもた。

そこには、先ほどとは違い古びた廃墟の建物が建っているだけで爆発など影も形も無かった。

「……………これからが面倒じゃな……………」

老人が言ったその言葉にどんな意味があるかは、その老人以外誰にも分からないだろう。

……………  
……………  
……………

夜。

アヌビスはボロボロの体を引きずるように歩いていた。そしてようやく、彼が住む家に辿り着いたのである。

「…帰ってきた。

……………私は帰ってきたぞー！！」

「お帰りなさい。アヌビスさん」

「茶々丸！俺はやっと帰ってこれ……………ブバラッ！？」

玄関を開けて茶々丸が出迎えてきて感涙極まったアヌビスの頭に何故かトンカチが満載の工具箱が降って頭に直撃した。

「あの、大丈夫ですか？」

「茶々丸……エヴァに……コレ……って言うと……いて」

中指を立てたまま、玄関に入る三十センチ手前でアヌビスは沈んでしまった。

結局、アヌビスが起きたのは翌日の朝であった。



「……………」

返ってきたのは沈黙だったが、その意味は肯定であった。

「……………分かったか？」

「……………でも、どう考えてもエヴァがおかしくなったとしか……………ぬ  
おあああああああああああああ……………」

「……………分かったな？」

「……………イエッサー……………」

まさに、絶対王政である。

……………

……………

……………

その日、時計の針が十二時を指した頃、茶々丸は一冊の本を持ってアヌビスを見ていた。

そして、テーブルを挟んでアヌビスは少し面倒臭そうな顔をして、一枚のプリント用紙に書かれている問題をスラスラと解いていた。

そして、テーブルに置かれてある時計が時間切れを告げるように鳴った。

「時間です」

「……終わったよ……」

時間切れだと茶々丸が言っているとアヌビスは糸が切れた人形のようにテーブルに突っ伏した。

「……出来はどうでした？」

「さあ？全部埋めたは埋めたけど、手応えは微妙な感じ」

「……見た感じでは良さそうでしたよ」

「そりゃ嬉しいね」

そう言っただに寝っ転がり、グデーと怠けていると、二階からエヴァが降りてきた。

「終わったか？」

「ちようど今終わったよ」

「フン、そうか。」

（終わってなかったら、邪魔してやろうと思ったが……もう少し早めに来れば良かったな……）  
なら支度をしる。茶々丸、アヌビス、出掛けるぞ」

「俺は疲れてるから……分かりましたから。その物騒な改造スタングンをしまっして下さい……」

「行くぞ」

「了解です」

「ウイス」

そう言って、エヴァたちは家を出ていった。

……

……

……

「んで？どこ行くの？」

支度をして、と言ってもアヌビスは普段着のYシャツとジーパンであるし、茶々丸も直ぐにでも出かけられる格好だったので直ぐ出発した。ちなみに、チャチャゼロは暑いのは嫌とので留守番である。

「この学園の学園長をやっているジジイのところだ」

「……………どんな人だっけ？」

「……………頭が若干人外になっている奴だな……」

「なるほど、分からん」

「あながち、間違っているとも言えませんが……」

「……マジっすか？」

「マジだな」

沈黙。

これから自分が会うのは、本当に人間なのか、本気で心配してきたアヌビスをよそに、三人は歩いていく。

歩いてしばらくの後。

エヴァの家がある森を抜け、前に脱水症状で死にかけてた思い出がある町に入ると、チラホラとスポーツ系の部活に入っているとされる学生の姿が現れてきた。

「ん？」

「あそつか、そろそろ世間は二学期って奴だな」

「ん？ああ、そうだな」

「宿題やったか？」

「当たり前だろ。お前は私を何だと思っている？」

「言つと殺されると思うから、あえて言わない」

「チッ」

言えば確実に酷い目になる。

学習しているアヌビスをエヴァは殺りたかったのか、不満そうな顔で舌打ちをした。

「……ところでさあ、茶々丸」

「何ですか？」

「……なんか、見られてる気がするの……俺の自意識過剰？」

「いえ、それは間違いなくそれは自意識過剰ではありません」

「……そっか……エヴァ、何したんだ？」

「そこで私にふるのか!？」

今までの会話からすれば、まずは自分が何かしたのかと考えるべきところなのだが、そこはこの頃色々な意味で進化を続けているアヌビス。エヴァの予想を越えた考えを口にした。

だが、見られてるということ自体、エヴァはさして気にしていなかった。

何故なら、エヴァはこの視線の主たちがどんな人間なのかよく知っているからだ。

昨日、アヌビスが襲われた原因。その半分は彼女にあったからである。

話は数日前、場所は麻帆帆良学園の学園長室でのことである。

……

……

……



「それで？あのバカに監視までつける意味を教えてくださいませんか？」

夕方。

学園長室にエヴァと二人の男がいた。

「すまんのぉ、悪いがそれは教えられん」

「…何？」

一人は眼鏡を掛けたダンディーな男。

名を高畑・T・タカミチといい、エヴァのクラスの担任である。

もう一人は老人。

名を近衛近右衛門といい、この学園の学園長を勤めている。

「そんなことより、色々嫌がらせするの止めてくれんかの？」

「…何のことだ？」

ニヤニヤした顔で言っても、全く説得力がない。

「…ガンドルフィーニ君が彼を町中で見ていた時、『何故か』何処からか飛んできたボールが十回もぶつかったり。

明石君の時も、『何故か』鳥のフンが彼の近くに落ちてきたり。

ワシも、『何故か』この頃少しずつタンスにしまっていたへそくりが減っていたり」

「最後は関係ないだろ」

「…大有りじゃ」

「学園長、僕も最後のはあまり関係がないと思うんですけど…」

今まで黙っていた高畑だったが、今のはさすがにツツコミを入れるべきだと判断したのか、冷静なツツコミを入れた。

「……と、とにかくじゃ。」

エヴァ、魔法先生たちに嫌がらせするのは止めてくれんか？」

「何のことだか分からんが、今すぐ奴を監視させる理由を答えれば、どっかにいる犯人はやめるんじゃないか？」

ニヤニヤした顔で言うエヴァを学園長はやれやれと思いつつながら考えた。

学園長の考えていること、それはアヌビスが昔の『あの男』に戻ってしまつたという最悪の事態。

あの時のようなことにはなつてはいけない。

なのに何故、自分はその時アヌビスのミイラを無理やりでもいいから手に入れなかつたのだろうか？

だが、悔いても遅い。

今となつては、彼を　アヌビスを極力見えるところに置かなくてはいけないのだから。

「……アヌビス君を…教師にでもしてみるかの？」

「「……は？」」

あまりの会話の脈絡の無さに高畑とエヴァは呆気に取られた顔になる。

まあ、旗から見ても分かる通り、完全に脈絡が無い言葉だ。

「……いやいや、アイツを教師にする？」

遂にボケたか？それとも、死ぬのか？」

「ボケてはおらん」

「学園長、さすがにそれはボケたと勘違いされてもおかしくないですよ」

「分かつとるわい。一から説明してやるから待つとれ。」

……まず、ワシとしてはアヌビス君は監視はしておきたいわけじゃ

「それがどうやってたら、教師に繋がるんだ？」

「少し待たんか。」

彼の危険性については……今のところ説明できん。というか、彼の力だけなら、エヴァもよく知つとるはずじゃろ」

「……まあな。」

アイツの腕にある術式は見たことも無い。誰があんな変なものを作つたんだ？」

見たことが無い術式。

アヌビスの両腕にある術式は確かにエヴァは見たことは無い。

六百年生きた彼女が見たことが無いということは、よほど人の目

に触れられることの無かった術式か、つい最近と言っても十年か二十年程前に作られた新しいものなのか。

さらに言えば、あの術式はかなり効率というものが悪い。

腕に組み込むのであれば、剣を生み出すという能力だけでなく、斧や槍、弓、盾など、様々な武器を出せるようにさせれば良かったものを、アレはただ剣だけを生み出しているだけだ。

仮にアヌビスの元となったオリジナルがそれを作ったとあれば、確実に彼は魔法についてはある程度はかじっていても、詳しくは知らない。もしくは、ワザとそうしたという結論に達する。

もっとも、後者であった場合、それはかなりの自信か、ただのハズレでそうしたのかという話になるが…。

「…ワシも知らん。」

彼は何故か知識はちゃんとある。それに、一般的な教養もあるしのことだったら、教師にして、監視すればよい。そうすれば、わざわざ魔法先生を一々尾行させるという真似をさせずに済むからの」

「……なるほど、確かにお前達はそのほうが良いだろうな」

「そうじゃろ？じゃから」だからこそ、駄目だ」…何故じゃ？」

「私のメリットが無い。」

アイツは私の下僕だ。下僕をお前達のところへ預けるのだぞ？その見返りぐらい寄越せ」

「（相変わらず、がめついのお）

分かった分かった。だとしたら、何が欲しいんじゃない？」

そう言つと、エヴァは顎に手を置き考え始めると、何か思い付いたらしく急にニヤニヤした顔になった。

それを見た学園長と高畑は「確実にロクなことじゃない」と思う二人は間違っていない。

「……………そうだな、なら…………アヌビスの給料を全部もらおうか」

「…………えつと、エヴァ？それは、アヌビス君が教師をやる場合、彼に渡す給料と同額のお金を渡せばいいんだよね？」

「……………ハア？」

お前もボケたか？タカミチ。

奴に渡す給料を私に渡せと言つたんだぞ？」

「……………(なんて鬼畜)……………」

もし、ここに労働組合がいれば、確実に怒りだすような労働条件が今決められてしまった瞬間である。

ちなみに、結構重要なお話したが、この件は本当に契約書に書かれ、アヌビスが教師を始めた最初の月の初任給は全てエヴァの元に流れて大騒ぎが起きるのは、また別のお話し。

……………  
……………  
……………

「……………でっかいなあー」

校舎を見たアヌビスの一言目はそれだった。

「この大きさは無駄過ぎるのではないかと、つくづく思う」

「…そんなにおっきいの？」

「この学園を知ってる人間が一般の学校を見たら、確実に『見る！まるでゴミのようだ！』とか言うくらいな」

「さすがにそれはないと分かる」

「……ちっ」

「（舌打ちしたよ。この幼女。」

しかも、今ので今日何回目の舌打ちだよ？」

露骨に不機嫌そうな顔で舌打ちするエヴァを無視するが、今はこの場から動かないため、アヌビスはエヴァから嫌味が籠った視線を感じていた。

ここは麻帆良学園女子中等部の校舎前の噴水。

エヴァの話だと、学園長から迎えを寄越すとの話で三人はここで待っていた。

「……まだ来ないのかな？」

「もう来る頃だが……あの手の奴が遅刻とは珍しいな」

「何？来るの知り合い？」

「まあ、知り合いと言えば知り合いだな」

「正確には、クラスメイトです」

「へ〜。こりゃちゃんと挨拶しなきゃ」

「…ちなみに聞くが、何故だ？」

クラスメイトと聞いた時点で意味もなくせつせと髪型を整えるアヌビスを見てエヴァが問いかけた。

「ん？そりゃ、いつもウチの生意気お転婆幼女が世話になっていますつて、ご挨拶……をあああああああああ……！！！！」

「誰が幼女だ？誰が？」

エヴァの右手にあるのは無論スタンガン。  
それさえあれば、アヌビスの反応は簡単にお分かりだろう。

「……あ、あの……」

そんな光景を見て引きながらも声をかけてきた少女がいた。

「ん？お前にしては遅かったな」

迎える者だというのは分かるが、生憎アヌビスには現在復活の途中であるため誰なのが分からない。

だが、つい最近聞いた声であるのは分かる。後、この声の主に良い感情も何故か湧かない。

「……スイマセン。病院のほうに用事がありまして……」

「まあなんにせよ……起きんか!?!」

「グホツ!?!??」

わき腹に入った蹴りが見事に復活途中のアヌビスに大打撃を与えたが、そこは漢アヌビス、何とか再びダウンしないようにと踏ん張った。

そして、顔を上げてみると　いた。

「……あつ、どうも……」

「……辻斬り女……」

「辻斬りじゃないです!?!」

いた少女にアヌビスは見覚えがあった。  
というか、嫌でも忘れられるわけが無い。

「……ていうか、生きてたんだ。」

「……死んでればよかったのに……」

「……その、何とか、助かりまして……」

「……チツ」

昨日あった冗談抜きの本気の鬼ごっこを繰り広げた相手の一人。



桜崎刹那がそこにいた。

**第八話「教師になれ？マジですか？」（後書き）**

さて、話がちょっと（）じゃないと思うけど（）飛びます。

そして、遂に次回から二学期が始まります！

後、何でもよろしいので感想ください…。

第九話「クローン先生、アヌビス！」（HR編）  
【前書き】

長くなりそうなので、三つに分けます。

## 第九話「クローン先生、アヌビス！（HR編）」

九月一日。

世間では二学期が始まるこの日、一人の男が緊張していた。

「そこまで緊張する必要ないと思うんですけどね……」

「アンタは今まで担任だったから別に大丈夫だろ？」

「いや、まあ確かにそうですね……」。

それにしても、見事に黒のスーツが似合ってますね。アヌビス先生  
「？」

長い廊下を二人の男が歩いている。

一人はアヌビスだが、服装がいつものYシャツとジーパンではなく、黒のスーツにその身を包んでいた。

そして、もう一人は高畑・T・タカミチ。彼も普段のスーツ姿で歩いている。

アヌビスの手には出席簿があり、その出席簿にある顔を今現在必死に覚えていた。

「にしても、こうして見るだけなら、とても学年一の問題児クラスとは思えないな」

「ハハハ、みんな良い子ですから。」

そんなに身構えなくてもいいですよ」

「……どーだか？」

それ以前に、そもそも何故アヌビスが教師としてここにいるかと聞かれれば、それは約一週間ほど前にさかのぼる。

……

……

……

「……本当に人外だわ。この人」

「出会って一言目がそれかの？」

あの日、エヴァに教師になれと言われ、学園長に会いに行った日のことである。

刹那に案内され、エヴァと茶々丸と共に学園長室にやって来たアヌビスの一言目がそれだった。

「いや、だって、どう見たって……ねえ？」

「否定はしない」

「あえて、ノーコメントです」

「ひびっ!?!?」

アヌビスの問いかけに肯定の意思を示したエヴァや、言葉にはしないが完全に肯定の意思を示した茶々丸に対して、学園長から声が

上がったが完全に無視した。

「…オ、オホン、君がアヌビス君か？」

「そうだ。俺様がアヌビスだ。分かったのなら、即座に敬え」

「何でコイツ、急に偉そうな態度とり始めたんだ？」

「それは恐らく、マスターの「何だ？」……いえ、何も」

影響。

そう言おうとする前に、エヴァが睨んできたためそれ以上は茶々丸は言えなかった。

「元気なことじゃのう。

それで、今日君に来てもらったのは他でもない。

この学校で「Yesだ」……よ、良いのか？まだ何も言っておらんぞ？」

「教師になってくれだろう？」

大体はエヴァから聞いたよ。答えはYesだ」

とは言いつつも、アヌビスの心に下心がないわけではない。

というか、なかったらそれは今のアヌビスでは考えられないことだ。

アヌビスは常に戦ってきた。

時には足の骨を折られるかのような激痛と、時には死を覚悟するくらいの魔法を使ってくる不老不死の幼女と、そして、つい昨日は

依頼を受けたという二人の殺し屋と。

そして、アヌビスはそれに対し必ず生き残ってきた。

だからこそ、アヌビスは決めたのだ。

必ず、復讐してやると。

とは言っても、殺すなどといった手段を講じるのは愚の骨頂。そんなことをすれば確実に捕まってしまうからだ。

だからこそ、彼が選んだ道は、ただ一つ。

それは　　嫌がらせである。

「（教師になれば、表面的にいくら下に見られても実質的にも立場は上！

フッフ、これを機会にエヴァにたっぷりと嫌がらせしてくれる！  
ついでに辻切り女と褐色スナイパーの二人にもだ！フッフ、フハハッハッハッ！！）」

「（ううむ、心を読むとかなりひねくれておるのお。

まあ、許容範囲じゃから、これくらいは別に問題ないかの）」

アヌビスが自分の心を読んでいる学園長に気づくことなく、二人はそのまま表面的には笑顔のままだった。

そして、話が大体終わり、エヴァが退屈過ぎて欠伸が出始めたため、アヌビスたちが帰ろうとしたとき。

「あ、そうだ。学園長」

「ん？まだ何かあったかの？」

ふと、アヌビスが何かを思い出したように呟いた。

「あのお　　何でアンタに殺意が湧くの？」

……

……

……

「今思えば、何であんなこと聞いたんだろ？」

「さあ？僕はあの場にいなかったからよく分かりですけど……。本当に何でそんなこと言ったんですか？」

「うーん、実際学園長に対して殺意が何故か湧いたのは確かなんだよな」

「ハハハ、まあその話はこれで止めましょう。」

「……さて、着きましたよ」

「うわっ、一気に現実に戻りましたよ。この担任」

そう、いよいよだ。

いよいよアヌビスは彼が副担任としてこの秋から受け持つことになった2-Aの前に立っている。

教室からは、ガヤガヤと生徒たちの騒がしい声が聞こえる。



「……高畑先生、やっぱり帰っちゃ駄目ですか？」

「さて、入りますよ」

「（……駄目ってわけですね）」

最早、諦めるしかないと思い、覚悟を決めてドアを開けた瞬間

アヌビスの目に三本の先っぽが吸盤のオモチャのダーツが飛んで来るのが見えた。

だが、ここで素直に喰らうようなアヌビスではない。

ダーツが視界に入った時、既にアヌビスはその身を反応させていた。

全てがスローモーションに感じられたアヌビスは体をマトリック  
ス並みの柔らかさでブリッジの体型にしてダーツを三本共避けき  
てみせた。

「……「おおー！！」「……」

歓声上がるのが聞こえる。

「……アヌビス先生……」

「うおっ！？高畑先生、どうしたの！？その顔！？」

自分の名前を呼ぶ声があったので後ろを見てみると、そこには高畑  
がいたのだが、その顔はオモチャのダーツが三本くっついていて

「……………あはー、メンゴメンゴ」

「全く、さあ前に進んで下さい」

「ハイハイ、分かりまし……………ッ！担任シールド！」

高畑に言われ、歩いていると今度は教室の後ろからさっきと同じオモチャのダーツが飛んできた。

だが今回は、高畑・T・タカミチという名の担任シールドを展開することによって、また難を逃れた。

「……………おおー！！……………」 「チツ、失敗したか……………」

今、歓声の中で誰かが舌打ちした音がアヌビスの耳に入ったが、無視した。

「……………アヌビス先生？」

「高畑先生、俺に構わずHRを……………」

「……………ハア……………」

怒る気力も失せたようだ。

「えっと、日直は号令を……………」

「……………あ、えっと、起立、気をつけ、礼」

「……………おはようございます……………」

「うん。おはよう。」

さて、みんな夏休みは

高畑の言葉を耳で流しつつアヌビスは横のほうでクラスを見渡していた。

やはり、突然現れた自分という存在が珍しいのか、クラスの視線が先ほどから自分一点に集まっている。

ふと、教室の後ろのほうでエヴァが一人ニヤニヤと笑っているのが見える。

恐らく、自分のスーツ姿のことだろう。

今朝もアヌビスがスーツに着替えた姿を見て大笑いしていた。そこまで見合わないのだろうかとアヌビスは真剣に思い始めてきた。

他にも茶々丸を見てみると、ニコツとエヴァとは百八十度違う笑みを見せられ、もう少し涙腺にひびが入るところだったのは、誰にも言えないことだ。

超や博士の姿もあり、こちらはアヌビスのこれからを楽しみにしている親のような顔で見ていた。

そして、他にもクラスを見てみると　やはり、いた。

桜崎刹那。そして、龍宮真名。

アヌビスが忘れるわけも無い。

あの冗談抜きの殺し合いを繰り広げた相手がこの教室にいた。

刹那のほうは若干アヌビスに対して罪悪感やトラウマがあるのか

かなり控えめな感じであるが、問題は真名のほうである。

こちらは完全に敵意を見せている。

先ほどからアヌビスを見つめる視線には明らかかな敵意が混じっていた。

刹那とは、先日学園長に会った時に向こうから謝罪があったので今はそれ程悪い仲というわけではない。無論、良いとも言えないが…。

だが、真名とはあの日以来、今が初めての再会となる。

何故彼女があれほどまでに敵意を向けるか、アヌビスにも心当たりが無いわけではない。

というか、メチャクチャある。

刹那から聞いた話なのだが、俺は真名の右手にかなりのダメージを与えてしまったらしい。

どのようにして？と聞かれれば、具体的には術式によって出した小太刀で彼女の右手を突き刺し、その後グリグリとやってしまったことだ。

だが、アヌビスに謝るといふ考えは全く無い。

それ以前に、彼女たちから襲ってきたのだからアヌビスは謝罪されるいわれはあっても、するいわれは無いのだ。

だからこそ、向こうから謝ってこない限り、絶対に謝らないとアヌビスは決めている。

「先生、アヌビス先生！」

「え！？何！？」

「…先生から自己紹介をお願いします」

「ああ……了解」

いつの間にか高畑の話が終わっていて、アヌビスの自己紹介の時間になったらしい。

高畑に促されるままに真ん中に立つと、クラス中の視線が一気に集まる。

「（オーケー、こんな中でギャグをやったってその後が怖い。無難に行こう）」

……えっと、本日より、この麻帆良学園女子中等部2 - Aで副担任をすることになりました。

アヌビスです。ちなみに、教える教科は社会となります。よろしくお願いします。

（うっっ、こんなんでいい…よね？）

頭を軽く下げて、クラスの反応をうかがう。

話した言葉に問題は無いはずだ。にもかかわらず、クラスからは何の反応も無かったが、次の瞬間

「……………かつこいいー……………!!」「……………」

「…は？ってうお!？」

噴火。

例えるならそれが相応しいだろう。

一瞬の静寂の後に雪崩れ込むようにクラスのほとんどの人間がア

又ビスの元の詰め掛けてきた。

「ねえねえ、何処住んでんの!？」

「好きな食べ物は何?」

「彼女いますかー!？」

「っていつか、アヌビスって何!?それが名前!?苗字は!？」

まさに噴火し続ける火山のような勢いである。

そして、アヌビスがふと教室の奥のほうを見ると、超とエヴアが腹を抱えているのが見える。

確実に笑うのを堪えている。先ほどのアヌビスの自己紹介、確かに無難だった。

いや、無難すぎた。そして、顔に浮かべた営業スマイル。普段の彼を知っている彼女らからすれば、かなり可笑しい物だったようだ。

「あーちよつと、落ち着け。落ち着いてから質問に答えてやるから……って、誰だ!?!今尻触ったの!?!」

「あーハイハイ、みんな質問は今日の二時間目。アヌビス先生の授業の時にしようね」

パンパンと手を叩いて、席に座るよう促す高畑をアヌビスは視界の隅で確認すると、生徒たちの波は一気に引いていった。

無論、エヴアたちは終始腹を抱えていたのはアヌビスは絶対に忘れないだろう。

「よし、じゃあHRはこれで終わりにするよ。号令頼むね」

「あ、はい、起立、気をつけ、礼」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

HRが終わった。

ちなみに、この時点でアヌビスの体力は絶好調が百とした場合、既に三十辺りまで削られていた。

第十話「クローン先生、アヌビス！」（授業編＋放課後編）（前書き）

投稿遅れてしまってスイマセン。

三つに分けるとか言っておきながら、結局二つになったという…。

バカしたな〜。



第十話「クローン先生、アヌビス！（授業編＋放課後編）」

HRの後、アヌビスは職員室に戻り体を休めていた。

正直な話。アヌビスはかなり女子中学生のパワーを侮っていた。それが先ほどのHRで身を持って思い知らされた。

「どうですか？朝の先生のお仕事をやってみて？」

暫くすると、そんなアヌビスの様子を見て気になったのか、学年主任の新田先生が彼の元を訪れてきたのだ。

「あ、新田先生。

……そうですね。思っていたのより、すっごくきつそうです。

2-Aは特に元気でしたから、HRだけでかなり疲れましたよ」

「まあ、あのクラスは少々ほかとはずれておりますからな。

二時限目からですよね？イタズラに注意してください。あいつらは毎度毎度やりますから」

「気をつけましょう。ありがとうございます」

「いえ、では私はこれで」

新田は魔法のことなど全く知らない一般人だ。

アヌビスの知り合いは、そのほとんどが魔法関係者。その中で魔法について知らない人間は、ある意味アヌビスにとって貴重な存在といえよう。

「(とはいえ、騙しているみたいでいい思いはしないんだけどね…)」

学園長から麻帆良学園で勤める時、いくつかの約束事があった。その中の一つとして、魔法については一切一般人に漏らさない。という約束事があった。

「ハア、難儀だねえ…」

職員室で呟いた言葉は誰にも聞かれることなく、周りの音にかき消された。

……  
……  
……

その頃、21Aでは。

「(ねえねえ、アヌビス先生のことどう思う?)」

「(あれはイイと私は思うよ)」

「(やっぱり、そう思う? 顔も良かったよね)」

「(顔だけじゃなくて、雰囲気も良かったよね。

何て言うか、いざという時は守ってくれそうな感じ)」

「(高畑先生とはまた違ったあの感じが良さそうだったよね)」

「（そうかなあ〜？高畑先生のほうがずっとかっこいいと思うけど…）」

「（やっぱり、明日菜は高畑先生ラブだね〜？）」

「（五月蠅いわよ！パル！）」

「（明日菜、今は授業中やさかい、声のボリュームもう少し下げてくださいな）」

「（ほんとですわ、やっぱりおサルさんですわね。ただ吠えることしか出来ないなんて…。」

あら、これではおサルさんではなく、ただの犬ですね）」

「（何ですって！〜？もう一度、試してみなさいよ！このシヨタコン！〜！）」

「（誰がシヨタコンですか！〜？このオヤジ趣味！〜！）」

「（何ですって〜！〜？）」

「（あああ、あの、授業中ですから喧嘩は…）」

「（ほっとくデスヨ…。。いつものことですから…）」

「（まあ、いい感じじゃねえの？）」

「（つてか、私が仕掛けたイタズラを全部避けるとか、何者！〜？）」



「（個人的には、あの自己紹介はとても良かったと思いますが…）」

「（まあでも、普段の彼を知っていると、どうしても笑いたくなるものですよ）」

「（そういうものですか？）」

「（ククク、アイツが、あのアヌビスが……イカン、笑わずにはいられん）」

「（……エヴァンジェリンさんも同じのようですね）」

「（……マスター……）」

色々と、アヌビスのことが議論されていた。

「み、皆々。授業に集中してね？」

そして、数学担当の瀬流彦が苦勞していた一時間目であった。

……  
……  
……

そして、二時間目のチャイムが鳴る一分前。

2-Aの生徒たちはアヌビスが来るのを今か今かと待ちわびていた。その視線の先には、ドアの上に仕掛けられたイタズラがあった。

「（フッフ、今回は力作だぞ〜？）」

イタズラを仕掛けた張本人たる生徒もアヌビスを待っていた。

さあ？どんな反応をする？

クラスの思いはそれ一つに纏まっていた。

ドアの上に仕掛けられたイタズラは、ドアを開けると同時に水が入ったバケツが落ちてくるというイタズラであるが、かなり凝った仕掛けである。

もし、これを担任である高畑がそれを見ていたら、その頑張りの十分の一でも勉強に回して欲しいと願うだろう。

そして、ついにチャイムが鳴った。

チャイムの音が今の彼女たちにはとてもゆっくり聞こえるだろう。

そして

「うし、授業始めっぞー」

アヌビスは普通に入ってきた 窓から。

「…………ちよつと待てー！！」

「……………何？」

生徒たちの声を面倒そうな顔で対応するアヌビスに対して、彼女たちは言いたいことがあまりにもたくさんあった。

「何で窓から入って来るの!？」

「気が向いたから」

「何で普通に入って来てるの？」

「他に入り方があるのか？」

「どつやって登ったの!？」

「普通に登った」

飄々としたアヌビスの答えにクラス全員疲れてしまった。

「質問は終わりか？」

「なら、授業始めっぞー？」

「質問、先生はこのクラスのエヴァンジェリンさんと茶々丸さんと同居していると聞いたのですが、本当ですか？」

瞬間、クラスの空気が凍りつく。

ゆっくりと、声のした方向を見ると、そこにいたのは、それはもう綺麗過ぎるほどの笑顔の龍宮真名がいた。

「ああ、そつだよ。ちなみに俺はエヴァの遠い親戚でね。それがどつかしたかい？龍宮さん？」

そしてその質問に対するアヌビスの答え方もかなり丁寧かつ綺麗

すぎるほどの笑顔で。

二人の視線が交わった時、クラスの全員が一斉に悪寒を感じた。そして確信した。

この二人は絶対に知り合いだ。そして、絶対に仲が悪いと。

「いやいや、それならそれでいいんだが………変な噂でも立たないことを祈るよ」

「ハハハ、安心しろ。そんなことする奴はまた串刺しにしてあげるから。主に右手を」

「そうかそうか、でもそれではいけないね。私が殺ってあげるよ」

「生徒の手を煩わせるわけにはいけないよ」

「フフフフフフフ」

二人の笑い声とともに空気はどんどん重くなっていた。だがそこに救世主は必ず現れる。

「ア、アヌビス先生。そろそろ授業を始めませんか？龍宮さんも、座って。」

み、皆さんも、席に座ってください」

「……………(いいinchよ、ナイス!!)……………」

クラス委員長の雪広あやか言葉に皆が動き始めると真名も席に座り、アヌビスも持ってきた教科書を開いて授業を始めた。



授業内容は初回ということで、クラスの实力を図るために簡単な小テスト。

それが終わると、アヌビスの面倒という発言が発端となり、自習ということになったのだが

「……………何の用だ？」

「……………別に」

何故か真名とアヌビスが二人して黒板の前で話をしている状況になってしまい、再びクラスの一部に重い空気が蔓延してしまうことになってしまった。

本当に、どうしてこうなった？

「ね、ねえ、茶々丸さん」

「なんででしょうか？朝倉さん」

「何でアヌビス先生と龍宮さんって仲が悪いの？」

そんな二人の姿を見て疑問に思い、朝倉和美は茶々丸に問いかけたのだが、ここで茶々丸は考えた。

アヌビスと真名の関係。

教師と生徒の関係というのは質問からして駄目だろう。となれば、どう答えるべきか。

魔法について教えるわけにはいかない。しかし、それでは質問の答えは彼女の求めるものではなくなるだろう。

となれば、答えは正しい答えかつ、魔法について触れない内容と

なる。

それを考えた上での茶々丸の答えは

「殺るか、殺られるかという感じでしょうか」

「……………えっと、あ、あはははは……………マジ？」

「間違っではないと思います」

「…さようございますか」

「ハイ、よろしかったでしょうか？」

「あ、うん。あ、ありがとうね。」

（あの二人って何者？）

茶々丸の答えにやや引きつつも、朝倉は席に戻って行った。

それを見て、茶々丸は自分は何か間違えたのかと疑問に思うが、結局答えは出なかった。

そして、そのまま授業は自習のままチャイムが鳴り授業は終わった。

……………

……………

……………

放課後。

職員室でアヌビスは黙々と今日やった小テストの採点をしていた。

「(酷すぎる。このクラス。最高点が超たちってのは分かるけど、十点未満が五人もいるって…。全体的に見ても、点は低いし、これは酷い)」

高畑からの話である程度は聞いていたが、あまりの成績の酷さに目も当てられない状況だった。

仕方なしに、今後どうするべきかを考えていると、職員室に茶々丸がやってきた。

「アヌビス先生」

「ん？おお、茶々丸か。どうした？」

「少し教室に来てもらってもよろしいですか？」

「え？別にいいけど…？」

茶々丸に連れられて職員室を出る。仕事はまだ就任初日ということであまりないので少し暇だったのだ。

茶々丸と一緒に廊下を歩いていると、茶々丸のほうから話しかけてきた。

「そういえば、良かったですよ。今日の授業」

「そうか？まあ、少し緊張はした………ってか…超とエヴァの二人、笑ってたな。最後まで」

「授業終わった後も笑っていましたよ」

「（あの二人、いつかぶっ飛ばす）」

頭の中で一方的な殺戮を広げていると、茶々丸が笑顔で語りかけ  
てきた。

「ですが、アヌビス先生には感謝して「ちょい待て」………なんでし  
よっ？」

「他に誰もいないときは今までどおり呼んでくれ。さっきから背中  
がむずかゆい」

そう言うと、茶々丸は少し驚いた顔をしたが、直ぐにいつもの笑  
顔に戻った。

彼女の頭では、恐らく自分の事を微笑ましく思っているのだらう  
とアヌビスは思ったが、概ね間違っていないかった。

「では、アヌビスさんと」

「うんうん。で？俺に何？」

「はい、アヌビスさんには感謝しております」

「……………何故に？」

「マスターは昔は何時も退屈そうなお顔をされていましたが、アヌ  
ビスさんがいらっしやっしてから、いつも楽しそうなお顔を見せて  
います。」

本当に、ありがとうございます」

「（感謝してくれるのは嬉しいんだけど……その代わりに、俺が死にかけるのはどうにかして欲しいな……）」

感謝されるのは嬉しい。

だが、その対価として日々の暴力となると、かなり微妙なところだ。

そう考えている内に2・Aの教室の前に着いたが

「どうかしましたか？」

「……いや、なんでもない」

そう言っつて、テクテクともう一つのドアのほうに歩いていく。

「（バカめ！何度もやっても俺はそう簡単に引っかからん！）」

ドアに手をかけた瞬間感じた違和感。まるで何かを吊るしているような重みをアヌビスは手で感じ取った。

2・Aの生徒達がまたイタズラを仕掛けたのだとそう思い、何も仕掛けていないであろうもう一つのドアを開けた。

「愚か者がツ！この程度で俺が」

だがそれが失敗だった。

アヌビスの目に映ったのは2・Aの生徒達のでやったりという顔であり、それを確認した瞬間に彼は地震の行動が読まれていたのだと理解した。

その直後に全身に冷たい水が上から降ってきた。

「…………アヌビス先生！2-Aによろこそ……！！」「…………」

「……ああ、ありがとう………って！ごまかされねえよ！！」

歓迎会のつもりなのだろう。

だが、納得いかない気持ちはかなりあった。

「ハハハハハ、いいじゃないですか？アヌビス先生。

ここは生徒達に寛容であることを見せてあげましょうよ？」

「高畑先生？アンタ知ってたな？」

「何のことやら？」

あくまで笑顔であるが、その顔の裏には確実にザマアという表情が見える。

恐らく、朝の一件についてまだ怒っていたのだろう。

「……………こいつらは……」

「まあまあ！先生ここは怒らないで！」

「お詫びに楽しくしますから！」

「者ども！先生の歓迎会の始まりだ……！！」

「……………イエーイ！」「…………」

「…………ハア…………」

謝りもせず勝手にバカ騒ぎを始める彼女らに対してアヌビスはため息しかでない。

だが、アヌビスは思う。

これから長い間一緒に過ごすことになるメンバーだから、今日だけは多めに見てやろうかと。

「まずは何から始めちゃう!？」

「それなら「王様ゲームだ!無論、ずっと俺のターンだぞ!」ちよ、先生自重!つてか、くじとか用意してないし!」

「フツ、超!勿論31人分用意しているな!？」

「勿論ヨ。こんなこともあるつかと…!」

「持ってんのかよ!？」

「始めるぞ!さっさとくじを引け!まずは17番が28番に情熱的な愛の告白をしろ!」

「うおー!いきなりハードだー!」

これから始まる。

アヌビスの楽しくて、色々と暴力的な日常が。

第十一話【彼らの朝はいつもこんな感じですよ】（前書き）

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

本当にごめんなさい。

学校の試験が終わったら直ぐに書き始める予定だったんですが、ネタが思い浮かばないわ、面倒になったりでスツカリ遅れてしまいました。

今回から、一人称視点を導入してみました。

ただし、慣れないせいか、自分で読んでみてかなりグダグダな話になってしまいました。

本当にスイマセン。

では、本編どうぞ。



## 第十一話【彼らの朝はいつもこんな感じですよ】

視点 真名

私は、自分が一流のスナイパーだと自負していた。それは自惚れであるかも知れないと自覚していた。だが、それでも私は一流であると自負していた。

あの男と会うまでは

あの日、夏休みの終わり頃。

私は相棒（仮）の刹那と共にある一つの依頼を受けた。

内容は、一人の男を叩きのめせ。もしターゲットがこちらを殺すような素振りを見せれば、殺しても構わない。

実にふざけた内容だと思った。だってそうだろう？

叩きのめせという前半部分はまだ予想はできる内容だ。だが、問題は後半部分だ。

殺す素振りを見せれば、ふざけているのか？

そんなもの、絶対にそうなるに決まっている。誰が好き好んで叩きのめされる人がいるんだ？

まあ、世の中にはそういう趣味を持つ奴もいる入るのだが…。今はどうでもいいことだ。

依頼は受けたら必ずこなすというのが私のポリシーだ。無論二つ返事で受けた。報酬も良かったからな。

今にして思えば、そのときの私はかなり慢心していたのだろう。

殴れるものなら思い切り殴ってやりたいものだ。

結果だけを言うなら、大失敗だ。

私は右手を半ば使い物にならないようになるまで傷つけられ、刹那も体に深い傷を負った。治癒術師がもしいなかったら、私はこの世界から引退せざるをえなかったかも知れない。

あの男　　アヌビスは間違いなくあの子の私よりも強い。

いや、今でも敵うかどうかは分からない。だが、今度は油断はない。

だが、それ以上にあの男を許せないことがある。

『……ふん。あつそ、じゃあ、頑張って生き延びてね。俺疲れたから』

ダンツと壁を拳で叩く。

シャワー室の壁のタイルに少しヒビが入るが、そんなものは気にしない。

屈辱。

あのとき、あの男は疲れたからという理由で私を見逃した。許せるものか。

あの男が私を放して立ち去った後、直ぐに高畑先生が助けに来てくれたが、本当に助かった。刹那は両膝に黒鍵が突き刺さっており、歩くこともできない状態。私のほうは意識はちゃんとしていたが、心の中は惨めな思いでいっぱいだった。

初めてだった。一人の人間に対して、あそこまで殺意が湧いたのは。

翌日、一応検査ということで私と刹那は入院したが、意識を取り戻した刹那はかなり落ち込んでいた。いや、半ばトラウマという感じだった。

刹那のほうの怪我は治癒の魔法であまり問題は無かったが、私のほうはかなり危なかったらしい。

右手をグチャグチャにかき混ぜるかのようにあの男はやったのだ。後遺症が残るかもしれないと言われたが、検査の結果は特に問題が無く、かなり安心した。

ただ刹那と違い、どうやら私のほうが重症らしく。私のほうが数日ほど退院が遅れたが、そのほうがよかったと思う。

あのときの私は、怒り狂っていた。

私の怒りは、完全に向かう方向を間違えていた。頭では理解している。これは間違いだ。だが、心はそれを理解できなかった。

退院の日。

刹那が退院の迎えに来てくれた。護衛はどうしたと聞くと、別の人間がやっている。今はいいと学園長から言われたらしい。正直な話、心の中で私は嬉しかった。

だが、帰る途中に聞いた話に私は驚愕した。

アヌビスが私達のクラスの副担任をすることになる。

そのときの私の感情は間違はなく歓喜の感情が占めていた。

これで奴に復讐ができる。私の右手を傷つけた礼をしなくては。そう思っていた。

だが、それも次の言葉でかき消された。

アヌビスに対して絶対に手を出してはならない。

今にして思えば、学園長もアヌビスという男についてよく知っているのかもしれない。

だが、どちらでもいい。今となっては、あの男、いや、アヌビス先生に対して一人の生徒として仕返しするしか手はないのだから。

シャワー室から出て、制服を着る。

今日もまた、一日が始まるのだが、少々憂鬱だ。

何故なら

「おっはよ！マナマナ！」

「……………おはよう。アヌビス先生。今日もお早いですね」

「いや~~~~今朝はエヴァの髪を使って遊んでいたんだけど。起きちゃって、急いで逃げてきたのだ~~~~。ハッハッハッハ！」

私が今いるのは女子寮の自分の部屋なのだが、同居人の刹那は護衛対象である近衛木乃香の護衛のためもう出ているのだろう。

だが、何故この教師は平然と人の部屋で朝食を食べているのだろうか？

「いや~~~~朝飯食べそこねてさ~~~~！ゴチになりまーーす！」



うな髪型にしてやったぜ!!

後で、報復が怖いが……俺はもうちょっとやさつとの痛みは感じないぜ!!

「ほづ?言ったな?」

「言ったとも!!ちょっとやさつとじゃ」「ならば」「……ん?ちよ、ンノオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

「どうした?ちょっとやさつとじゃなんともないんだろ?根性を見せてみる!!」

「お許しを、お許しをエヴァ様アアアアアアアアアアアアアアアアア  
!……!」

~~~~五分後~~~~

「……アヌビス……」

「……はい」

「この世で最も美しいのは誰だ?」

「それはエヴァ様でございます」

「この世で最も強いのは誰だ?」

「それはエヴァ様でございます」

「……なら……この世でもっとも心優しいのは誰だ!?!」

「それは……エヴァ様でございます!!」

「ウム、では私は教室に行く。お前も職員室に早く行けよ」

「ハハー、エヴァ様のお心遣い感謝します」

そう言っただけでエヴァは茶々丸と一緒に屋上から出て行くが、俺の体は半ば黒こげ状態だ。

何故かって？諸君らはエヴァが改造スタンガンを持っていることを忘れたのかい？エヴァの奴、この頃俺が耐性がついたとか言い始めやがって、スタンガンの出力上げやがった。

おかげで俺は半ば死にかけなんだよ。

「そして、それを見て笑っている奴が一人」

「いや〜〜何のことだか分からないね。アヌビス先生？」

白々しいガキだよ。この褐色スナイパーめが。

俺がフェンスのほうを見てみると、何故スカートが捲れないのだろう？と疑問に思いたくなるが、それは一旦置いておく。

フェンスの上に座っているのではなく、立っている形で真名がそこにいた。

「それにしても、いい絵でしたね？」

生徒にスタンガンで調教される教師……皆が知れば、どう思うのでしょうか？」

そう言っただけで真名は自分の右手に持つデジカメを俺に見せ付けるよ

うに見せる。

実際、彼女は見せびらかしているつもりなのだろう。

……だが、甘い!!

「フン、その程度で何か問題でもあるのかね？」

「何!？」

俺の言葉に真名は驚く。

彼女の考えは簡単に読める。俺の土下座写真などをバラ撒かれたくなければ、自分に何か土下座なりなんかしろとか言つつもりなのだったのだろう。

甘い。甘すぎる。お前はそんなものでこの俺が屈服すると思っていたのか？

「違うな。間違っているぞ、マナリン！俺は今更バラ撒かれた程度でどうなる存在ではないのだよ!!」

「……どうでもいいが、その呼び方はどうかしてくれないかい？」

「君が土下座するば考えなくもないな？」

「……じゃあ、力尽くで」

「ハッハッハ、カマーーン!!」

何回目だろう？教師になってから一週間後から始まったこの朝の殺し合い。



ちなみに勝負は現在全部時間切れで引き分けになっている。

「今日こそ、その顔を蜂の巣にしてあげるよ」

「なあゝゝにゝゝ？聞こえんなゝゝ？」

「クロス」

視点 茶々丸

新学期が始まり、半月ほどの月日が過ぎました。

朝、マスターの髪をワックスを使ってメチャクチャにしたアヌビスさんはいつも通りにマスターに新しく手に入れた改造スタンガンで徹底的に痛めつけられました。

「HR始めっぞー。毎度のこと、高畑先生は出張だー」

「って、先生！その怪我どうしたの!？」

「……朝倉……」

世の中にはな…知らないほうが良いこともたくさんあるんだよ……」

「……まあ、深くは突っ込まないであげる」

HRが始まりました。アヌビスさんは先ほど別れたときよりも怪我が重くなっているようですが、私は気にしない方向で行きます。

一応、後で傷に効く薬を渡しておくしましょう。

「（……そういえば、龍宮さんも怪我してるよね？）」

「（……ペロ、これは修羅場の味がする……）」

「（…アンタ、修羅場の意味分かって使ってるのよね？）」

そういえば龍宮さんも怪我していましたね。

龍宮さんにも渡しておきましょう。

「じゃあ、HR始めっぞー。

職員室で言われたが、後二週間で中間試験らしいな。

………食券、五十枚くらい渡せばテスト内容教えてやらなくもないぞ……」

「」「マジで！！？？」

「ちょ、先生！！何を言ってるっしやるのですか！！！？？」

「ちなみに、百枚出せば答えを持ってあげようと考えてあげなくもない」

「」「ウオツーーーー！！百枚！！百枚絶対にかき集めるーーーー  
！……！！」「」

「貴方達！！真面目に勉強をしなさい！！」

いつも通り、先生のHRは騒がしくなってきました。

ですが皆さん。アヌビスさんは『持ってあげようと考えてあげなくもない』と仰ってますので、あまり期待しないほうがよろしいのでないでしょうか？

「オイ、茶々丸。何一人で明後日の方を向いてるんだ？」

マスター。私はこの教室のこの雰囲気は好きですよ。

……騒ぎに関わらなければですが…。

今日も天気は晴れです。

明日も晴れるといいですね。

「何一人で終わらせてるんだ？お前」

第十二話【遂に現れる、俺の友達兼ツッコミ役!?!】(前書き)

夏休みに入ったのに執筆速度は速まらず、ダラダラ過ごす毎日である。

## 第十二話【遂に現れる、俺の友達兼ツッコミ役!?!】

視点 アヌビス

……友達……欲しいな……。

校舎の屋上からはしゃきながら帰っていく生徒達を見て俺はそう思った。

思ったんだよ。俺には、まともな知り合いがないってことに。例えば、エヴァ。アレは家主なんだが、事あるごとに俺が暴力を振るわれる。

超、アレは友達なんて素晴らしいものじゃあない。アイツの眼はこの頃俺をモルモットを見る目と同じ視線を向けてきやがる。いつか必ず俺を変なクスリとか打つに決まっている。

茶々丸、俺の唯一の心のオアシス的存在。  
ハカセ……アレはただの知り合い。

刹那、まあ知り合い以上友達未満。  
マナマナ、いつか殺すべき存在。  
教師&生徒、ただの知り合い。

とまあ、こんな感じなのだが、お分かりいただけるだろうか？

……先生、友達が……欲しいです……ッ!

冗談はもう終わりにして、さっさと教室戻ってバカたちが仕掛けたイタズラ解除してこよ。

俺が教師を始めてもうすぐ一ヶ月。かなり大変な一ヶ月だったな。

例えば、毎日イタズラを仕掛けられかねないので窓から教室に入ったり、前日に開けておいた抜け道とか使って入ったりとか……。他にも、ウチのバカクラスの成績を少しでもいいので上げてくれとの新田先生からのお言葉を受けて社会だけでもと宿題を出してみると、クラスの半分が出さないとということとか。マナマナとの殺伐した毎朝。

ホント……疲れたな。

やれやれイカンな。精神的に少しおかしくなってきた感じだ。今度休暇でも……無理か。家にいたら何が起こるかわからん。っていうか、とること事態が無理だろ。

高畑先生はすごい……アレ？九月に入ってからあの何回出張行ってるんだ？

……半分は出張でいないな。

もついいや、ツッコんだら負けなんだ。学園長に給料上げるよう頼んでみるのもいいと思う俺は悪くない。

あ~~~~~そういえばもう直ぐ体育祭だって聞いたな。かったり~~~~。

そんな感じでブラブラと職員室に戻るために屋上を後にし、校舎内を歩いて2-Aの教室に歩いていると

バツシャーーン！！

ほとんど人気の無い校舎内で大きな音がした。具体的に言うと、ウチのクラスのほうからウチのクラスの春日と

鳴滝姉妹が仕掛けた今日のイタズラ、ドアを開けてから閉めること  
によってストッパーが外れ、もう一度ドアを開けると上のほうにあ  
る水の入ったバケツが落ちてくるイタズラが発動した音がした。

んで、普通に歩いていくと案の定

「……大丈夫……じゃなさそうだな？長谷川」

「………だ、大丈夫です。ありがとうございます」

「いや、どう見てもそのずぶ濡れの格好は大丈夫じゃないと思うぞ」

「……いえいえ、大丈夫ですのでお構いなく、私はこれで……」

そう言って、立ち去ろうとする長谷川だったが、そのまま放置し  
ておいて風邪になったりしたら俺の責任問題に発展しそうだったり  
するので、俺は捕まえておきたいのだが……。

待てよ？アレ？これなら、結構今夜の平和は確保されたモンじゃ  
ね？

「待て！長谷川！」

「………なんですか？」

明らかな不機嫌なご様子。

だがすまない。今の君を利用して、俺は今夜の少しだけの平穩を  
得させてもらおう！！

「ウチに来い。そんな状態だと風邪ひくぞ？」

「……は？」

視点 千雨

意味が分からない。

私、長谷川千雨は学校に忘れたノートを取りに来たのだが、忘れ物をとって帰ろうとしたとき、私の体は突然冷たい何か体に打ち付けられる感触を感じた。

それが水だつて分かるのは、直ぐだった。そしてこれがクラスの連中が仕掛けたイタズラだってことも直ぐ分かった。

「……大丈夫……じゃ、なさそうだな？長谷川」

当たり前だが！！ずぶ濡れになったんだぞ！！このクソ教師！  
！何で片してないんだよ！！？？

「………だ、大丈夫です。ありがとうございます」

「いや、どう見てもそのずぶ濡れの格好は大丈夫じゃないと思うぞ」

分かってんなら、何とかしろや！！

「……いえいえ、大丈夫ですのでお構いなく、私はこれで……」

なんて言えるわけもなく。私は一人で歩き出す。

あゝ、こりゃ、下手すりゃ明日は風邪かもな。ま、サボれる絶好の口実だから………待てよ！？このまま帰ったら、あのバカ騒ぎ好きの連中のことだ！絶対にどこかで嗅ぎつける！不味い、私の平穩は



…何処に行ったら手に入るんだ!?

「待て!長谷川!」

「……なんですか?」

クツ、こいつがもつとちゃんと仕事してれば、いや、教師に起こるなんて真似は良くねえ。

分かってる。これは私のミスだってこと。私があのだアに入ったのが、悪いんだ…。

だから落ち着け、落ち着くんだ千雨。

「ウチに来い。そんな状態だと風邪ひくぞ?」

「……は?」

視点 茶々丸

今夜の夕食はマスターのご命令でスパゲッティのミートソースとなりましたが、タバスコはちゃんと食器棚の中に隠しておきましたよ。

何故かと申しますと、以前マスターがこれをお食べになる際にアヌビスさんがマスターのお料理にタバスコのビン半分の量を投入された経緯があるからです。

あの時は大変でした。

食べた瞬間にマスターの顔がゆでだこ状態になりました。

無論、マスターは次の瞬間には、テーブルの上にあったタバスコ

を笑っているアヌビスさんの鼻に入れました。

そのあとの抗争については割愛させていただきます。主にお二人の尊厳的な意味で。

「たっただいま〜〜」

「あ、お帰りなさ……長谷川さん？」

「あ、どうも……お邪魔します」

「茶々丸。長谷川は今日の春日のイタズラにちょっと引っかかってしまい、現在ずぶ濡れ状態だ。後は、言わなくても分かるな？」

「大体は理解しました。では、長谷川さん。こちらに……シャワーをお貸しします」

「……どうも」

なにやら、お二人ともそれぞれの思惑のようなものがある雰囲気でしたが、とりあえずシャワー室にご案内しましょう。

視点 アヌビス

計画通り！！

そう！全ては計画通りに進んでいる！

長谷川がこの家にいることによって、エヴァは魔法について隠さなければならぬ。つまりは、エヴァが俺に魔法薬の入ったフラス



そう言って、地下室に行くエヴァ。

フッフ、計画通りと思っていたが、これは計画を変更せねばなるまい！

だが、これは好機なり！今日こそ、あのエターナルロリータを串刺しにしてくれる！！

視点 千雨

アヌビス先生に言われるがままにホイホイついて来ちまったが、あの噂本当だったとは…。

『アヌビス先生はウチのクラスのエヴァンジェリンの家の居候』  
本当だったんだな…。

となると、アレか？あの噂も本当なのか？

『アヌビス先生はエヴァンジェリンの奴隷』

…いやいや、ありえんだろ。さすがに無いだろ…。

「……あの、長谷川さん」

「ん？なんですか？」

「…いえ、着替えはここに置いておきますので、シャワーが終わったらこれに着替えてください」

「あ、スイマセン。わざわざ、そこまで…」

ガラス越しだから彼女の姿はよく見えない。

「ただ、まあ、なんだ。ガラス越しでもよく分かるあの耳飾りはずっと疑問に思っていたのだが……ロボ的な……奴だよな？」

「では、私は失礼します」

「あ、はい……」

そうやって彼女は出て行く。

私も、一応ずぶ濡れになっていた体は温まってきたからそろそろ上がるのかなと思う。

風呂場から上がった。

上がったのだが、家には誰もいなかった。

「……は？」

誰もいない。絡繰も、マクダウエルも、そしてアヌビスもいなかった。

「いやいや、何処のホラーだよ」

そうやって自分にツッコミを入れるもむなしく。私はとりあえずソファに腰掛けてみた。

ふと一つの扉が開いていることに気づいた。

誰もいない家の中でヒマだったからか、私はフラフラとその扉に入ってしまった。

「……マクダウエルの趣味か？」

人形。

色んな人形が置かれてある。正直な感想、不気味すぎる。

「……イカン、こんなん見てると…ん？」

奥に扉が見える。また人形だろうと思ったが、特に他にやることも無いので扉を開けてみると…。

「何だこれ？」

部屋はこじんまりとしているが、十人位入ってもまだ余裕がありそうな広さだ。

そして、部屋の真ん中には水晶球があり、その中に本物と見間違っくらい精巧に作られたミニチュアの建物があつて、その近くにちっちゃいマクダウエルとアヌビス先生の姿が…。

カチツ

「……ん？」

何かのスイッチが入ったような音が聞こえた。

「……え？」

一瞬、そう一瞬の内に私の視界は全てが変わった。

薄暗かった地下の一室は解放された見たこともない風景に変わり、風が私の髪の毛を撫でる。

後ろを見てみると、扉は元々なかったかのように広い空間が広が

っていた。

ここは一体何処だ？

私の頭は妙に冷静だった。ここが何処だかも分からないというのに、私の頭は冷静でいた。

だが次の瞬間、私のすぐ近くの空間を突き破るかのように何か飛んできた。

「……………ウソ…だろ？」

自分のすぐ左を見てみた。そこには何もなかった。なかったはずなのに、今はあった。赤い斑点がいくつか付いた黒鍵が…。

ドーン！！

大きな音がした。何か爆発するような大きな音が。

さっきまで私が向いて方向をしてみる。そこにはこの変な空間に来る前に見たあの本物そっくりの建物をそのまま大きくした建物があった。

もう一度見ている今もある。だけど

「死ねえい！！エターナルロリータ！！」

「死ぬのは貴様だ！！駄目クローン！！」

何だろう？人が空に浮いている気がする…。

もう一人は、オリンピックとかで棒高跳びで世界記録だすくらいの高さを跳んでやが……しかも、今の声って、アヌビス先生だよな？となると、あの浮いているのって、まさか……マクダウエル？

……何か二人共…変な気弾みたいな奴とか、ここに刺さってる黒鍵みたいな投げてるよな…？

「無理だつて！！闇の吹雪とか勝てるわけないじゃん！！」

「戦略的撤退でもするつもりか！？」

「バカめ！！これは戦略的撤退ではない！！転進と言うのだ！！」

「いやいや、同じだろ…。」

…  
そう言いながら、アヌビス先生は私の所に向かって走ってきて…  
…マジ？

「こつちくんな！」

「アレ？長谷川？何でここに？」

「んなことより、後ろ、後ろ！」

「志村がいるのか！？」

「いねえよ！」

ああ、ツツコミなんかしてるから何か気弾っぽいのがもつすぐ直撃……しなかった。

確かに助かった。助かったんだけど

「落ちるーーーーー！！」







「詳しく説明してくれ!!」

「簡単だ!!俺と長谷川のコンビネーションプレイで、エターナル  
ロリータをぶっ倒す!!」

「乗ったあ!!私あアンタに賭けるう!!」

「ならば行くぞ!!アイ、キャン、フライ!!」

「もうそのネタはいい!!」

ネタじゃないんだけど…。

長谷川を抱えてこの間覚えた虚空瞬動を何回かやってさっきと同じ  
広場に立つ。

そして、長谷川を立たせて、右手に銃剣ハイコネットを出し、憎いあのエター  
ナルロリータが来るのを待つ。

そして

「……ほう?盾…というわけか?」

「フハハ、その通りよ!これが俺様の逃走経路だ!!貴様はこのア  
ヌビスとの知恵比べに負けたのだ!!  
理解したのならば、今すぐ膝まずいて、俺に対して敗北を認めるの  
だ!!」

「……………」

「（何か悪人の演技、似合ってるな…）」

さあ、どうする？長谷川は一般人だ。

それに、お前は女子供に手は出さないということは有名な話だ。  
これこそ、勝利への道筋なり！

「……………」

「どうした？黙ってばかりではなく、さっさと膝まずいたらどうな  
んだ？ええ？」

「（アレ？何か…様子が変だな？）」

「どうした！？返事ぐらいしたらどうなんだ？こっちは盾が「そ  
れがどうした？」何ッ!？」

「……………え？」

……………あつれ……………？嫌な予感がプンプンしてくるんだけど…。  
っていうか、何かエヴァさんの周りに魔法の矢が普通に浮かんで  
見えるような気が…。

「それがどうしたのだと聞いているのだ？」

「チツ、これが見えないのか！？テメエはクラスメイトを犠牲にし  
てもいいというのか!？」

「ああ、別に構わん。一回で全て吹き飛ばせばいい」

「……………え？」

今、不吉な単語が聞こえた気がしたんだけど…。  
おっかしいな~~~~。

「安心しろ。痛いのは初めだけだ。すぐに気持ちよくなる」

「……………眩しいくらい笑顔だな~~~~」

「現実逃避してんじゃねえよ！！何とかしろよ、担任！！」

これは現実逃避じゃないよ。これはただの素直な感想だよ…。

「それを現実逃避と言うんだ~~~~！！」

「さあ、楽園に行こうか…」

「行き先はあの世だー！！！！」

「死ね！！魔法の矢、氷の10矢！！」

「死 N D A」

きっと今の俺達の顔はいい笑顔なんだろうな…。

ああ、時が見え」

「ぎゃああああああああああああああああ！！！！！！」

**第十三話【友達が出来ました】（前書き）**

今回の最後は出来心です。

あまり、ツッコまないのでください…。

### 第十三話【友達が出来ました】

視点 千雨

昨日のあれは夢なんだ。そうに決まっている。

アヌビス先生の手に武器が突然現れたり、このクラスにいるマクダウエルがどっかのアニメに出てきそうなビームを撃つたりするわけがない。

他にも、水面に立ったり、空中六段ジャンプとかこのリアルにあるわけがない。

だから、夢なんだ。今、教卓の近くにある段ボールから土管から出てくるマ○オみたいな感じにアヌビス先生が出てくるのも夢なんだ。

「先生、どっから出てきてるんですか!？」

「見ての通り、段ボールからだ」

「大きさ的におかしすぎでしょー!」

「てか、さっきまでそんなところに段ボールなんてなかったし!」

「……連絡事項なーし、さっさと帰れー」

「スルーしやがった!」

「秘密の呪文『マンマミーヤ』」

「えっ！？ちょ…えっ！？」

そう夢なんだ。これは現実じゃなくて夢なんだ。

だからこそ、あんな風に大きさにありえないことが普通に起こるんだ。

そうじゃなきゃ、アヌビス先生が段ボールに吸い込まれるように消えるなんてありえない。

うん。帰ろう。

皆も少しずつ帰り始めてるし、何か横からマクダウエルの視線を感じるけど私は無視する。

教室を出てから私はさっさといつも通り女子寮に帰った。

結局、昨日のアレは夢だったのだろう。

昨日、私は目を覚ますと寮の自分の部屋で制服の姿のままベッドで寝ていた。始めは少し…いや、かなり混乱した。

まず第一に時間だ。私の制服は確かにウチのクラスのバカたちのイタズラのせいですぶ濡れになった。そして、親切心かどうかは分からないが、アヌビス先生が私を風邪をひくからと言って家に連れていった。うん、ここまででは確かに覚えている。

問題はそこからだ。

私はアヌビス先生が住んでいる家に行った。前にマクダウエルの家に住んでいるって聞いたから少し安心感もあった。絡繰に案内されてシャワーを浴びていた。うん、そうだ。

それで、そこからだ。変なのは…。

とりあえず、シャワー浴びるのに大体二十分くらいだったか？ま



あそんなところだったな。それで出た後に何でか知らないけど誰もいなかったんだよな。そんなでもって、誰もいないし暇だったからちよっと探すがてら家の中歩いていたら、人形がたっぷりあった地下室通って、あの部屋に入ったんだよな。

その部屋にあったガラス球を見てたらいつの間にか

「なるほど、たまたま入ってきたわけか…」

「そうそう。誰が好き好んで………え」？

アレ？私、誰と話してんだ？

「何呆けているんだ？」

……落ち着け。落ち着くんだ私。

私に話しかけているの誰？それは、マクダウエル。

何故私に話しかける？昨日ことぐらいしか理由が思いつかん。

この後私はどうなる？BAD END？

……嫌だあああああああああ！！！！

「何悶えてるんだ？お前」

「うるせえ。私の気持ちを理解できねえ奴は黙ってる」

「何だそれは？意味が分からん」

分からないなら黙ってるよ。私の頭は色々大変なんだから。

「まあ、お前のご事などどうでもいい。こっちの用を話すぞ」

「…………勝手にしてくれ。私は「ウチに來い」…………」

ここで私の頭の中でいくつかの選択肢が浮かんだので、それを紹介するでしょう。

- 1、ついていく
- 2、だが、断る！
- 3、お前を殺して、私も死ぬ！

とりあえず、1のついていくの場合だと…………殺人事件？いや、アヌビス先生が来て何とかして…………くれないかもしれないけど、生き残る可能性はあるな…………。

次に2、どう考えても死亡フラグです。本当にありがとうございます。ました。

3、結局死ぬな。

アレ？2と3が浮かんだ理由が分からん。

「何考えている？さっさとついてこい」

ああ、この幼女様の頭の中には私の意見なんて物存在しないんだな…………。

「何か思ったか？」

「思った！？言ったじゃなくて、思ったの方できたか！？」

「どつでもいい。ホラ、早く行くぞ」

「私の意見は無視かよ！？」

「貴様の意見など、最初から聞くつもりは無い」

「理不尽だー！ー！ー！」

視点 アヌビス

今俺の目の前には一ヶ月ほど前の俺がいる。

ただし、それは俺と同じオーラを纏っている人間のことであって、断じてクローンの俺が大量生産されているわけではない。ちよつと見てみたい気もしなくはないが。

「……………死にてー」

だがいかんせん、千雨っちはかなり衰弱しているようだ。

「……………茶々丸、どうしてこうなった？」

「マスターがアヌビスさんがお帰りになるのを待つ間に、暇だからと千雨さんのホームページを見まして……………その後……」

「うん、あのオーラで大体分かった」

大方、エヴァに弄られたんだろ？俺もやられたからよく分かる。

だがしかし、やはり女の子だから加減しているんだろう。少しばかり羨ましいものである。俺のときも手加減してくれないかなー？

「無理だな」

「さいですかー」

無理とのことですよ。

だけどもあ、俺が長谷川にできることといえば、慰めることしかできないけど、一応やってみるか…。

今なお負のオーラを発し続けて落ち込んでいる長谷川の肩に手を置いて俺は笑顔で言った。

「ガンバ」

その後殴られたよ。何故に？

~~~~~十分後~~~~~

場所は移ってエヴァの別荘。

そこは、普段魔法が使えない我が家の幼女吸血鬼様が魔法を使える数少ない場所である。

で、何でこんな前ふり置いたかと言つと

「誰か助けて」

今俺は手足をロープで縛られて逆さまに吊るされている状態だ。

あの時の釜茹でを思い出すね。アレはマジで死ぬかと思った。

でも今回は違う。だけでももちろん手加減はない。視線を上によれば、そこには青い海が広がっている。ウム、綺麗だ。

え？どうしてそうなったかって？答えは決まってるじゃないか。

「助けて下さい。千雨っ……………長谷川様」

「めんどい」

一蹴だよ。

後チャチャゼロ、ナイフでロープをノコギリてま切るみたいにギコギコしないでくれ。

そんなことすると、ロープ切れちゃ

「オ、切レタ」

「あああああああああああああ……!!……!!」

前にもあったな、こんな風に落ちるの……。

でも今回は、自分からじゃなくて、落とされる形だけどね……。

あ、海面までもう少し。

今の俺は手足を縛られた状態。さて、どうやって帰ろっかな？

視点 千雨

「おー、見事に落ちていったな」

高所恐怖症の人間が見たら明らかに失神するくらいの高さから私はアヌビスが落ちていくのを見ていた。何？何故先生を付けないかって？めんどいからだよ。

「オメエモ、中々ワルダナ」

んで、アヌビスの文字通り命綱を切ったこの動く上に喋るナイフを持った人形はさっきのアヌビスのロープ切られた瞬間のあの顔がおかしかったのか、ケタケタと笑っている。

そんなに面白かったか？さっきのアヌビスの落ちるときのあの顔……ヤベ、私も笑いたくなってきた。

私が腹を抱えていると、近くにいるマクダウエルが私をじっと見ていることに気づいた。

「…あんだよ？」

「いや、そっちが素なのか？」

「ああ、そうだよ。何か文句あつか？」

「別にないさ。」

ところで、私の別荘はどうだ？」

聞いておきながら勝手に一人で歩き出したマクダウエルに追いつき質問に答える。

「………悪くないんじゃない？魔法つてのが何なのか私はまだよくわかんねえけど……コイツも含めて全部魔法なんだろう？」

私が後ろからついてくる動き人形を見て、マクダウエルは「そうだ」と一言で返してきた。

ついでさっきだ。

ついでさっきまで私がいたのは確かに私が今まで知っている世界だ

つたはずなのに、ほんの少し足を別の方向に向けただけで、私は今私がかく知らない新しい世界にいる。

最初にマクダウエルから魔法について聞かされたときは、コイツ大丈夫かと本気で思ったが、今では私のほうがそれが正しい現実だと受け入れている。だって、目の前でアヌビスが氷付けにされたんだから。信じざるを得ないだろ。

「さて、色々教えてやろうか？質問してくるがいい」

先ほどまでいた広場から私たちは日陰のある建物まで歩いていき、そこでマクダウエルは腰を下ろした。

「どうした？お前のことだ。聞きたいことは多いんじゃないのか？」

「……………多すぎるんだよ」

聞きたいこと？そんなもの多すぎて、どれから聞くべきなのか頭が痛い。

「考えているのか？だったら大いに考えるがいい。ここは一日が外の一時間なのだから」

「……………じゃあ、この学園って何なんだよ？」

「……………なるほど、そういう質問で来るか……………」

私の疑問。それはずっと昔からあった。

それはこの学園に入ったときから思ったこと、だけど皆気にしないことばかりだ。

例えば、世界樹。

日本で一番大きい木は屋久島の千年杉。そのはずなのに、世界樹の大きさはその何倍もある。千年杉を実物で見たことは無いけど、それでもどう考えても世界樹のほうが大きいと思う。

だけど、誰もそれについて気づかない。いや、まるでそれが当たり前のようになっている。

…まるで……まるで、誰かが意図的にそうしているように…。

だからこそ、私は今までクラスメイトの中に友達らしい存在がない。

当たり前だ。私の疑問を疑問とも思わない。そんな奴らと友達になれたって面白くないだろう。だから、ずっと一人でいた。だからこそ、ネットアイドルなんて……それはあまり関係ないな。

「…で？答えてくれるんだろ？」

「ああ、答えてやるとも。

この学園は……そうだな…魔法使い達の一つの拠点というべきか？」

「……………拠点？」

「ああ、そうだ。この世界にいる魔法使いの数は七千八百万人「ハア！？マジかよ！？」大マジだ」

七千八百万人！？そんなにいんのかよ！？

「話を続けるぞ？魔法というのは一般人には秘匿するというのがある種のルールだな。

ずっと疑問に思っていただろう。



『何故気づかない？』とな

正解だ。少し考えれば気づくものを全く気づかない。これはどう考えても

そう考えながら話を聞いていると、私は認識障害魔法というのがあることを知った。

これは、私の考え通り、普通なら誰でも気づくという認識を障害する魔法。

その魔法を知っただけで、私の疑問の大半が消えた。

「……………ハア……………」

「どうした？ずっと知りたかった疑問の答えにようやく辿り着いたのだぞ？もつと喜んだらどうだ？」

「……………いや、喜ぶ以前に、ため息しか出ねえよ……………」

「そうだな。それが正しい。

長谷川千雨、お前は今まで正しい選択をしてきた。自分を現実という世界に常に置き続けた。

だが、それが遂に今、限界になってしまったということだ。私に教わらずとも、お前ならいつの間にか知ってしまうだろう」

……………確かに、マクダウエルに聞かずとも私はいつか魔法という存在を知ってしまうかもしれない。

それが自分の思惑であれ、他人の思惑であれ、いつか気づいてしまいかもしれない。

だったら

「開き直るしかない…か」

「……そうだな…今のお前にとってそれが一番最善の選択だな」

「……………そうかねー」

「そつだろつさ」

最善の選択。

それが何なのか私は知る由なんて無いさ。だけど、だけどこれで良かったのかもしれない。

少なくとも、私は今は気分が良い。今まで胸の所で引つかかっていた物が全部消えたからだ。

そういう意味じゃ、アヌビスにも感謝の気持ちを「俺は帰ってきたああああああああああ！！！！！！」……………え？

「ほう、帰ってきたか…」

え！？今の声って、アヌビスの声だよな！？

「フハハハハハハハハハハ！あの程度の拘束で俺を縛れると思ったか！！！？？生憎だが、俺は先ほど以上の縛りプレイにも耐えたことがあるのだ！！！！！！」

いや、縛りプレイではないんだが…。つか、アレ以上ってなんだ？私結構きつくしたんだけど…アレ縄抜けてきたの？



~~~~以上、ダイジエスト終了~~~~

ご愁傷様だな。

そう思う私はいつの間にか救急箱両手に抱えた絡繰が入れてくれた紅茶を飲んでいるんだが、それより人形……チャチャゼロだっけ？お前人形の癖に何酒飲んでんだよ？

「ヤレヤレダゼ」

それ私が今言いたい言葉なんだけど……。

### 第十三話【友達が出来ました】（後書き）

早いところ原作開始まで持っていきたいけど、次回からオリジナルストーリーの体育祭編始まりまーす。

遂に始まるアヌビスの陰謀！

……ごめんなさい、調子に乗っちゃいました…。

第十四話【(バカな)陰謀渦巻く体育祭】(前書き)

今回、書いてて千雨っちが前回とかに比べるとかなり性格が変わってます。

理由の九割はアヌビス、一割はエヴァのせいと考えてください

## 第十四話【(バカな)陰謀渦巻く体育祭】

視点 アヌビス

「クローンか……これ、記事にしちゃ駄目だよね」

「お前に良心が残っているのならそうしてくれ。バレたら、多分俺色々と問題起きるから」

「だよね〜」

10月、お酒の歌と同じく世間では運動会が多くやる中、この麻帆良女子中等部でもそろそろ運動会がやってくる時期となりました。とは言ってもご存知の通り、ウチの2-Aはアホな分体力馬鹿が多いので優勝は確実ではないかと言われております。

そんな10月の初め、俺はいつもの通りバカどもが仕掛けたイタズラを回収していると、我がクラスのパパラツチ娘こと、朝倉が俺に取材に協力してくれと言ってきたのであります。

初めは、何故オタクと呼ばれる新人類が誕生したのかについての調査と思っただが、どうやら違うらしく、俺について知りたいことがあつたらしい。

無論、俺が思いついたのは毎朝行われるマナマナとのデッドオアアライブな戦いを見られたのかと一瞬思っただが、どうやら違うらしく、俺がクローンであることがバレたらしい。

直ぐに抹殺してやるうかと思っただが、そこはやはり報道部の人間、引き際はしっかりしてやがり、誰にも教えてないと言ってき

た。

そこまで来て俺も朝倉が何が言いたいのか理解できた。

簡単な話、バラされたくなければ取材に応じろってことだ。てかこれ、下手なこと言ったら確実に首飛ぶんじゃない？

まあ、一応取材には応じたわけよ。

もっとも、俺って自分でも自分の事よく分からん部分が結構あるよな。腕にある刺青とか、それからどうして剣が出てきたりするのとか、俺のオリジナルの事とか、偶に思い出す変な風景とか。

んで、冒頭に戻るってこと。

「……つかさ、何で俺のことクローンだって分かったんだ？」

「え？ああ、ウチの学園てさ、結構不思議が多いじゃん」

「説明になってないぞ。ちゃんと分かるように説明しろ」

「ハイハイ、で、その不思議とかがってよく七不思議とか呼ばれてるじゃん。」

そんな感じでウチの学園の不思議なこととか集めてるサイトあってさ……これこれ」

「ん~~~~~?」

朝倉が鞆から取り出したノートパソコンがあるサイトを開いてそれを見せたので見てみたのだが……なんだこりゃ？

「…………『麻帆良学園九十九不思議』…………普通は七不思議だろ？」



「いや、ウチの学園って規模おつきいじゃん。だからだと思っけど……」

違っと思っ。

とはいえ、気になるものであるので朝倉が操作してしているのを見てみると、とあるページに着いたが……何々？

「……『図書館島で発見された謎のミイラ、そしてクローン化』……俺だな」

「でしょ？先生が赴任した日に先生の名前が引っ掛かってさ、つい昨日このサイト思い出したっけ」

「なるほどね〜」

九十九不思議ということは他にもまだまだあると思っのだが、俺パソコンにまだ慣れてないから見たい物も見れないかもしれん。となると、こんなときにやるべきことは一つだな。

視点 千雨

「というわけで、手伝って？」

「帰れ」

時間は七時、一応宿題などを済ませた私はこれから毎日恒例のインターネットをしようとした矢先、疫病神がやってきた。

「というか、何でいつも窓から入ってくる。私、鍵閉めたはずなんだけど…。」

「いいじゃん。ちょっと位手伝ってくれよ〜千雨っち〜」

「千雨っち言うな！！後、腰に手を巻きつけるな！！気色悪い！！」

「いい〜じゃああああああああああ！！！！！！」

「バチバチバチ！と私の手にあるスタンガンが腰に巻きつく害人に電撃を与え、バカは床に伏した。」

私は倒れて動かなくなつたバカの背中に乱暴に座ると、「おもっ」という声が聞こえたので、とどめを指そうと「軽いです！！千雨様バンザイ！！」思ったが、やっぱ止めることにした。

ちなみに、私が今持っているこのスタンガン、何度も喰らっているアヌビスなら分かるかもしれないが、エヴァンジェリンが持っていた奴を私に譲ってもらつた奴だ。

「……え？なら、エヴァンジェリンは今何持つてるかって？何か、熊も一撃で殺せる新型を手に入れたって言ってたぞ。」

「………そうだな。逆らわないほうが、命を守りたければいいだろう。何？逆らわなくても理由もなく寝ているところを襲ってくるだど？頑張れ」

「……五分後……」

「……『麻帆良に十年以上も住んでいる中学生がいる』……エヴァンジェリンの事だな」

「うつわ〜〜予想はしてたけど、結構あるな」

「てか、これ九十九個以上あるぞ？」

「七不思議過ぎて、九十九不思議ができたって言うのに、さらにその上に行くのかよ」

メチャクチャだな。これ絶対に管理人とか整理して無いだろ。

せめて、年代毎に仕分けしてくれば探したりするの楽なものにな

…つと、何々？

「『忍者らしき女を目撃！麻帆良の新たなるヒーローか！？』…」

…ウチのクラスの長瀬だな」

「ああ、どう考えても、あの糸目しかないな」

他にも色々あるな……ん？

「『麻帆良最高の頭脳、超鈴音は地球人ではなく異星人である』…」

…うわぁ、ありえそうで怖い」

「他にもあるな『学園長は実は人間ではない別の生き物である』…  
まんまじゃねえか」

ああ、あの頭はどう考えてもおかしい。人間とは思えねえよ。  
ていうか

「何くつろいでんだよ？人の部屋で」

「え？」

コイツ、勝手にせんべい食べてるし、お茶まで飲んでやがる。

「千雨っちもお茶飲む？」

「千雨っち言うな。飲むからさっさと出せ」

まあ、この殊勝な態度に免じて許してやるとしよう。

「つつか、用は終わったんだろ？だったら、早く帰れよ」

「夜、静まり返った女子寮に潜入し、俺に好意を持つ女子生徒と二人つきり、コイツはエロの匂いがぶんぶあああああああああああああああああ！！！！！！！」

「最後の言葉はそれいいんだな？」

「ちょ！首は！！首んところに押し当て…のおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお！！！！！！」

……ヤバ、これクセになりそ。

~~~~~また五分後~~~~~

「で？何でまだ生きてるのかすごく疑問なんだけども……」

「実を言うと、俺もそれについては疑問なんだ」

何故か生きてるこのバカの話曰く、どうやら自分がクローンだっ  
てことがバレたらしい。

だが、それについては朝倉は記事にはしないという約束で取材に  
応じたらしい。その一軒でさっきのサイトを知ったらしい。つうか、  
あのサイト私も興味まだあるし。

「つか、そろそろ本題入れ。今日は何の用だよ？この間みたいにな、  
また 鉄の頭数合わせか？だったら断るぞ？」

アレは酷かった。

突然、茶々丸に呼ぶ出されたかと思つてエヴァンジェリンの家に  
行けば、まさかの九十九年設定で 鉄やることになつたからな。

しかし、一番酷かつたのはアヌビスだよな。だつて、ボ ビーが  
いつも自分の時にキングになつたからな。あまりの悲惨さに茶々丸  
がワザとボ ビー連れて行つたのはいい奴だと思つたよ。

その後、ちょうど九十年目に偶然エヴァンジェリンにキングが来  
て物件全部吹っ飛んだのはもつと酷かつたな。その後、アヌビスに  
八つ当たりしてたけど…。

ん？私？私は普通に一位だつたぞ。ちなみに、二位は茶々丸で三  
位がエヴァンジェリン、ビリーは言うまでもない。つか、プレイ中チ  
ヤチャゼロがずっと頭の上のいたから首凝つたなあの際は。

「いや、それはない。もう一度やりたいが、明日は平日だ。九十九  
年バトル二回戦は今度にしよう」とエヴァと決めている」

……やるのかよ。しかも、それって私も普通に頭数に入ってるっ  
て事だよな？

「今日、千雨うちに相談があつたのはこれについてだ」

「ん？何だこれ？レート表？」

「うん。朝倉に貰つた、一週間後の体育祭の優勝クラスを賭けるトカルチヨのレート表なんだけど…。ウチのクラス見てみな」

「え？えつと、2 - A、2 - A……ん？1・000004倍？何だこれ？これ、賭けになるのか？」

「一応成立はしているらしいんだけど…」

「してねーだろうがっ！！どう考えてもおかしいだろウチのクラスは！！」

「だろ？だから、何か今年おかしくてさ、去年が大変だったらしいんだけど…。どんな感じだった？」

「ん〜？去年？去年は確かウチのクラスが一クラスだけ五桁近くまで点数稼いで……圧勝すぎたな。」

「……その顔見るだけで大体予想ついた。」

「んで、こつからが大事な話なんだが……お耳を少し…」

「そう言つて私の耳元で喋りだしたのだが…。」

「……いや、さすがにそれは……いや、できなくは……まあ……  
……うん……フム」

「どっ？いい考えじゃね？」

なるほど。確かにそれならできなくはないな。

「そこで千雨うちには、ちょっとハッキングをしてもらいたい。分け前は、5：5でどう？」

「……………アヌビス先生、アンタ良い事考えるじゃねえか」

確かに、これならできるかもしれねえ。

となると残る問題は……………。

「鬼の新田あたりか……………他にも、高畑先生や学園長あたり……………」

「安心しろ。一般の先生達にも何人にか既に声をかけている。これならいけるぜ」

ヤベエ、私にもできる気がしてきた。

「千雨うち、俺達ならできるぜ!！」

「ああ、やってやるうじゃねえか!！」

……………翌日……………

「え……………いい加減種目を決めるとの新田先生からの御達しが来たので、高畑先生はいつも通り出張でいないけど、体育祭の種目決める……………」

翌日、帰りのHRでアヌビスは作戦通り、ウチのクラスのどの種目に出るかを決めている。

ここで大事なのは、如何にして私たちが推すクラスを有利に参加者を仕組むかということだと、思うかもしれないが、実際はそれほど大事じゃない。

本当に大事なのは、たった一つの種目。

「……え、最後に決めるこのXについてだが「先生！Xって何！？」今から説明するからちよつと黙ってる鳴滝姉」

やっぱり皆気になるか……。当然だな。

このお祭り騒ぎ好きのクラスがXなんて変なものが出て、気になるわけがない。

「Xについてだが、俺も詳しい内容は知らん。

ただ、クラスの代表五人の走者で競う障害物競争との噂だ」

「十分詳しいじゃん！」

いや、そうでもない。

障害物競争と一言と言っても、どんな『障害物』があるのかが問題なんだ。そして

「え、さらに、2-Aにはこの競技に参加禁止の指示が出ている生徒がいる」

「ちょ、何だそりゃ!?!」

「横暴だー!」



まあ、普通ならそう言うわな。  
だけど、こっちには切り札があるんだよな。

「何か去年、あまりにも点数を取りすぎたクラスがあったらしくて、他のクラスの生徒たちがやる気をなくして、麻帆良女子中等部史上最高のグダグダを記録した体育祭があったって今朝聞いたんだが、誰か知ってるか？」

一気に静まり返る教室。

まあ、去年のアレは本当に酷いグダりようだったな。上級生たちが完全にやる気をなくして、ウチのクラスだけバカ騒ぎしてたからな。

「んで？何か文句あるのか？」

「「「「「ありませーん」「「「「「」

「素直でよろしい。」

「んじゃあ、参加禁止の奴の名前呼んでくぞー。  
まず一番最初に神楽坂」

「え！？何で私が！？」

「理由は去年の百Mやらで圧倒的過ぎたからだそうだ。同じ理由で春日もな」

「え〜？マジで？」

「次、長瀬と古、理由は去年の何かが理由らしいが、よく知らん。」

何かあったのか？」

「アヌビス先生！それについては今度お教えいたしますので、続きをどうぞ！」

あゝ去年のアレか。確か長瀬と古が二人三脚で多少の妨害ありとか聞いて他の走者たちを気絶させたんだっけ、今にして思えば、よく訴えとか来なかったよな。

「最後、佐々木……以上」

「オオ、これでウチのクラスのバカレンジャーが全員参加禁止ってわけか」

「アレ！？私もバカレンジャー扱いなの！？」

春日、お前も十分バカだから大丈夫だ。

だが、これでウチのクラスの戦力は大幅にダウンしたな。これなら、本当にいけるかもしれねえ。

中編【（大人の下らない欲が）白熱する体育祭】に続く

## お詫び

お詫び。

読者の皆様にごこのたびお詫びすべきことがございました。

前回の第十四羽【(バカな)陰謀渦巻く体育祭】で最後の参加禁止のメンバーの名前で龍宮と表記されてましたが、本当は佐々木でした。

このとき龍宮とした場合、体育祭で使う予定のネタが使えなくなってしまうことになってしまうので、早いうちに気がついてよかったです。

読者の皆様にご大変ご迷惑をおかけした事を改めて深くお詫び申し上げます。

今後とも、この『彼は転生者ですか?いいえ、クローンです』をよろしく願います。

第十五話【大人の下らない欲が】白熱する体育祭【前書き】

ああ、千雨がちがどんどんエヴァ的なポジションになってきた。  
生きる。主人公。

## 第十五話【(大人の下らない欲が)白熱する体育祭】

視点 アヌビス

「諸君！我々は何だ！？」

「……この体育祭で一攫千金を狙う者です……」

「そうか、ならば諸君！我らの敵は誰だ！？」

「……定期テストの点が学年最下位の体力バカクラス、2 Aであります……茶々丸、ジューズくれ。自分で言っつて、虚しくなつた……」

「あ、はい」

「そうだ！我らの敵は2 - A！今日こそ、彼女らに敗北を与えるべく、我らは決起したのだ！！」

「うおおおおおおおお……これでもいいのか？」

完璧だ……最高の気分だ……。

「んで？もういいのか？」

「ウム、協力感謝するぞ。千雨っち」

「は~~~~、寝ているところを拉致されたかと思えば、急に別荘に連れてきて……お前に付き合っつ私の身にもなれよ？」

体育祭前日の深夜　いや、正確にはもう当日なのだが、俺は寝ている千雨っちを拉致った。それで、別荘に連れてきた。いや、正確には運んできた？まあ、どうでもいい。

とにかく、目を覚ました千雨っちには殴られたよ。え？それだけかって？

この頃……千雨っちが凶暴化してきたなって…本気で思ってきた。スタンガンで昇天しかけたよ…。

とりあえず、復活した俺は計画の最終調整やらを相談した後に、さっきのアレをやったのである。

まあ、少しやる気ってモンが薄れてきているんだけどね。

「はあ！？何だそりゃ！？」

「アレ？口に出してた？」

「出してた……って、ええ！？何で薄れてんの！？やる気！」

それは聞くも涙、話すも涙な「はよ、言え」…イエッサー。

アレは昨日の夜。

晩御飯を食べた後、居間のソファでテレビを見ていた時のことだ。

『オイ、ゴ、ゴ、ゴ』

『その名称…何とかしてくれない？』

『無理だな』

『さいですかー』

え？いつもゴミって呼ばれてるのかって？そうだよ。

え？どうしたの？千雨っち、そんな目で俺を見ないでよ。俺は大  
丈夫だから。慣れたから。

『で？どうしたの？』

『いや、この頃随分と何かを楽しげにしているなと思ってな…』

『……………』

『ん？どうした？』

『いや、別に…』

『フム……………なら、その額に浮かぶ汗は何だ？』

『いや……………十月に入ったのに、暑いなあ……………』

『今日は最高気温25もいってないぞ？』

『……………』

『……………』

『……………』

『……………吐け』

というわけで、バレちゃった。

いや、勿論抵抗はしたんだよ？ だけどさ、俺がいくら規格外なクローンでもさ、30分間も水の中に沈められたら、死ぬって…。

え？ それで何要求されたかった？

『ほう、2 Aを負けさせて大穴を狙うというわけか…』

『……はい』

『関わっている者は？』

『俺と千雨っち、他に数人の名も無き教師たち』

え？ 千雨っちの名前？ 勿論言ったよ。俺たち共犯者じゃ……アレ？ 何でスタンガン構えてるの？ いや、やめて！ アッ……！

~~~~五分後~~~~

はい、分かっております。千雨様。

はい、はい、千雨様のお名前を出したこの馬鹿でクズでゴミの私をいくらでも罵っても構いません。

……許してくれるんですか？ マジですか！？ え？ その代わりに、俺の貰い分の半分寄せ？

いいけど……渡せる分ほとんど無いよ。理由はこれから教えるから、そのスタンガンは置いておいて。



アレはねえ、千雨っちの名前出した後のことなんだけど…。

『バラしちゃおっかな〜〜?』

『止めて!!バラしたりしたら、確実に新田先生に伝わってトトカ  
ルチヨなくなっちゃう!』

そしたら、絶対生徒たちが暴動起こしちゃうから!!』

『……………どんだけ、規模が大きいんだよ?』

『朝倉曰く』噂だけど、一千万規模はある』……………らしい』

『つまり、お前の企みが成功すれば、その一千万規模の皆の夢をお前は砕くという事か?』

『……………エヴァ、俺が言うのもなんだけど、お前が夢とか一番似合わない言ばああああああああああ!!!!!!』

千雨っち、いくら何でもこれは酷いと思わない?三途の川見えたんだよ。しかも、船の中だったし、何か赤い髪の毛を着ていた女いたんだけど…。何か六文銭払えとか言われてさ。金ないって言ったら、何か帰ってこれたんだよ。

つか、エヴァも酷いよな?改造スタンガンを心臓に押し付けられたんだよ。酷いと思わない?

え?ノーコメント?さすが千雨っち、自分の保身第一か…。

じゃあ、続けるよ?

『なるほど、だいたい分かった。この件は、とりあえず内密にしてやる』

『ま、ま、ま、まっじつでですか！？』 依然、感電中

『ああ、ただし、貴様が受け取る分の八割を私を私に寄越せ。それなら、見逃してやる』

というわけなんだよ。

「じゃ、お前！！いくら貰えるんだよ！！??」

「千雨っち、俺と千雨っちは貰える額は同じだよ？八割って数字がどれくらいか…分かるでしょ？」

「……………アヌビス、私が今日の夕飯奢ってやる」

「……………ありがとう……………」

別荘から見える夕焼けに照らされながら、体育座りしている俺は千雨っちに肩に手を置かれ、下を俯くしかなかった。

ああ、それにしても金が欲しい。

……………アレ？俺の給料……………あ、そうだ。この学校って、給料銀行に振り込みされてるんだっただ。体育祭終わったら取りに行かないと。

視点 大河内アキラ

私、大河内アキラはこのクラスの中では、少し目立たない存在だ

と理解している。

「先生、どうしてそんなにやる気ないんですかー？」

「大人の事情だ。察せ、ガキども」

それは私が無口だという事もあるのだが、やっぱり私の周りがかくごく目立つというのもあるだろう。

体育祭。

私の親友の裕奈によると、今回の体育祭はかなり変なことが起きているらしい。

詳しくはよく分からないけど、何でもトトカルチョでウチのクラスの倍率がほぼ1に等しくなったらしい。

多分だけど、理由は予想できる。去年の体育祭だ。

あの時の事を思い出すと、少し恥ずかしい。

私もかなりはしゃいだと今でも思い出せる。私にとって、黒歴史だ。

「とりあえず、高畑先生は本部で仕事するらしい。だから、見回りは主に俺が来るぞー」

「はーい」

そう言ってアヌビス先生はだるそうな顔をして歩いていった。

「それじゃあ、一位狙って頑張るぞー！ー！！」

「「「おー！ー！」「」「……絶対とらせねえ……」」

うん。そうだね。私が頑張らなくても、何とかなるよね。  
よし、楽しくやろう。

何か二人くらい、ボソツと変な言葉を言った気がするけど気にしない方向で……。

そして、あつという間に午前部は終わった……だけど……。

「……………これは酷い」

長谷川……その通りだと思う。

この点数はあまりにも酷いと私も思う。

得点板の前に私はいる。午前の競技が一通り全て終わり、お昼ご飯も食べ終わったから少し散歩している時のことだ。

偶々得点板の近くを通った時、長谷川さんとアヌビス先生が得点板の前で一緒に何か話しているのが見えた。

この二人はよく一緒にいる。初めは、この組み合わせは少し意外だと思った。長谷川はクラスでも私より目立たない。失礼だと思うけど、正直そんな長谷川とアヌビス先生の接点が思い浮かばなかった。

大体、二、三週間くらい前だ。ある日、私は偶然二人が一緒にいるところを見かけた。その時は何か買い物をしていたのだろうか、アヌビス先生は両手に紙袋を持っていた。だけど、何故かアヌビス先生は泣いていた。その理由がいまいちよく分からなかった。長谷川も長谷川で慰めていた感じだったし。

まあ、それから少しずつマクダウエルや絡繰とも話すようになってから、良いことではあるのかな？

「午前だけで四桁の半分行くか…バケモンだな…」

いや、さすがにその言い方は酷いんじゃないかな？

でも、それ以前に何で長谷川の隣でアヌビス先生が落ち込んでるんだろう？

「もう、これ諦めるしかないんじゃない？」

「そんな事言わないでよ…何とかしてよ！千雨っち！」

「千雨っち言うな！！もう……諦めるしかねえよ…」

「そんな！俺のなけなしの全財産つき込んだのに！！」

「どんだけだよ！！五万が全財産って、うおい！！」

な、何の話だろう？ていうか、ウチのクラスが勝っているのに何でアヌビス先生が落ち込んでるんだろう？

そういえば、朝倉から今回のトトカルチョの倍率はかなりおかしくなってる、って聞いたけど、ひよっとして何処かに賭けたのかな？

「腰に引っ付くな！誰かに見られ……あ」

偶然、目が合ってしまった。

……逃げよう。

「大河内、ちょっと待て。話がある」

え！？ちょ、早っ！？十メートルはあつたよ！？  
て、アレ？な、何か体が動かないんだけど…。

「は、長谷川……肩から手を離してくれる？い、痛いんだけど…」

「そうか、だけど私の心はもっと傷つきそうなんだが…」

「あ、あはは、わ、私は、な、何も見ていないよ？」

正直な話、メチャクチャ怖い。

私は今、さっきの反対方向に歩き出そうとしたのだが、長谷川に左肩を片手で掴まれているんだけど、体が微動だに出来ない。

そんな何処から出てくるか分からない力よりも、私は後ろから感じる長谷川のプレッシャーのほうがもっと怖い。

「千雨っち、大河内が困っているぞ。止めてやれ」

「……ちっ」

…舌打ちされたよ。でもアヌビス先生、もう少し早く助けて欲しかった。ていうか、元の元凶は先生だよな？

長谷川は渋々と私の左肩を掴んでいた手を引いてくれた。  
か、かなり……しんどかった。

アヌビス先生に向き合って一応礼を言おうとしたら、急に両肩を掴まれた。

「大河内」

「え？あ、はい」

目の前には何故か普段授業では一切見せたことない真剣な表情をしたアヌビス先生の顔が直ぐ近くにあった。

「……あ、あの、アヌビス先生？」

「大河内」

「は、は、はい！」

真剣な表情。目は真つ直ぐに私を見つめている。  
その表情のまま

「お前に頼み……がぶおぱあ！！??？」

「おおつと、千雨選手の左ストレートが決まったー」 棒読み

思いつきり殴り飛ばされた。

「ち、千雨うち！？いきなり何するの！？犬養元首相も死ぬ前に言  
つてたぞ！話せば分かる！」

「知ってるか？犬養元首相が死ぬ前に言った言葉は『痛くてたまん  
ねえや！医者を呼んでくれ！』らしいぞ」

「いや、知らないから！」

「歴史教師だろ！テメエー！！」

「知らないものは知らな……ぬうおあああああああ！！！！」

え、えつと、アレってスタンガンだよな？せ、先生呼んできたほうか

「……大河内」

「は、はひ！？」

ゆっくりとその場を立ち去ろうとしたのだが、長谷川に呼び止められてしまい、体は完全に硬直してしまった。

ギギギと錆びたロボットののように首を回すと、私を見ているアヌビス先生の死体？に片足を乗っけている長谷川の姿があった。

「お前は、何も、見ていない」

「え？あの……」

「お前は、何も、見ていない。OK？」

「OK」

「なら、行ってよし」

そう言っつて、アヌビス先生の体をズルズルと引きずって行きながら長谷川は去っていったけど……。

「死ぬかと思った」



それくらいの迫力はあった。もう二度とあんな姿は見たくない。

一体、何が長谷川を変えたんだろう？ 凄く気になるけど……やっぱり、知らないほうがいいと思う。主に、私の命的な問題で。

## 第十六話【始まるように始まらない（おバカな）レース！】

視点 アヌビス

「オペレーションIKASAMAを発動する。繰り返すオペレーションIKASAMAを発動する」

通信機で協力してくれている先生たちに連絡をとり、屋上から下にある物凄い歓声や応援の音が響いている校庭を見る。

しかし、またもや千雨つちのスタンガン攻撃のせいで、この世とあの世を行ったり来たりしたが、何で俺無事に帰ってこれたんだろう？

いや、嬉しいよ。帰ってこれたのは、でもそろそろ死ぬかもしれん。ああ、生きてるって、素晴らしい。

「てか、何で俺さつき殺されかけたの？」

「自分の胸に手を置いてよく考えな」

……………うん。無実…ではないな。有罪だよ。だから、スタンガン止めて。

「つーか、大丈夫なのか？その作戦使っちゃまって」

「大丈夫だろ。あいつら、殺しても死なないような連中だし」

「いやいやいや、お前じゃないんだから…」

失礼なことを言うな。確かに、スタンガン心臓に喰らっても何故か特に問題はないけど、それでも痛いものは痛いんだぞ。

そんな感じで二人で駄弁っていると、午後の部の最初の競技綱引きが始まるのだが、そろそろこちらもテコを入れさせてもらう。

ここで一つ今さらのことだが説明しよう。この体育祭は分かっている人もいるかも知れんがクラス毎の点数を競うモノだ。

そして例年通りにいけば、三年の何処かのクラスが優勝する……ハズだったらしいのだが、そこにウチのクラスの2 A 当時のは1 A がやってきたというわけだ。

結果は前にも話した通り、圧勝の一言に尽きるというわけだ。

ここで困ったのは先生方。普通なら三年を優勝させるハズが、なんと一年が優勝。この事實は、先生方の頭をかなり悩ませたらしい。そこで、一部の先生方は俺の計画に参加してくれたのだが、良いね。もう何と言うか、色々と楽でしようがない。

俺と千雨っちが半ば諦めかけていた学校のコンピューターへのアクセスも内部の手引きで簡単だったし、もう至れり尽くせりって感じだね。

……まあ、この計画が成功しても俺の取り分はほとんど無いんだけどね……。

だけどもまあ、成功させたいっちゃあ成功させたい。それに、2 A の連中にも負けるということを教えるのもいいかもしれないし……。

『こちら03、予定通り仕込みはOKです』

「おーし、ほんじゃあまあ………始めますか………」

視点 大河内アキラ

おかしい。何かがおかしい。いや、何かおかしいと聞かれても困るけど、何かがおかしい。

私たちは今、綱引きをやっていたんだけど…急に、そう急に引っ張っていた綱が重くなったような…いや、気のせいだと思うんだけど…。

結果は負けてしまった。だけど、総合順位は未だに私たちが一位。特に問題ない…そう思っていたんだけど…。

「チクシヨー！また負けたー！！」

「これで三連敗だよー！！」

そう、もう既に私たちは三回も一位を取れていない。どれもこれも、点数は入っているのだが、三年生の追い上げがすごい。

「超りーん！何とかしてー！」

「お門違いヨ。秘密道具はないネ」

「でも、一応点数的には大丈夫でしょ。まだ二位とは千点ぐらいもあるし…」

「そうそう！いきなり競技の得点が変わって、一万点とかないよね  
――！！」

「……………そういうのをフラグって言うんだよ」

長谷川が何かボソツと呟いてたけど、何か……………嫌な予感が……………。

『えー、ご来場の皆様にお伝えします』

……………ん？

『えー、生徒や保護者の皆様にお渡ししていた体育祭の冊子において誤りがありましたので、訂正させていただきます』

訂正？何かあったのかな？でも、残ってる競技は二つしか、ハードル走と例のXしかないけど……………。

『最後の競技…Xの一位の得点が百点と書かれてありますが……………誤りでした。』

正しくは、一万点でした。皆様に多大なご迷惑をかけたことを、深くお詫び申し上げます』

「……………え？」「……………」

一万点？何かの間違い？え？という事は

「……………Xで負けたら、二位だな。このクラス」

シンと静まり返っていた場に長谷川の声が妙に響き渡った。

そして、次の瞬間

「……………はいいいいいいいいいい！！！！！！……………？……………？……………」

「うるせー」

皆の声が一斉に響く。長谷川は耳を押さえて涼しい顔をしていたけど、そんな余裕がよくあるなあと思う。

「ちょ、拙いじゃん！私、ウチのクラスに食券百枚賭けてんだけど……！」

「私なんか全部だよー！！」

「ああもう！何をうるたえているのですか！？」

皆が混乱する中、委員長の声が届く。

「賭け事なんてしているのが悪いでしょう！それに、まだ私達は負けたわけではありません！一万点というのは少々おかしいですが、要は負けなければ良い話です……！」

委員長の言う通りだ。私達はまだ負けていない。

「……そ、そうだよね！よし、やったるぞー……！」

「……オー……！」

先ほどまでの混乱ぶりが嘘みたくに皆やる気に満ち溢れている。うん。やっぱり、2 Aはこうでなくちゃ。

視点 千雨

クラスメイトたちが騒いでいるのを他所に、私はその場をこっそり離れた。

ポケットに入れていた携帯を取り出してアヌビスに連絡を取った。

『もしもし?』

「私だ。連中、余計燃えてるぞ。大丈夫なのか?」

『んー、出場する奴はどんな感じだった?』

「ああ、委員長は普通にやる気あり、明石も同じく、桜崎と龍宮は普段通り、んで、アンカーの大河内は……頑張ろうって感じた」

『なるほど……。まあ、問題ないだろ。こっちは本命の3 Fの前にいるけど、皆絶好調って感じたな』

3 - F。それが私達の推しているクラス。倍率は十七倍、2 Aの次の本命と呼ばれている。

クラスの人間に運動部系のの部員が多く、現在の得点も総合順位二位だ。

「了解した。後、妨害も程々にしろよ。下手してバレれば、私たち終わりだぞ」

正直言つて、これはあんまり私は賛成しなくなかったのだが、状況が許さなかったからな……。

午後の部の競技、2 Aが出ている競技だけ光学迷彩スーツをつけているアヌビスや他の先生たちが色々とやっていたらしい。

『分かってるさ。まあ、最後にちよつとばつかやることがあるけどな…。程々にしとくよ』

「……やれやれだな。じゃ、また後でな」

『おつよ』

携帯をポケットにしまつてから私はため息をつく。  
正直言つて、勝てるかどうか…かなり不安だ。

視点 アヌビス

ヤベエ、やつちまつたよ…。

「どーすんだよ？怪我はそこまで酷い奴じゃないらしいけど…」

「待て待て待て、今考えてるんだ。後にしてくれ」

「んなこと言つたつて、大河内の奴もう出てるぞ」

分かつてるつて、分かつてるからちよつと黙つててくれ。

あー、まさか…いや、悔いても遅いな。

今俺は少しばかり後悔している。

先ほどのハードル走で、大河内のハードルの間の距離をほんの僅かに他のハードルと変えていたのだが、せいぜいハードルに足を引っ掛けるくらいだと思つていたのだが、まさか転倒するとは……。



「さいつてーのクスだな。お前」

「分かってるから……言わないでよ……」

「ええい、触るな！気色悪い！！」

そんなこと言わないでよ千雨っち……。

「ああもう分かったから、お前が反省している事は十分理解したから、だから離れる。私も言いすぎたから

（とはいえ、もう直ぐ始まるんだけどな……。あの時、足痛そうだったけど……大丈夫か？）」

アレ？こんな事考えたら駄目かもしれないけど、これで計画の成功率上がったんだじゃね？

不謹慎だけど、そう思ってしまった。だから千雨っち、反省しているから。そのスタンガンしまっ……アッ……！！！！！！

視点 大河内アキラ

「大丈夫？アキラ」

「うん。大丈夫だよ。ゆるな」

さっきのハードル走で私は転倒してしまった。

ハードルとハードルの間が少しおかしかったと思ったけど、それよりも今問題なのは、私の足だ。

転倒したときに足を挫いてしまった。  
だけど、今はそれ程問題じゃない。痛みも大して無いから問題ないはずだ。

ここで、私だけ退場なんてできない。

「まあ、何かあったらアヌビス先生辺りにでも頼めば？何だかんだで助けてくれそうだし」

「大丈夫だって、ホラ、ゆーな第三走者なんだから早く行きなよ」

「オツケー！アキラにバトンが行くときには、ウチのクラスはもう一位にしといてあげるから！タイタニックに乗ったつもりでいなよ！」

それ、沈むから。

ゆーなはそう言って自分のスタート位置に走っていったけど…。  
まだ嫌な予感がする。

『えー、これより！最後の競技、点数が一万点というどう考えてもネタだろ！と、ツッコミを入れたくなってしまう競技！Xを開始します！』

アナウンスの声に見ている観客の人たちの声援が大きくなる。

『では、今回の実況を努めさせていただきます報道部の朝倉と』

『解説の超鈴音ヨ。よろしくネ』

アナウンスの声が何処かで聞いたことがあると思ったら、やっぱり朝倉だった。

『さて、自己紹介がすんだところで競技のご説明に移りたいと思います。

この競技、Xですけども、え〜つい先ほど、正式名称が決まったとのことですので、発表したいと思います』

『は？先ほど？』

『はい、先ほどのことです。正確には、十分前とのこと』

『それ職務怠慢ヨ。減棒をオススメするネ』

『既に新田先生が動いているとのことです』

『早いネ。それで、名前は？』

『あ、はいはい、えっと、『ドキ 女子中学生の！スーパー誘惑障害物競走！』……とのことです』

『……………責任者出てくるネ』

誰が考えたんだろう？そんなタイトル…。

そんな感想を心の中で呟きつつも、まだ競技の準備が完全に終わっていないようで、朝倉と超の二人でトークを続けていた。待っていると、ふと私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「大河内、大河内」

「ん？あ、アヌビス先生？どうかしたんですか？」

いつの間にか、アヌビス先生と長谷川の二人が近くに来ていた。アレ？でもここってコース上のはずだからアヌビス先生はともかく、長谷川は来れないはずじゃ……。

「責任者の俺が許可したから万事問題なしだ」

先生が責任者だったんですか？それ以前に、どうして私の考えが…？

「俺がお前たちの担任だからさ（キリッ）」

…先生……正直、そんなにかっこよくありません。

「正確には『副』担任だけだな」

「そこは言わぬが華だろ？千雨っち」

「千雨っち言うな」

「あの……二人はどうしてここに？」

もうすぐ始まつちゃうから、早くコースの外に出ないと……。だけど、私がそう言うと、何故かアヌビス先生は急に歯切れが悪くなってしまったが、長谷川が肘でアヌビス先生の脇を突くと、何か申し訳なさそうな顔をして口を開いた。

「……………あゝ、その、アレだ。足、大丈夫か？」

「え？」

「嫌さ、さっきのハードル走でお前コケたる？それで、だ…」

……………心配してくれたんだ。

横で長谷川も頷いているし、心配……………かけちゃったかな？

「だ、大丈夫です。ちょっと捻っただけですし、特に問題ありません」

うん。大丈夫。少なくとも、この競技にだけは何とかなるはず…  
…本気を出さなければ、問題はない。

「そ、そうか？な、なら、いいんだけどさ…」

(ヤバいです。大河内の健気さに、俺、感動しちやいそいです) 「  
」(……………ここで大河内に、お前に怪我させた原因はこのバカのせいだ。って言ったたら、面白くなりそうだけど……………流石に、空気読むべきか) 「

『えー準備が整ってきたとのことですので、そろそろルールを説明したいと思います！』

「んじゃ、俺らそろそろ行くから。無理はするなよ」

「はい、二人ともわざわざありがとうございます」

「じゃ、頑張れよ」

「じゃ、後でな」

よし、二人がわざわざ来てくれたんだから、頑張ろう！

「」（悪いな大河内、俺たち（私たち）は、絶対にお前たちを優勝させたくない人間なんだ……ああ、良心が痛むねえ……）「」

視点 朝倉和美

さて、ルール説明ちやつちやとやりますか。

「では、ルールを説明させていただきます！

この競技は、第一から第五までの走者が、それぞれ四百メートルを走るのですが、先ほどのタイトルの通り、二百メートルの地点に、それぞれ誘惑ルームと書かれた個室があります。

選手は、自分のコースにある誘惑ルームに入っただいて、そこでお題を出されるとのことです。お題についてはこちらでもまだ知りませんので、ご了承下さい」

どう考えてもふざけているとしか考えられないような競技内容。

こりゃ、裏があるね。報道部の勘がそう言ってるよ。

さて、ウチのクラスは……初っぱなからかよ。このレース……駅前からスタートするとか……ホント、色々と考えてるんだねえ。

アレ？他のコース、全部三年とか、少し悪意を感じる。だけど、まあ何とか大丈夫でしょ。

「それでは、間もなく第一レースを始まります！」

最初は委員長か……頼むよ。

実況席に届くリアルタイムの映像の音声を聞きながら、私は自然と手を祈るように組んだ。

そして スタートの合図の音が、鳴った。

第十六話【始まるよつで始まらない（おバカな）レース！】（後書き）

おかしいなあ、これで終わるはずだったのに…。  
後もう一話あります。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6889t/>

---

彼は転生者ですか？いいえ、クローンです

2011年10月8日21時07分発行